

曲川遺跡発掘調査報告書

2004年度調査

2006

財団
法人 元興寺文化財研究所

序

元興寺文化財研究所は、人文と保存科学の二部門の組織をもって文化財の様々な調査研究を積極的に進め、40年を経て一定の評価を得る業績をあげてきました。近年、人文部門の考古学的発掘調査もその一環として各地で実施、いち早くその成果を報告書として刊行しております。

今回、奈良県橿原市曲川遺跡の調査も奈良県教育委員会文化財保存課ならびに橿原市教育委員会文化財課のご協議による依頼により平成16年度に発掘調査を行い、その結果、弥生時代の墓地を検出することができました。近畿で最も発見数の少なかった奈良県でも、ようやく方形周溝墓が発掘されはじめましたが、曲川遺跡では調査区域の北東部で中期初頭を中心とする大型遺構19基と、水路を隔てた西側に弥生時代末期から古墳時代初期の小型遺構11基が検出されました。これらは奈良盆地南部でも屈指の規模を誇るものであり、第一級の資料を提供することができました。

本書が、多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願ってやみません。

最後に、調査・報告にあたって多くの機関および関係者の方々にお力添えを賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

財団
法人 元興寺文化財研究所
所長 坪井 清足

例言

1. 本書は、コーナン商事株式会社（代表取締役 正田耕造）の届出をもとに、奈良県教育委員会および橿原市教育委員会から依頼を受けた（財）元興寺文化財研究所（理事長 辻村泰善）が、平成16年9月13日から平成17年3月1日にかけて、橿原市曲川町457-2ほか（四棟・下四戸）において実施した、大型店舗建設に伴う事前発掘調査（曲川遺跡2004年度調査）の報告書である。
2. 現地調査および整理作業の体制は第1章に記載したので参照されたい。
3. 本書掲載の実測図は、遺構については狭川真一、藤井章徳、岡田泰洋、吉田智史、春日伸康、西口智彦、船築紀子が作成したほか、一部を（株）かんこうに委託して航空写真測量によって行った。遺物実測図については大久幸世、清水依子、武田浩子、辻村希里子、仲井光代、福山博章、藤井が作成した。
4. 実測図の净書は大久、清水、武田、辻村、仲井、福山、藤井が行った。
5. 本書に掲載の写真図版は、遺構写真を狭川・藤井・岡田が撮影したほか、一部の写真を（株）かんこうに委託して撮影した。遺物写真是大久保治が撮影した。
6. 本書掲載の方位は、全て座標北を示すものとする。
7. 花粉分析・珪藻分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。
8. 本書で参考とした編年は以下の文献に依拠している。

弥生時代の土器；奈良県立橿原考古学研究所編 2003『奈良県の弥生土器集成』橿原考古学研究所
成果 第6冊
古墳時代の土器；寺沢薰 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第49集 奈良県立橿原考古学研究所
奈良時代後半～平安時代の遺物；三好美穂 1995「南都における平安時代前半期の土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』1995 奈良市教育委員会
瓦器椀；川越俊一 1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所（なお、実年代については森島康雄氏による補正を参考とする。森島康雄 1992「畿内産瓦器椀の併行関係と歴年代」『大和の中世土器』II 大和古中近研究会
9. 本書の執筆は、第1章第2節および第2章の石器に関する記述を船築（元興寺文化財研究所）、土器に関する記述の一部を佐藤亞聖（元興寺文化財研究所）、第4章第1節を角南聰一郎（元興寺文化財研究所）、2節を船築、3節を坪井満足、第3章を辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社）。その他を藤井が執筆し、編集は坪井の指導のもと藤井が行った。
10. 当該調査において出土した遺物は、橿原市教育委員会が保管し、実測図や写真については面当、（財）元興寺文化財研究所が保管している。活用されたい。

目 次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査の経過と調査体制	1
第2節 調査地周辺の地理・歴史的環境	2
第3節 曲川遺跡における既往の調査	5
第2章 発掘調査の成果	
第1節 調査区の基本層序	7
第2節 調査区の概要	12
第3節 検出遺構と出土遺物	15
第3章 自然科学的分析の成果	
第1節 調査地点の層序	97
第2節 分析試料	99
第3節 分析方法	99
第4節 結果	100
第5節 考察	105
第4章 考察	
第1節 大和の土器棺葬 曲川遺跡周溝墓13出土土器棺の位置付け	113
第2節 S P 252の評価をめぐって	123
第3節 曲川遺跡弥生中期周溝墓出土土器の一様相	129
第5章 総括	
第1節 検出遺構について	131
第2節 周溝墓群について	133
第3節 調査区内の自然流路について	135
第4節 調査のまとめ	137

報告する遺構の掲載ページ数

SK 19	P89	SD210	P34	SK537	P92	SB 635	P86	周溝墓11	P56
SE 28	P79 ~	SD220	P37 ~	SD540	P49 ~	SK638	P69	周溝墓12	P56
SR 30	P75 ~	SD230	P40	SD545	P50 ~	SK642	P69	周溝墓13	P56
SR 31	P75 ~	SD240	P63 ~	SR550	P51 ~	SK649	P69 ~	周溝墓14	P60
SD 40	P86	SP245	P16	SK554	P93	SK653	P70	周溝墓15	P61
SK 54	P94	SP247	P16	SE560	P83 ~	SK656	P71	周溝墓16	P61
SK 55	P94	SD250	P30	SK565	P71 ~	SK659	P92	周溝墓17	P61
SK 60	P92	SP252	P15	SE570	P74	SD661	P42	周溝墓18	P62
SK 70	P92	SD266	P22	SP574	P16	SK668	P92	周溝墓19	P62
SP 82	P89	SD271	P30	SE575	P84 ~	SE674	P75	周溝墓20	P77
SD 90	P16 ~	SD273	P30	SK580	P94	SK676	P92	周溝墓21	P77
SP 92	P89	SD275	P31	SK581	P93	SK677	P91	周溝墓22	P77
SA 96	P93	SD277	P31	SD585	P64 ~	SP682	P63	周溝墓23	P77
SD100	P19 ~	SD278	P40 ~	SK590	P68	周溝墓 1	P53	周溝墓24	P77
SD110	P22	SX282	P15	SD595	P66 ~	周溝墓 2	P53	周溝墓25	P77
SK119	P92	SD283	P42	SD600	P68	周溝墓 3	P55	周溝墓26	P78
SD120	P22 ~	SD505	P42	SD605	P68	周溝墓 4	P55	周溝墓27	P78
SD130	P23 ~	SD510	P43	SK606	P90	周溝墓 5	P55	周溝墓28	P79
SD140	P29 ~	SD520	P43	SD610	P66 ~	周溝墓 6	P55	周溝墓29	P79
SD160	P23	SP523	P89	SD615	P68	周溝墓 7	P56	周溝墓30	P79
SD180	P38 ~	SD525	P43 ~	SD620	P68	周溝墓 8	P56	素掘小溝	P86 ~
SD190	P31 ~	SD530	P64	SD625	P68	周溝墓 9	P56		
SD200	P34 ~	SD535	P49	SD630	P49 ~	周溝墓10	P56		

第1章 調査の経緯

第1節 調査の経過と調査体制

大型店舗建設に向けてコーナン商事株式会社（代表取締役 正田耕造）から発掘調査届が提出され、橿原市教育委員会が試掘調査を実施した結果、地下に埋蔵文化財が包蔵されていることが確認された。その結果に基づいて、奈良県教育委員会と橿原市教育委員会とで協議がもたれ、諸事情から本調査に関して（財）元興寺文化財研究所（理事長 辻村泰善）に依頼する旨で一致した。

平成16年9月、奈良県教育委員会から依頼を受けた（財）元興寺文化財研究所は、事業主と協議を行い、発掘調査および整理作業に関して契約を締結することとなった。現地での調査は、奈良県教育委員会、橿原市教育委員会の指導のもと、平成16年9月13日から平成17年3月1日まで実施した。

整理作業については、平成17年度を充て、元興寺文化財研究所において実施した。作業の途中、遺跡に対する理解を深め、広く情報を集める目的で、都合3回にわたり遺跡の概要報告（平成17年6月 近畿弥生の会 於：龍谷大学、平成17年11月 第11回近畿ブロック埋蔵文化財研修会 於：奈良県文化会館、平成18年2月 大和弥生文化の会第42回例会 於：橿原考古学研究所）を行った。本書の内容は、遺跡に対する調査者の最終的な見解であるため、整理途上の見解であるこれらの報告とは異なる場合があるが、異同のある場合は本書をもって正とする。なお、遺構の名称については変更はない。

現地調査および整理作業にかかる体制は以下のとおりである。

調査指導：奈良県教育委員会・橿原市教育委員会

調査機関：財団法人 元興寺文化財研究所

理事長 辻村 泰善

所長 坪井 清足

事務局長 奥洞 二郎

研究部長 狹川 真一（現地調査担当）

人文考古学研究室 室長 伊藤 健司

同 主任研究員 岡本 広義（現地調査担当）

同 同 佐藤 亜聖

同 専門研究員 藤井 章徳（現地調査担当）

同 同 船渠 紀子

現地調査補助員

岡田泰洋、小田真由美（以上元興寺文化財研究所）、春日伸康、西口智彦（以上奈良大学）、吉田智史（大阪大学大学院）

現地調査作業員

有限会社ワーケ（代表取締役 岩崎勇作）

整理作業補助員

大久幸世、清水依子、武田浩子、辻村希里子、仲井光代、寺岡希華（以上元興寺文化財研究所）、西口、福山博章（以上奈良大学）

現地調査および本書の作成にあたっては、曲川地区自治会および周辺住民の方々のほか、下記の諸機関・諸氏より多大なる御指導・御協力を賜った。(50音順敬称略)

(独)文化財研究所奈良文化財研究所、大和弥生文化の会、青木勘時、赤澤徳明、池田保信、今尾文昭、上垣幸徳、岡林孝作、川部浩司、小池香津江、齊藤明彦、清水昭博、清水真一、竹田政則、田中清美、露口真広、寺沢薰、寺前直人、平岩欣太、藤井整、藤田三郎、深澤芳樹、豆谷和之、光谷拓実

第2節 調査地周辺の地理・歴史的環境 (fig.1, 2)

橿原市は奈良盆地の南辺に位置し、市域の南側から東側にかけて、国見山より貝吹山・香久山を経て桜井市鳥見山へとつづく山地が横たわる。ここから、ほぼ等間隔に並んで北上する河川が市内を貫流し、それらの河川堆積に起因する扇状地、あるいは低地や自然堤防状微高地が、本市の北半分を構成している。

この橿原市の西端近く、大和高田市との市境近くに曲川遺跡は所在する。その範囲は、遺跡名の由来となっている曲川池を中心とする直径約400~700mにわたる地域が想定されており、現在の行政区画では、曲川町・新堂町・雲梯町・忌部町など、旧金橋村の広範囲に及ぶことになる。

付近には曾我川・葛城川という本の河川が流れしており、曲川遺跡はその中に位置している。池の北東から南方にかけて条里地割の乱れが確認できることから、この付近に旧流路があったことが推定できる。しかし現在では条里地割を踏襲した道路が東西南北に付けられており、水田の区画も基本的にこれに規制されている。

奈良盆地全体がそうであるように、この付近の土地は吉野川分水の過水以前は水不足に悩まされていた。そのような背景のもと、1879年に曲川村民の合力によって曲川池は築造されたが、2002年に埋め立てられ、現在は大型のショッピングセンターになっている。

曲川遺跡の周辺では、面的に発掘調査が実施されて遺跡の実態が明らかになっている例が少なく、特に縄文時代以前の遺構を伴う遺跡はほとんど知られていない。そのなかで、曲川遺跡第4次調査時に縄文時代晚期の土器棺が確認されたほか、南方約1.5kmの地点に位置する橿原市東坊城遺跡では後期・晚期の土坑が検出されている。また大和高田市西坊城遺跡では晚期前葉に營まれた墓地が確認されており、出土した土器の良質性といまって注目される資料である。

弥生時代、この遺跡の立地する曾我川・葛城川流域には多数の遺跡分布が確認でき、奈良盆地内の積極的な居住が定着したことを示している。曾我川が奈良盆地に流入する入り口に位置する越智地域では、段丘上に立地する橿原市新堀一遺跡を中心として、橿原市千塚山遺跡などが中期頃に形成され、曲川遺跡においても流路に井堰が形成されている。また、後期には橿原市忌部山遺跡などの高地性集落が営まれる。

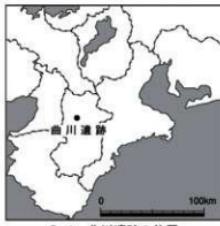


fig.1 曲川遺跡の位置

曾我川中流の扇状地上には、この地域の母集団と推定される橿原市中曾司遺跡、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて橿原市土橋遺跡が展開する。

一方、葛城川は中流域の扇状地以下では、曾我川との関係が明瞭に把握できず、両者は一つの流路を形成していた可能性がある。この葛城川の上流域では、葛城山麓に立地する御所市鶴都波遺跡を中心に、後期に営まれた御所市名柄遺跡や、高地性集落の御所市吐田平遺跡などが展開する。また名柄付近では水越川の谷口から、外縁付紐II式銅鐸および多鋸文鏡が出土している。

古墳時代には曲川遺跡において庄内式併行期の方形周溝墓が確認されており、また同時期の土器を包含する流路などが検出されている。しかしこの地域

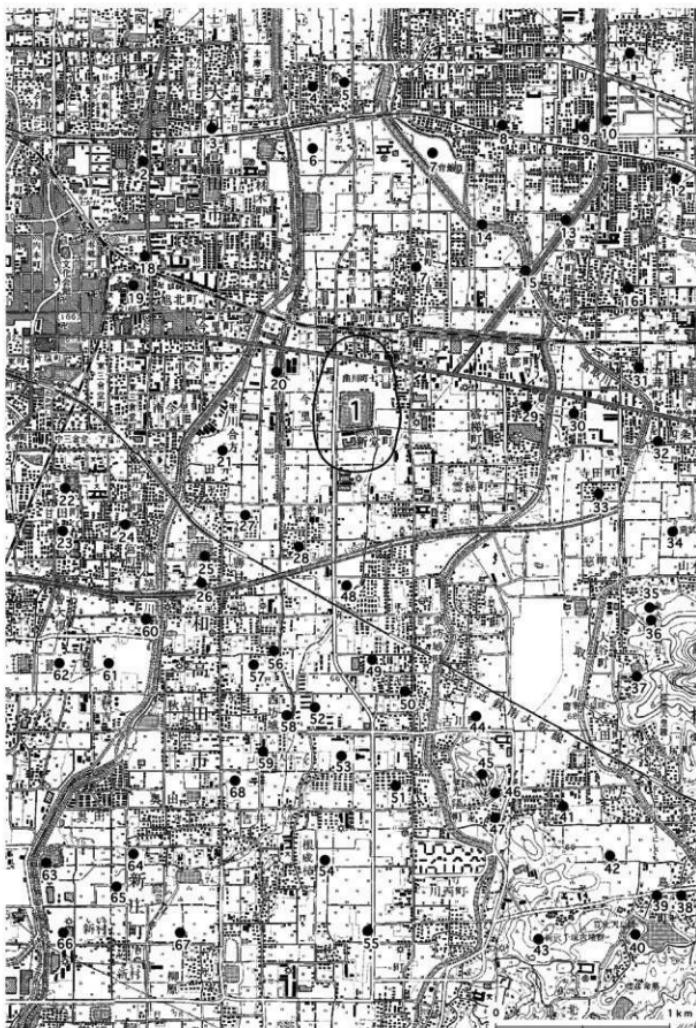


fig.2 周辺遺跡分布図

1. 曲川遺跡	18. 遺物散布地	35. スイセン塚古墳	52. 坊城遺跡
2. 遺物散布地	19. 高田城跡	36. 慶明寺跡	53. 柿の内遺跡
3. 遺物散布地	20. 遺物散布地	37. 遺物散布地	54. 宮ノ前遺跡
4. 松塚環濠	21. 遺物散布地	38. 塙内古墳	55. 萩之本遺跡
5. 遺物散布地	22. 三倉堂遺跡	39. 鳥屋遺跡	56. 遺物散布地
6. 遺物散布地	23. 遺物散布地	40. 鳥屋ミサンザイ古墳	57. 西坊城遺跡
7. サナハ遺跡	24. 遺物散布地	41. 寄峰遺跡	58. 遺物散布地
8. 中曾司遺跡	25. 遺物散布地	42. 千塙山遺跡	59. 遺物散布地
9. 墓ノ本遺跡	26. 遺物散布地	43. 新沢千塙古墳群	60. 遺物散布地
10. インデン塚	27. 遺物散布地	44. ワノギ古墳	61. 遺物散布地
11. 土橋遺跡	28. 新堂環濠	45. 忍部山遺跡	62. 遺物散布地
12. 北妙法寺環濠	29. 忍部環濠	46. 遺物散布地	63. 奥田池遺跡
13. 曽我遺跡	30. 門村古墳	47. 光陽環濠	64. 遺物散布地
14. 西曾我遺跡	31. 五井環濠	48. 西新堂遺跡	65. 遺物散布地
15. 芝ノ前遺跡	32. 車谷遺跡	49. 東坊城遺跡	66. 遺物散布地
16. 曽我陣屋跡	33. 寺田環濠	50. 東坊城環濠	67. 遺物散布地
17. 曲川環濠	34. 慧明寺遺跡	51. 遺物散布地	68. 遺物散布地

では古墳時代の集落の検出例が乏しく、継続する時期の遺跡は未確認である。

古墳時代中期になると曾我川左岸に位置する東坊城遺跡では、初期須恵器・韓式系土器といった渡来系の土器、鏡冶闇連遺物、祭祀闇連遺物などが出土しており、近辺に大規模な集落が存在することが予測される。同じく西坊城遺跡では、中期から後期にかけての水田および掘立柱建物が検出されている。曾我川の右岸に位置し、曲川遺跡の北東約1.5kmに所在する権原市曾我遺跡では、中期から後期の玉造を専業的に営む生産遺跡であることが明らかになった。古墳時代中期頃に曾我川水系を対象とした広域な開発の様子が伺える。

一方、曲川池周辺では從来古墳の分布が希薄で、前方後円墳は確認されていなかったが、近年の調査により、周辺地域に埋没古墳の存在が指摘されている。権原市教育委員会によって2001年度に実施された調査で、曲川池の東方で10数基からなる古墳群が確認されている。また北方約2kmに位置する大和高田市松塚北浦遺跡でも、周溝および多種類の埴輪を検出している。さらに西方約2kmに位置する大和高田市三倉堂遺跡では後期の木棺が6基出土している。木製品の多量出土で注目された権原市四条遺跡群や石見型鰐形埴輪を多量に有する権原市四条シナノ古墳群とともに、後期における開発の一様相を示しているといえる。

これに対して、曾我川の上流地域では、権原市新沢千塙古墳群が前期から連続と形成され、中期には本邦有数の渡来系文化を有する新126号墳が築造されるなど、上述の集落との関連が推定される。

飛鳥時代以降の様相を示す遺跡は、この地域では極端に少ない。7世紀後半には藤原京が造営されるが、近年の京域復元案に基づく限り、曲川遺跡は藤原京の西京極より西方へ約1km隔てている。

このように、曲川池を中心とする曾我川・葛城川扇状地域では、調査事例の僅少さにより必ずしも通史的に土地利用の変遷が把握できるわけではないが、近年蓄積されつつある資料は各時代の検討を進める上で非常に重要な位置づけがなされるものと期待される。

第3節 曲川遺跡における既往の調査 (fig.3)

曲川遺跡では、橿原市教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所によって、過去20次にわたり調査が行われてきており（北山2004）。今回が通算で第21次の調査となる。ここでは、本書で報告する調査の名称についてと、過去の調査概要について、手短にまとめておくこととする。

第1項 本書で報告する調査の名称について

曲川遺跡では上述の通り、過去数次にわたり調査が行われてきてはいたが、次数を番号で整理することがさえてきておらず、現地調査開始時には次数を冠した調査名称を与えることが困難な状態であった。このため現地調査では、同年度内に他機関による曲川遺跡の調査が行われていないことを確認した上で曲川遺跡における2004年度の調査という意図で「曲川2004」と呼称し、現地調査に間わる実測図名称などの情報を整理した。調査終了後に、橿原考古学研究所刊行の報告書（北山2004前掲）により、本書で報告する調査が21次に該当することが判明したが、名称の変更に伴う混乱を避けるために調査時の名称を尊重し、曲川遺跡2004年度調査として報告する。

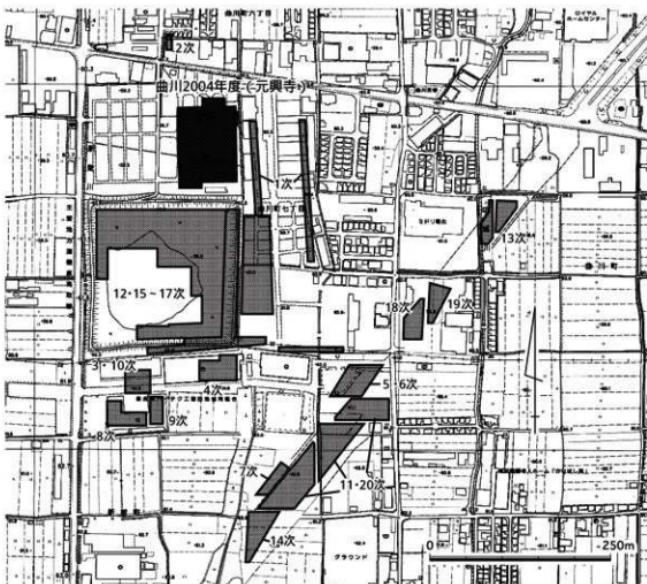


fig.3 曲川遺跡における既往の調査（調査次数は北山2004による）

第2項 過去の調査の概要

過去の調査内容については、参照した文献に詳しいため、逐一触れないこととするが、曲川遺跡では縄文時代晚期から中世までの遺構が検出されてきている。その内容は縄文時代晚期では包含層から多量の遺物が出土とともに土器宿屋が、弥生時代終末期では周溝墓群が、古墳時代では埴輪を伴う古墳群が、古代では庭敷地が、中世では多量の素掘小溝などが検出されている。しかしながら、検出される遺構は、質・量とともに時代的な偏りが大きく、特に弥生時代の遺構は流路内により多くの土器片が出土することから、その存在が強く想定されるにも関わらず、終末期の周溝墓以外は、まとまった遺構として検出されていない。また、曲川遺跡とされる範囲は非常に広く、東西・南北ともに700m以上もの拡がりを持っており、地区によって判明している情報量も大きく異なる。今回の調査地は、2次調査（橿原市教育委員会1988）を除いて過去に行われた中で最も北西に位置し、これまで広範囲な調査のメスが入ってきていない地区である。

隣接する地区の調査では、橿原考古学研究所によって1979年度に行われた調査（今尾1981）と、橿原市教育委員会によって2002年度に行われた調査（平岩・川部2004）が、本書に関係が深いものと考えられる。ただし、その関係については総括で触れることとする。

【曲川遺跡過去調査】

- 1次 今尾文昭 1981「橿原市曲川遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(1979年度) 奈良県立橿原考古学研究所
- 2次 橿原市教育委員会 1988「曲川遺跡の調査」『埋蔵文化財調査集報』
- 3次 橿原市千塚資料館 1987「曲川遺跡」『先人たちの遺産—昭和61年度発掘調査の成果から—』
- 4次 版口俊幸 1988「曲川」『大和を掘る』(1987年度発掘調査速報展) 橿原考古学研究所附属博物館
- 5次 橿本哲夫・佐々木好直 1990「奈良県橿原市新町 曲川遺跡第5~7次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(1989年度) 奈良県立橿原考古学研究所
- 6次 #
- 7次 #
- 8次 竹田政則・濱口和弘 1999「曲川遺跡の調査」『かしはらの歴史をさぐる』6 橿原市千塚資料館
- 9次 #
- 10次 #
- 11次 中井一夫・小山浩和 2000「京奈と自動車道大和区間用地内曲川遺跡試掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(1999年度) 奈良県立橿原考古学研究所
- 12次 平松良雄 2001「橿原市曲川遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』(2004年度) 奈良県立橿原考古学研究所
- 13次 川部浩司 2003「曲川遺跡 新在家地区的調査」『かしはらの歴史をさぐる』10 橿原市千塚資料館
- 14次 濱岡大輔 2003「曲川遺跡 馬場地区的調査」『かしはらの歴史をさぐる』10 橿原市千塚資料館
- 15次 平岩欣太・川部浩司 2004「曲川遺跡の調査」『かしはらの歴史をさぐる』11 橿原市千塚資料館
- 16次 #
- 17次 #
- 18次 濱岡大輔 2004「曲川遺跡 久保間地区的調査」『かしはらの歴史をさぐる』11 橿原市千塚資料館
- 19次 #
- 20次 北山峰生・松井一晃 2005「曲川遺跡」(奈良県立橿原考古学研究所調査報告第90集) 奈良県立橿原考古学研究所

第2章 発掘調査の成果

第1節 調査区の基本層序 (fig.4、6、7)

当調査区周辺は、最近まで木材集積地として利用されてきたため、トラック等の運行に耐えられるよう地表全体に舗装が行われていた。実際に、現地表面下約50~100cmは、大振りの礫により埋め戻されており、これは現代の舗装に伴う造成土と考えられる。また調査区内には、北寄りと南寄りに各1条ずつのコンクリート製の排水溝が設置されていた。地表下にはこの溝に関する造成も行われている。しかしながらいずれの造成も調査対象とした遺構面を破壊するほどの深さにはおよんでおらず、調査区内における基本層序の理解を妨げるものではない。

調査区内の基本層序は、調査区北半で概ね5層、南半は6層で構成される。調査区南北壁面図を参照しながら、最上層を第I層として上から順に解説を加える。

第I層（北壁第1層、南壁第1層）

調査区全域に普遍的に見られる。造成土の直下に堆積する土層で、青みがかった粘性の強いシルト質土で構成されている。砂粒の混入もほとんど見られない。詳細に観察すると、青みが強い上層と、より白みがかった下層に分けられるようである。一部の遺構ではこの土層と同質の土が埋土となっている。昭和初期の空撮写真によると近隣一帯が水田として利用されていたことが推定されるため、近代の水田耕作に関わる耕作土と考えられる。遺物はほとんど含まない。

第II層（北壁第2層、南壁第2層）

調査区全域に普遍的に見られる土層である。第I層の下層には基本的に伴っている。黄褐色の細粒砂を主体とし、大振りの礫は含まない。第I層の下層に普遍的に伴うことから、水田耕土の床土と考えられる。遺物はほとんど含まない。

第III層（北壁第3~7層、南壁3~7層）

調査区全域に普遍的に見られる土層である。小礫を若干含み、暗褐色を呈する細粒砂を主体とする。素掘小溝など中世の遺構埋土として見られるのもこの土層である。瓦器・土師器など13世紀ごろまでの土器が出土する。遺物は「暗褐色シルト層」と名付けて取上げている。

第IV層（北壁24・25層、南壁8・67・68層）

調査区北東に見られる土層である。素掘小溝など中世の遺構の基盤となる。周溝墓など弥生時代終末期以前の遺構埋土としても見られる。暗灰色から黒褐色を呈する細粒砂を主体とし、硬く緻っている。調査区の南側や西側には見られない。縄文時代晚期から弥生時代終末期の土器片が出土する。遺物は「黒褐色シルト層」と名付けて取上げている。

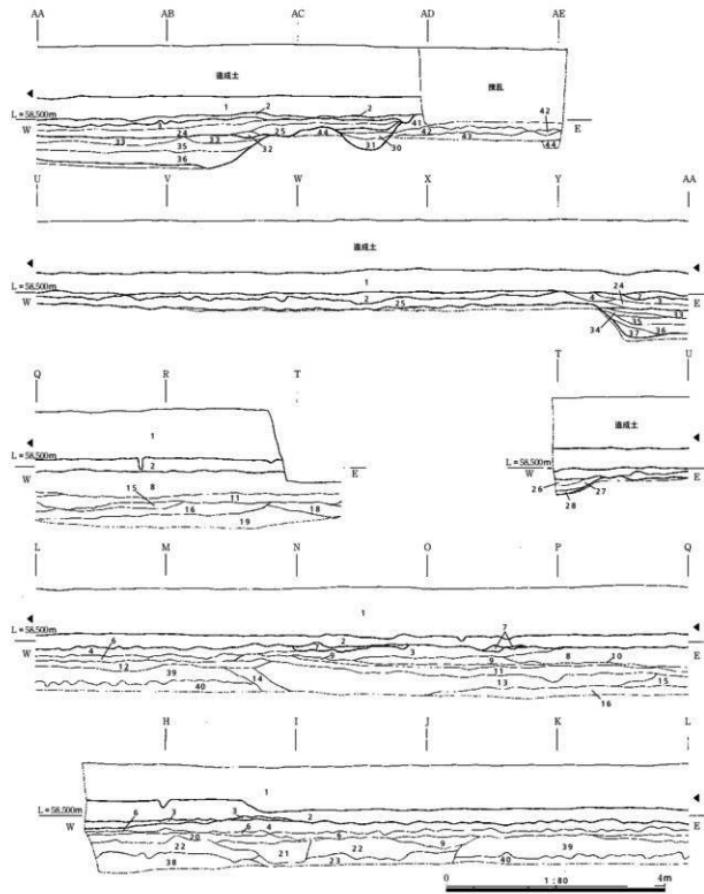
第V層（北壁第8~23層、南壁第8~17、25~66層）

調査区西侧に見られる土層である。周溝墓など弥生時代終末期以降の遺構を造成する。上層は灰褐色の粗粒砂から中粒砂を主体とし、下層は青灰色の粘性の強いシルト質土を主体とする。厚さ30cm内外の層が重なっており、流水による堆積を推測させる。調査区の西側半分を北流する幅の広い流路の埋土であり、調査区の東側には見られない。遺物はほとんど見られないが、弥生時代前期までの土器片が若干出土する。

第VI層（北壁第26~44層、南壁第69~106層）

調査区の東半に見られる土層である。弥生時代中期の遺構の基盤となる。灰褐色の中粒砂を主体とする。堆積の状態は第V層と近似しており、流水による堆積を推測させる。第VI層としている流路の岸に当たると考えられるが、安定した地盤ではなく、扇状地の氾濫原における堆積の一部と考えられる。土器片を若干含む。

第2章 発掘調査の成果



1. 緑灰(7.5Y5/1)シルト近代絶土。
2. 黒褐(2.5Y3/2)シルト - 粗粒砂に堆積(10YR3/4)粗粒砂を斑状に20%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
3. にぶい黄褐(10YR4/3)粗粒砂 - シルトに直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
4. オリーブ褐(2.5Y4/1)粗粒砂 - シルトに堆積(10YR3/3)粗粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
5. 黄灰(2.5Y4/1)シルトに黒褐(10YR3/2)粗粒砂を斑状に30%含む
6. 黒褐(2.5Y3/1)粗粒砂 - シルトに堆積(10YR3/4)粗粒砂を斑状に15%及び直徑0.5cmまでの小レキを30%含む
7. 黄褐(2.5Y3/4)粗粒砂 - シルトに褐(10YR4/4)粗粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
8. 茶(5Y6/1)中粗砂 - 粗粒砂
9. 黒灰(10Y3/2)粗粒砂 - シルトに直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
10. 墓灰(10Y3/1)シルトに褐(10YR4/4)粗粒砂を斑状に30%含む
11. 墓青灰(5G4/1)シルトに褐(10YR4/4)粗粒砂を斑状に20%含む

12. 増穂(10YR3/3)細粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 13. 灰(7.5Y6/1)粗粒砂 - 中粒砂
 14. 黒穂(2.5Y3/2)細粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 15. 黄灰黄(2.5Y5/2)粗粒砂 - 中粒砂
 16. オリーブ灰(5Y6/1)に黒穂(2.5Y3/1)シルトを含む
 17. 黄灰(2.5Y4/1)シルト - 細粒砂に褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に5%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 18. 灰黄(2.5Y6/2)粗粒砂 - 中粒砂に黄灰(2.5Y4/1)細粒砂を斑状に10%含む
 19. 灰(10Y5/1)粗粒砂 - 中粒砂
 20. 黒穂(10YR2/2)細粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 21. 黒穂(2.5Y3/1)細粒砂 - 中粒砂に増穂(10YR3/3)細粒砂を斑状に30%及び直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 22. 黒穂(2.5Y3/2)中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 23. 黄穂(2.5Y5/2)中粒砂 - 粗粒砂に黄灰(2.5Y4/1)粗粒砂を斑状に10%含む
 24. 灰(5Y4/1)シルトに褐灰黄(2.5Y4/2)細粒砂を斑状に20%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 25. 黄(2.5Y2/1)シルトに黒穂(10YR3/2)細粒砂を斑状に30%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 26. 黒穂(10YR3/1)シルトに増穂(10YR3/4)細粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを3%含む
 27. 黑(2.5Y2/1)シルトに褐(10YR3/4)細粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを3%含む
 28. オリーブ黒(5Y3/1)シルトに増穂(10YR3/3)細粒砂を斑状に10%含む
 29. 黒(10YR2/1)シルトに増穂(10YR3/4)細粒砂を斑状に10%含む
 30. 黒(2.5Y2/1)に増穂(10YR3/3)細粒砂を斑状に20%及び灰オリーブ(5Y6/2)シルトを直径3cmまでのブロックで10%含む
 31. 増穂(10YR3/3)シルトに増穂(10YR3/3)細粒砂を斑状に5%含む
 32. オリーブ灰(5Y6/1)に増穂(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 33. 黄灰(2.5Y4/1)シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に20%及び直径0.5cmまでの小レキを15%含む
 34. 増穂(2.5Y5/2)シルトに黄灰(2.5Y5/6)細粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 35. オリーブ黒(5Y3/1)シルトに直径0.5cmまでの小レキを3%含む
 36. 黒(2.5Y2/1)シルトに自然木破片を斑状に5%含む
 37. オリーブ黒(5Y3/1)シルト - 細粒砂にオリーブ灰(5G5Y1/1)細粒砂を直径5cmまでのブロックで20%含む
 38. 増穂(2.5Y5/2)粗粒砂
 39. 緑灰(10G5/1)シルト - 細粒砂に褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に15%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 40. 緑及(10G5/1)シルトに褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に5%含む
 41. 黒穂(10YR2/1)シルトに増穂(10YR3/3)細粒砂を斑状に20%含む
 42. 灰(5Y4/1)細粒砂に褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを3%含む
 43. にぐら(黄灰(10YR4/3)細粒砂に黄灰(2.5Y4/1)シルトを斑状に20%含む
 44. 黑(10YR2/1)細粒砂に灰オリーブ(5Y5/2)シルトを直径3cmまでのブロックで5%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む

fig.4 調査区北壁面図

出土遺物 (fig.5) 各層よりの出土遺物については、III・IV・V層は次節にて報告を行うため、ここでは第VI層出土遺物について報告する。

第VI層出土遺物 出土遺物のうち土器片4点について報告を行う。

鉢 1は口縁部の破片のみ残存する。

壺 2は広口壺口縁部破片である。外面に横方向のミガキを施す。3は肩部破片である。現状で3条のヘラ描沈線を施す。4は頭部破片である。現状で1条の刻目凸帯と2条のヘラ描沈線を施す。

出土する土器片はいずれも弥生時代前期以前の様相を示す。

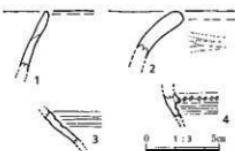
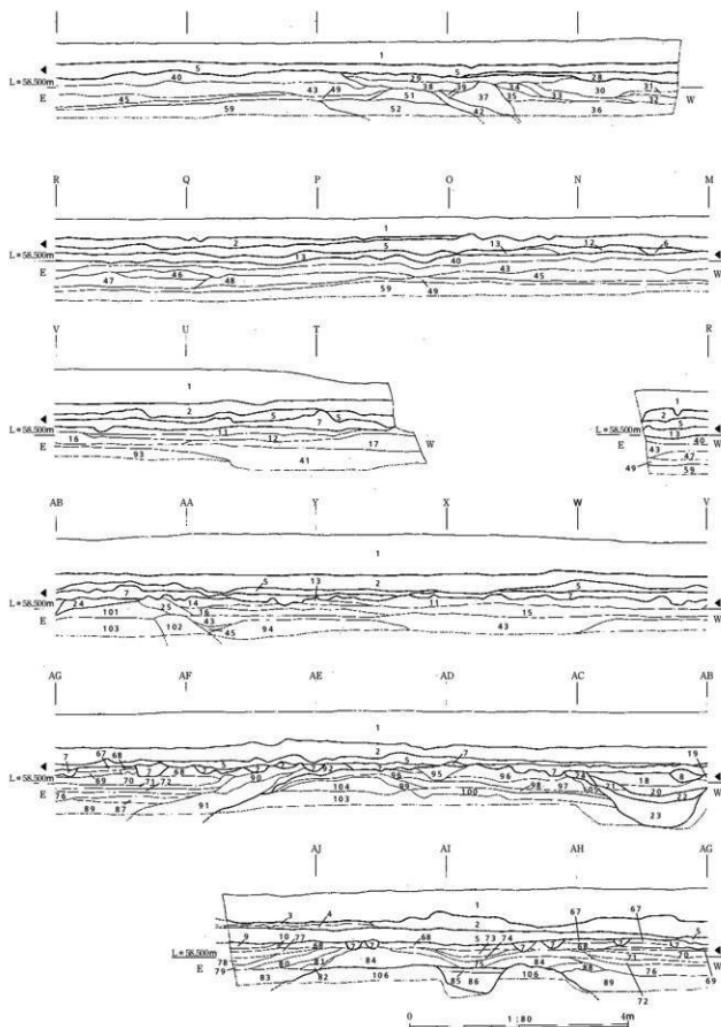


fig.5 確認トレンチ出土遺物

第2章 発掘調査の成果



1. 造成土
 2. オリーブ灰(10Y4/2)シルト - 粗粒砂に直径0.3cmまでの小レキを5%含む
 3. 灰(7.5Y5/1)シルト - 粗粒砂を15%含む
 4. 黄灰(2.5Y5/3)粗粒砂に黄(10Y4/6)粗粒砂を斑状に20%含む
 5. 黑褐(10YR2/2)シルト - 粗粒砂に直径0.3cmまでの小レキを5%含む
 6. 黑褐(2.5Y3/1)粗粒砂 - シルトに黒褐(10YR3/4)粗粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 7. 鳥取黄(2.5Y5/2)シルトに暗褐(10YR3/4)シルトを斑状に20%含む
 8. 暗褐(10YR4/1)粗粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 9. 黑褐(2.5Y3/1)シルト
 10. 雨灰黄(2.5Y5/2)シルト
 11. 暗灰(10YR4/1)シルト - 粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 12. 灰(7.5Y6/1)粗粒砂 - シルトに黄褐(2.5Y5/3)粗粒砂を斑状に40%含む
 13. 黑褐(2.5Y3/2)中粒砂 - 粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 14. 黄灰(2.5Y4/1)粗粒砂 - シルトに灰(5Y6/1)シルトを斑状に20%含む
 15. 灰(5Y6/1)粗粒砂に黄褐(2.5Y5/4)粗粒砂を斑状に30%含む
 16. 灰オリーブ(5Y6/2)シルトに灰(5Y6/1)粗粒砂を斑状に40%含む
 17. 灰オリーブ(5Y6/2)シルト
 18. 灰(7.5Y7/1)中粒砂 - 粗粒砂S-545南側のみの砂層(遺物なし)含む
 19. 灰オリーブ(5Y6/2)粗粒砂S-545南側のみの砂層(遺物なし)含む
 20. 灰(5Y6/1)粗粒砂 - 中粒砂に灰オリーブ(5Y6/2)粗粒砂を斑状に30%S-545南側のみの砂層(遺物なし)含む
 21. 黄灰(2.5Y6/2)粗粒砂に灰オリーブ(5Y6/2)粗粒砂 - 中粒砂を斑状に30%含む
 22. 白灰(10Y7/1)粗粒砂 - 中粒砂に灰(5Y4/1)粗粒砂を斑状に40%含む
 23. 黒(N2/2)粗粒砂 - シルトに明オリーブ灰(2.5Y7/1)中粒砂を斑状に30%含む
 24. 黑褐(10YR3/1)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 25. 黑褐(2.5Y3/2)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 26. 褐(7.5Y4/4)中粒砂 - 粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 27. 灰(7.5Y4/1)シルト - 粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを3%含む
 28. 黄褐(10YR4/1)粗粒砂に灰(5Y6/1)シルトを斑状に20%含む
 29. 灰(7.5Y5/1)粗粒砂 - シルトに褐(10YR4/6)粗粒砂を斑状に20%含む
 30. 黄灰(2.5Y5/1)中粒砂 - 粗粒砂
 31. 黑褐(2.5Y5/3)中粒砂
 32. 暗褐(10YR5/1)粗粒砂
 33. 暗灰(2.5Y6/2)中粒砂に黄褐(2.5Y5/4)中粒砂 - 粗粒砂を斑状に15%含む
 34. 雨灰黄(2.5Y5/2)粗粒砂 - 中粒砂
 35. 灰オリーブ(5Y6/2)中粒砂
 36. 灰(5Y6/1)粗粒砂 - 中粒砂に灰(10Y5/1)粗粒砂を斑状に10%含む
 37. 黄褐(2.5Y5/4)中粒砂
 38. 暗灰(10YR5/1)中粒砂 - 粗粒砂に褐(10YR3/6)粗粒砂を斑状に10%含む
 39. 黄灰(2.5Y6/1)中粒砂
 40. 灰(7.5Y4/6)粗粒砂 - 中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを3%含む
 41. 明灰(7.5YR5/6)中粒砂 - 粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを1%含む
 42. 暗灰(10G5/1)粗粒砂 - 中粒砂に黄褐(2.5Y5/3)粗粒砂を斑状に5%含む
 43. 明灰灰(10YR4/1)シルト
 44. オリーブ褐(2.5Y4/3)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 45. 灰オリーブ(5Y6/2)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 46. 黄灰(2.5Y4/1)中粒砂 - 粗粒砂に褐(10YR3/4)中粒砂を斑状に10%含む
 47. オリーブ褐(2.5Y4/3)中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 48. 灰白(5Y7/2)中粒砂 - 粗粒砂に褐(10YR4/6)中粒砂を斑状に30%含む
 49. オリーブ黑(7.5Y3/1)シルト
 50. 灰オリーブ(7.5Y5/2)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを3%含む
 51. 墓オリーブ(2.5Y3/3)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 52. 灰オリーブ(7.5Y4/3)粗粒砂に褐(10G5/1)をシマ状に10%含む
 53. 灰オリーブ(7.5Y5/3)中粒砂 - 粗粒砂に直径0.3cmまでの小レキを1%含む
 54. 墓オリーブ灰(5G7Y3/1)シルト - 粗粒砂
 55. 墓綠(7.5GY3/1)粗粒砂に直径0.1cmまでの小レキを3%含む
 56. 墓オリーブ灰(2.5GY4/1)粗粒砂に褐(10G5/1)をシマ状に10%含む
 57. 灰オリーブ(7.5Y5/2)粗粒砂に直径0.1cmまでの小レキを3%含む
 58. 墓綠(10YR4/1)中粒砂 - 粗粒砂に直径0.1cmまでの小レキを3%含む
 59. 墓オリーブ灰(2.5GY4/1)粗粒砂に褐(7.5GY5/1)を斑状に30%含む
 60. オリーブ黒(7.5Y3/1)シルト
 61. オリーブ黒(10Y3/1)シルトに直径0.3cmまでの小レキを3%含む
 62. オリーブ黒(7.5Y3/1)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 63. 黑褐(2.5Y3/2)中粒砂 - 粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 64. 黑褐(10YR3/1)中粒砂 - 粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 65. 墓灰(2.5Y4/2)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 66. 灰オリーブ(5Y4/2)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 67. 黄灰(2.5Y4/1)シルト - 粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 68. 灰(5Y5/1)シルト
 69. にじみ(黄褐(10YR4/3)シルト - 粗粒砂に灰(5Y5/1)シルトを斑状に30%含む
 70. 灰オリーブ(5Y6/2)シルト
 71. 黑褐(2.5Y3/1)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 72. 灰(5Y5/1)粗粒砂 - シルト
 73. オリーブ黒(5Y3/2)シルトを3%含む
 74. オリーブ(5Y6/2)シルトに褐(10YR4/6)シルトを斑状に10%含む
 75. 黄灰(10YR4/1)シルトに灰オリーブ(5Y6/2)シルトと直径3cmまでのブロッケで5%含む
 76. 黄灰(2.5Y4/1)粗粒砂 - 中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 77. 黄灰(2.5Y4/1)シルトを10%含む
 78. 黄灰(2.5Y4/1)シルトに灰オリーブ(5Y6/2)シルトを直径3cmまでのブロッケで5%含む
 79. 暗灰(3N3/2)シルトに灰オリーブ(5Y6/2)シルトを直径3cmまでのブロッケで20%含む
 80. 黑褐(2.5Y3/1)粗粒砂を15%含む
 81. 黑褐(10YR3/2)粗粒砂に暗灰(3N3)シルトを斑状に30%含む
 82. 黑(10YR2/1)粗粒砂に灰(2.5Y4/1)粗粒砂 - シルトを斑状に10%含む
 83. 暗灰(3N3)シルトに褐(10YR4/2)粗粒砂を斑状に15%含む
 84. 黑褐(2.5Y3/2)粗粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 85. 暗灰(2.5Y4/2)シルトに褐(3N3)シルトを斑状に20%含む
 86. 暗灰(3N3)シルトを5%含む
 87. 綠灰(2.5GY5/1)粗粒砂
 88. 灰(5Y4/1)シルトに暗灰(2.5Y4/2)シルトを斑状に15%含む
 89. 暗青灰(10B4/4/1)シルト
 90. 黑(2.5Y2/1)粗粒砂 - シルト
 91. 黑(3N2)粗粒砂 - シルトを5%含む
 92. 灰(5Y5/1)粗粒砂 - 中粒砂に黑(2.5Y2/1)粗粒砂を斑状に10%含む
 93. 綠灰(2.5GY4/1)粗粒砂 - 中粒砂
 94. 灰(2.5Y6/2)粗粒砂 - 中粒砂
 95. 灰(3Y7/1)粗粒砂に褐(10YR3/4)粗粒砂をシマ状に10%含む
 96. 黄灰(2.5Y6/1)粗粒砂 - 中粒砂に褐(10YR4/6)粗粒砂を斑状に20%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 97. 灰(5Y5/1)中粒砂に褐(10YR4/6)粗粒砂を斑状に40%含む
 98. 黄灰(2.5Y5/3)シルトに褐(10YR4/6)粗粒砂を斑状に30%含む
 99. 灰(5Y5/1)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを3%含む
 100. 暗灰(3N3)粗粒砂
 101. 褐(10YR4/4)中粒砂 - 粗粒砂に灰(2.5Y6/2)中粒砂を斑状に30%含む

第2章 発掘調査の成果

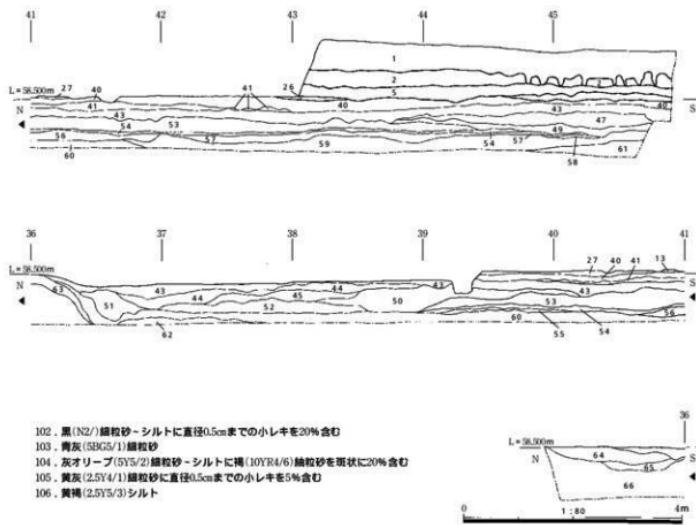


fig.7 調査区南確認トレンチ

第2節 調査区の概要

権原市教育委員会によって行われた試掘調査により、現代の造成土および第III層以上の土層については重機にて除去を行い、中世の素掘小溝が遺存する第IV層上面までの検出を行った。第1節で述べたように、第IV層上面では弥生時代以前の遺構は検出できなかったため、先行して調査を行っていた北東側3分の1については第IV層上面の調査が終了した時点で第IV層の除去を行い、第V層上面の遺構検出を行った。南側・西側では第IV層の堆積は見つかなかったため、直接第V層上面まで重機で掘削を行った。

検出作業の結果、縄文時代晚期から近代までの遺構を検出した。第3節では、各時代の成果について報告する。

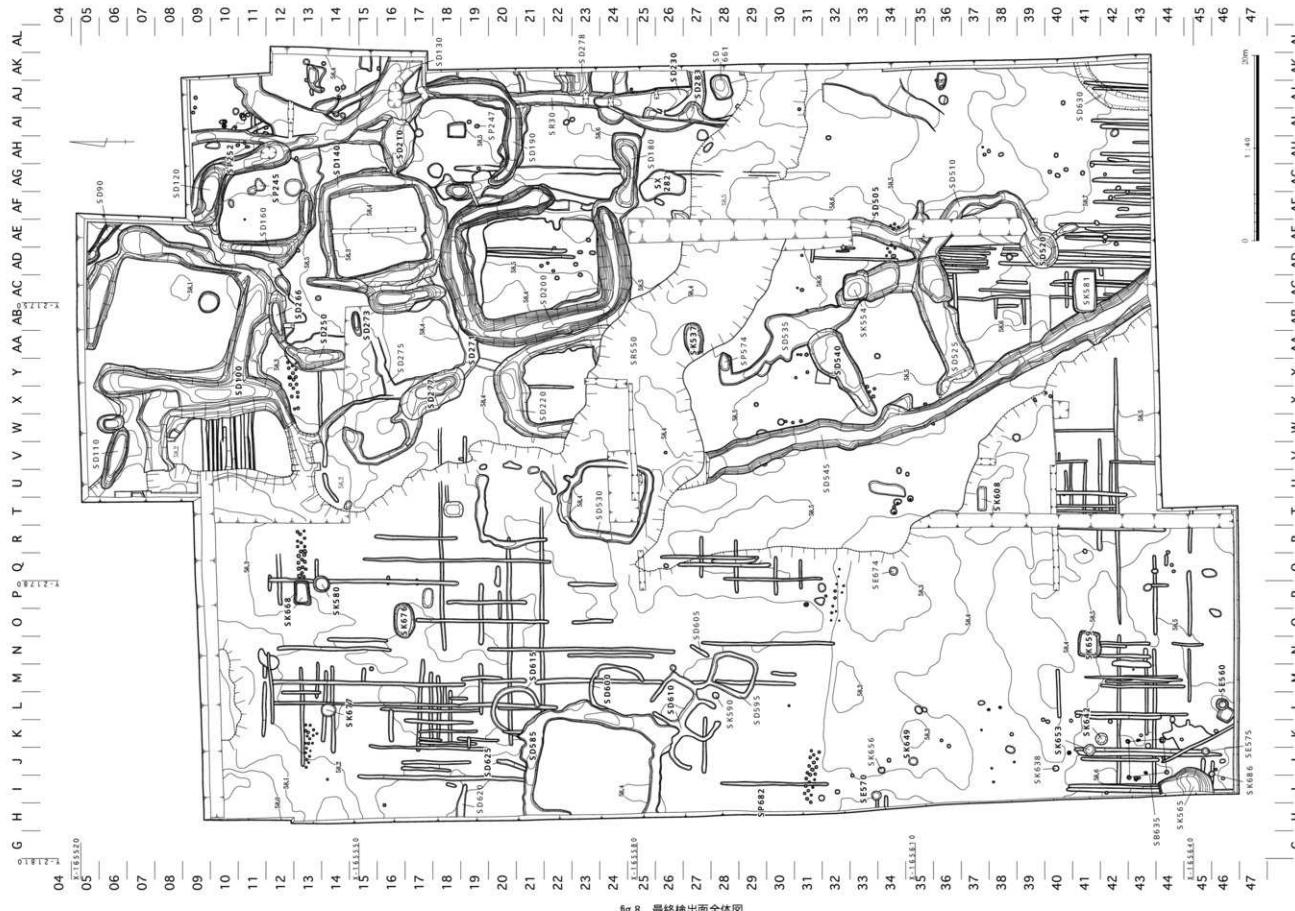


図8 最終復元面全体図

第3節 検出遺構と出土遺物

第1項 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代晩期に該当すると考えられる土器片は、調査区内の各所より検出されているが、確実にこの時代に位置づけられる遺構はほとんど確認できなかった。

SX282

遺構 (fig.8) AF・AG-25・26区より検出した。埋甕と考えられる。埋土および基盤となる土も粗粒砂であったため、明確な遺構の外形は確認できなかった。土器も劣化により非常に脆弱な状態であったため、良好な状態で検出することはできなかったが、深鉢が正立した状態で据えられていたようである。

遺物 (fig.9) 深鉢が1点出土している。

鉢 1は深鉢である。下半部の一部が遺存したものと思われる。復元径は破片の屈曲度合いから算出したものである。外面に密な条痕が観察できる。

第2項 弥生時代前・中期の遺構と遺物

弥生時代の遺構は調査区内の各所より検出されている。これらのうち、後述するSR550に先行する遺構を弥生時代中期の遺構と位置づけて報告する。遺構は主として調査区東半から検出されており、ピット、溝がある。

(1) ピット

調査区の東半分より検出された。埋土内より特筆すべき遺物が出土している4例について報告する。

SP252

遺構 (fig.8) AH-11区で検出されたピットである。南北に長い楕円形を呈する。長軸約0.5m、短軸約0.3m、深さ約0.2mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土は黒色細粒砂を主体とする。埋土内には木炭を含む。埋土中より多量のサヌカイト剥片が出土した。なおSP252より多量の剥片が出土することの位置づけについては、第4章において考察を行っている。

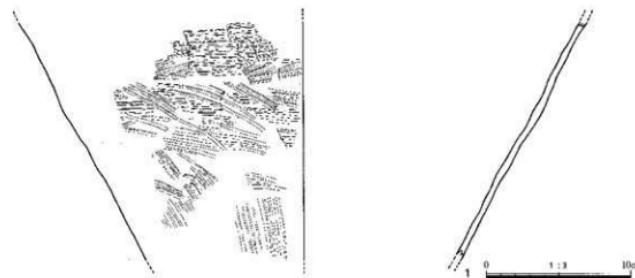


fig.9 SX282出土遺物

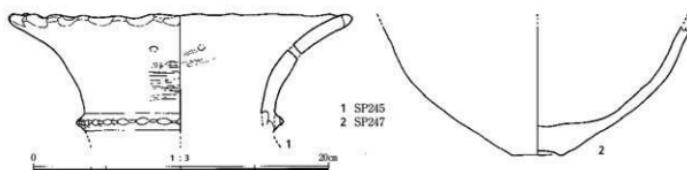


fig.10 SP245・247出土遺物

SP245

遺構 (fig.8) AG-11区より検出されたピットである。東西に長い楕円形を呈する。長軸約1.2m、短軸約1.1m、深さ0.3mを測る。底部断面は「U」字形を呈する。埋土は黒褐色の細粒砂を主体とする。埋土中の底部付近より、土器片がまとまって出土する。

遺物 (fig.10) 出土遺物のうち土器1点について報告する。

壺 1は広口壺破片である。口縁端部から頸部にかけて遺存する。口縁端部は押圧によって波状に成形する。頸部には1条の貼付凸帯を有するが、同じく押圧によって凹凸を有するように成形されている。口縁部には径約6mmの穿孔が施されている。外面の調整は横方向のミガキを施す。大和第1様式に位置づけられる。

SP247

遺構 (fig.8) AI-19区より検出されたピットである。検出径約0.6m、深さ約0.3mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土中より土器片が出土する。

遺物 (fig.10) 出土遺物のうち土器1点について報告する。

甕 2は甕である。底部のみ残存する。外底面は凹面をなす。内外面ともに摩滅が激しく、調整は観察できない。

SP574

遺構 (fig.8) Y・AA-28区より検出したピットである。東西方向に長い楕円形を呈する。SD535に切られる。検出面では遺構の輪郭が認められたが、埋土がSD535と近似してあり、良好に検出することができなかった。長軸約1.2m、短軸約1.1mを測る。埋土中より壺口縁付近の比較的大きな破片 (fig.47-3) が出土しているが、上述の通りSD535との間に帰属が明確にしがたい。従って遺物はSD535に帰属させることとし、報告もSD535の箇所で行うこととする。

(2) 溝

調査区の北東側を中心として検出された。調査の進展とともに、周溝墓を巡る周溝であると認識するに至ったが、調査開始時では認識が不十分で蛇行する溝として調査を行ったこと、および隣り合う周溝墓同士で溝を共有する場合があり周溝墓主丘部への溝の帰属が曖昧な場合があることから、一旦溝として報告し、溝の配置などを総合的に検証した上で、周溝墓として認定した遺構について後述することとする。

報告の順番は、番号ごとではなく、調査区の北側から行うこととする。

SD90

遺構 (fig.11) AD・AE-5・6区で検出された溝である。ほとんどが調査区外へと続いており、全体像は不明である。検出面幅0.6~1.2m、深さ約0.3~0.5mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈し、底面は凹凸が見られる。埋

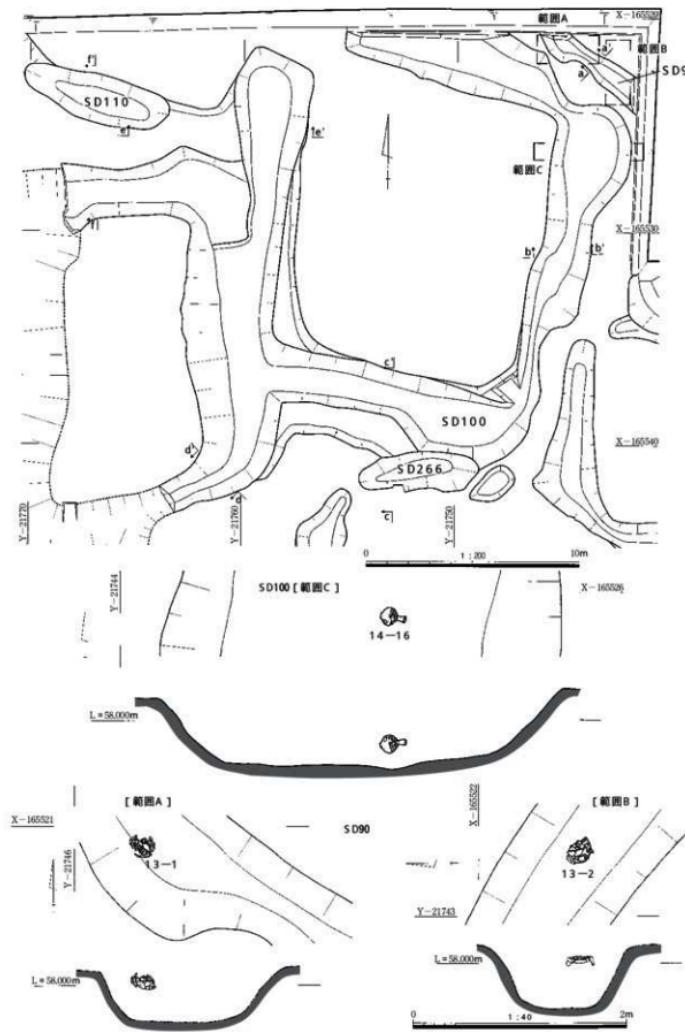
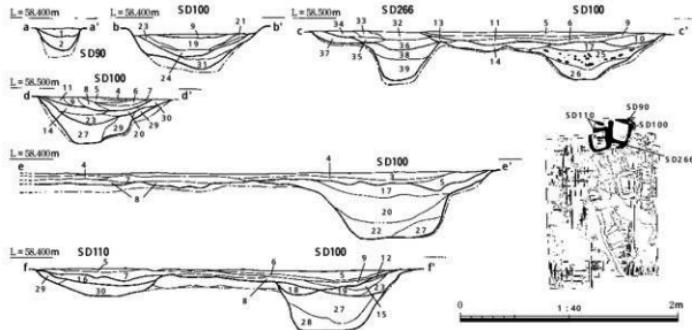


fig.11 SD90・100・110・266平面・遺物出土状況図



- SD90**
1. 黒(N2)に暗灰(10YR3/3)粗粒砂を斑状に20%及び灰オリーブ(5Y6/1)シルトを斑状3cmまでのブロックで10%含む
 2. 暗灰(N3)シルトに暗緑(10YR3/3)粗粒砂を斑状に5%含む
 3. 黒(10YR3/1)シルトに褐(10YR4/4)粗粒砂を斑状に20%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 4. 黒(10YR2/1)シルト～細粒砂に直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 5. 褐(10YR4/2)シルトに暗化物を斑状3cmまで含む
 6. 黄灰(5Y4/1)シルトに灰オリーブ(5Y6/2)シルトを直径2cmまでのブロックで10%及び化物を厚さ2cmまでで10%含む
 7. 灰(5Y1/1)粗粒砂～シルトに黒褐(2.5Y3/2)粗粒砂を斑状に20%含む
 8. 灰(5Y1/1)粗粒砂～シルトに褐(10YR4/6)粗粒砂を斑状に20%含む
 9. 灰(2.5Y5/1)粗粒砂に褐(10YR4/6)粗粒砂を斑状に20%及び直径0.5cmまでの小レキを15%含む
 10. 暗灰(N3)粗粒砂に褐(10YR4/4)粗粒砂を斑状に15%及び直径0.5cmまでの小レキを15%含む
 11. にぶい黄(2.5Y6/3)粗粒砂に黄灰(2.5Y4/1)粗粒砂を斑状に10%及び自然木破片を5%含む
 - SD100青灰色シルト層
 12. 灰(5Y4/1)粗粒砂～シルトに褐(10YR3/4)粗粒砂を斑状に5%及び暗緑(2.5Y5/2)粗粒砂を斑状に5%含む
 13. 暗灰オリーブ(5Y6/2)Y4/1シルト
 14. 灰オリーブ(5Y6/2)粗粒砂に黒褐(2.5Y3/2)粗粒砂を斑状に40%含む
 15. 灰(10Y4/1)粗粒砂～シルトに暗灰(2.5Y5/2)粗粒砂を斑状に20%含む
 16. 灰(10Y4/1)シルト～粗粒砂に褐(10YR3/4)粗粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 17. 暗灰(10YR3/3)粗粒砂～中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 18. 灰白(2.5Y7/2)粗粒砂に暗灰(N3)粗粒砂を直径5cmまでのブロックで40%含む
- SD100**
19. 灰(10Y5/1)シルトにオリーブ灰(5GY6/1)シルトを直径3cmまでのブロックで10%及び厚さ3cmまでの化物を厚さ1cmまでで含む
 20. 黄灰(2.5Y6/1)粗粒砂に灰(5Y5/1)中粒砂～細粒砂を斑状に10%含む
 21. 灰(10Y5/1)シルトに素化物を斑状に20%含む
 22. 線縞灰(10G4/1)シルトに直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 23. 暗青灰(5B4/1)細粒砂～シルトに褐(10YR4/6)粗粒砂を斑状に5%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 24. 暗灰(N3)粗粒砂に自然木破片を5%及び化物を5%含む
 25. 線縞灰(10G3/1)シルト～細粒砂に直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 26. 線縞灰(10G3/1)粗粒砂～中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
- SD100黑色シルト層**
27. 暗灰(N3)粗粒砂
 28. 灰(2.5Y5/1)粗粒砂に自然木破片を5%含む
 29. 黒(2.5Y5/1)中粒砂～灰(5Y5/1)細粒砂を斑状に30%含む
 30. 灰(N5)中粒砂～粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 31. 黑(2.5Y4/1)細粒砂に褐(10YR4/6)中粒砂を斑状に10%及び緑灰(7.5GY5/1)粗粒砂を斑状に10%含む
 - SD266褐色シルト層
 32. 黒(2.5Y4/1)シルトにオリーブ質(5Y6/4)シルトを直径3cmまでのブロックで5%及び厚さ0.5cmまでの小レキを10%含む
 33. 黑(2.5Y4/1)粗粒砂に褐(5Y5/1)細粒砂を斑状に30%含む
 34. 褐灰(10YR4/1)粗粒砂に黒褐(10YR2/1)シルトを斑状に30%含む
 35. 暗灰(N3)シルト～細粒砂に黒褐(2.5Y3/2)シルトを斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 36. 暗灰(N3)シルトに灰白(5Y7/2)シルトを直径3cmまでのブロックで20%含む
 - SD266黑色シルト層
 37. 灰(2.5Y4/1)粗粒砂に黒褐(2.5Y3/2)細粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを15%含む
 38. 暗灰(N3)粗粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%及び自然木破片を3%含む
 39. 暗灰(N3)粗粒砂

fig.12 SD90・100・110・266土層断面図

土は概ね2層で、上層より黄灰色シルト層（第1層）、青灰色シルト層（第2層）である。黄灰色シルト層はブロックの混じる比較的の粗い土質で、層の下端からは、横倒しになって潰れた状態で細頸壺と甕が出土している。青灰色シルト層は砾をほとんど含まないシルト質で水性の堆積状況を示し、遺物をほとんど含まない。掘削後暫く湛水し

た状態で埋没（青灰色シルト層）

し、その後周囲からの崩落で埋没したものの（黄灰色シルト層）と考えられる。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物（fig.13） 出土遺物のうち、土器2点について報告する。

壺 1は小型の細頸壺である。出土状況図〔範囲A〕に示されるのはこの個体である。口縁端を欠損するほかは、ほぼ完形に接合可能である。球形の胴部と細くしまった頸部を持つ。外面の調整は胴部下半では横方向のミガキを、胴部上半ではミガキのち櫛描文を施し文様間にミガキを施す。内面の調整

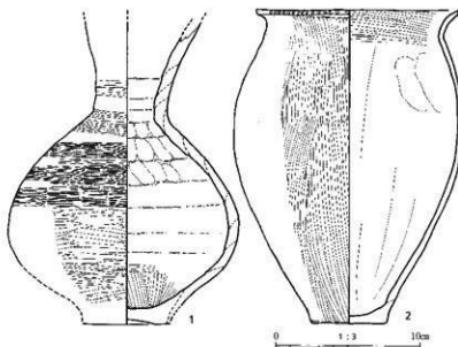


fig.13 SD90出土遺物

はナデのち胴部下半部に縱方向のハケを施す。外面に、頸部下半に現状で1帯、胴部上半で4帯の櫛描直線文を施す。櫛描1単位あたり、いずれも8~10条で構成される。大和III-1様式に位置づけられる。

壺 2は小型の大和形甌である。出土状況図〔範囲B〕に示されるのはこの個体である。ほぼ完形に接合可能である。やや膨らんだ胴部と、あまり外反しない口縁を持つ。口縁端部には1cmあたり3~4の刻目が施されている。外面の調整はナデのち縱方向の粗いハケを施している。内面の調整は、胴部を縱方向のナデで、口縁部をナデのち横方向のハケを施している。大和II-3様式に位置づけられる。

SD100

遺構（fig.12） U-AE-5-12区で検出された溝である。北側の一部が調査区外にのびていること、西端が流路SR550によって破壊されている以外は、良好に検出できた。溝は直線的にのび直角に曲がる屈曲部を持つ。検出幅1.2~4.4m、深さ0.3~0.7mを測る。断面形態は「U」字形を呈し、底部は北東隅の一部を除いて平坦である。埋土は概ね3層で、上層より黄灰色シルト層（第3~11層）、青灰色シルト層（第12~26層）、黒色シルト層（第27~31層）である。黄灰色シルト層・青灰色シルト層は、ブロックの混じる細粒砂を主体とし、埋土中より完形に近い大きな破片の土器が出土する。特に青灰色シルト層下端からは、完形の細頸壺が横倒しになった状態で出土した。黒色シルト層は礫をあまり含まないシリト質土を主体とし自然木破片・土器小片を含む。鋤削後暫く湛水した状態で埋没（黒色シルト層）し、その後周囲からの崩落で埋没したもの（青灰色シルト層・黄灰色シルト層）と考えられる。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物（fig.14、15） 出土遺物のうち土器13点、石器1点について報告する。

黄灰色シルト層出土土器（fig.14）

壺 1は広口長頸壺である。口縁端部から胴部上半まで遺存する。なだらかにのびた頸部と外反する口縁部を持つ。外面の調整はナデのち櫛描直線文を施し文様間にミガキを施す。内面の調整はナデのち頸部上半は横方向のハケを施す。外面頸部に5帯、胴部上半に現状で4帯の櫛描直線文を施したのち、胴部に縱方向の櫛描直線文を現状で2カ所施す。櫛描1単位あたり、いずれも8~10条で構成される。土器の特徴より東海地方の撿入土器と考えられる。

2は壺破片である。底部のみ残存する。摩滅のため調整は詳らかでないが、外面には横方向のミガキを施すよう

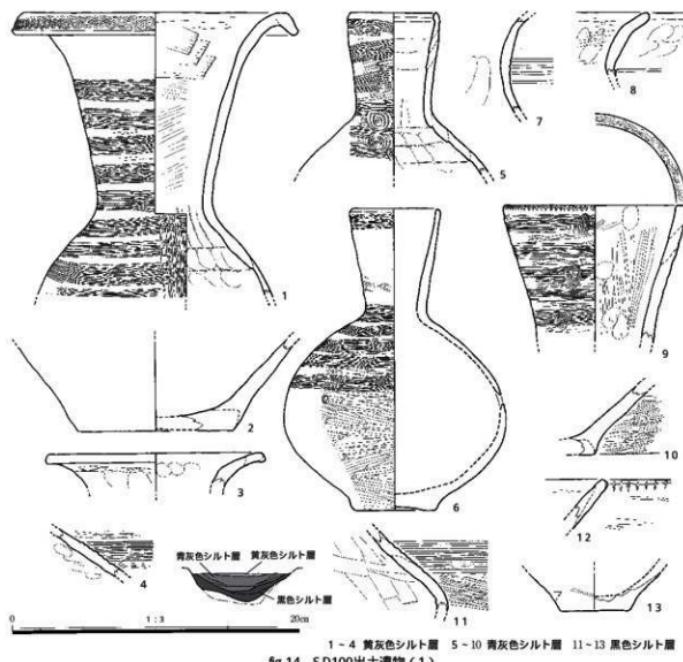


fig.14 SD100出土遺物(1)

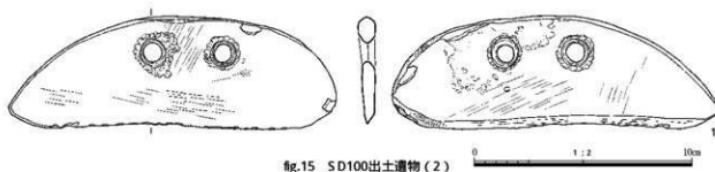


fig.15 SD100出土遺物(2)

である。3は広口壺破片である。口縁部の一部のみ残存する。口縁端部は若干肥厚する。外面の調整はナデののち横方向のミガキを施し、内面の調整はナデを施す。4は壺頸部片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。5条のヘラ描次線を伴う削出凸帯を施す。

青灰色シルト層出土土器 (fig.14)

壺 5は細頸壺である。口縁部から胴部上半までが遺存する。細くしまった頸部を持つ。外面の調整は櫛描直線文のち文様間にミガキを施し、その後櫛描扇形文を施す。内面の調整はナデである。外面の文様は、頸部に5帯、

胴部に2帯以上の櫛描直線文を施した後、胴部では直線文間に扇形文を施す。櫛描1単位あたり、いずれも8~10条で構成される。

6は細頸壺である。出土状況図〔範囲C〕に示されるのはこの個体である。口縁端部を若干破損する以外は完形である。球形の胴部と細くしまった頸部を持つ。外面の調整は胴部下半は横方向のミガキを、胴部上半はミガキのち櫛描文を施し文様間にミガキを施す。完形品のため内面の調整は観察できないが、頸部内面はナデを施しているようである。外面の文様は、頸部に3帯以上、胴部上半に4帯の櫛描直線文を施す。櫛描1単位あたり、いずれも8~10条で構成される。胴部中ほどには直径約1cmの焼成後穿孔を施す。大和第II-3様式に位置づけられる。

9は細頸壺である。口縁部から頸部にかけて遺存する。口縁端部には1cmあたり2~3の刻目を施す。外面の調整は櫛描文のち文様間にミガキを施し、その後櫛描扇形文を施す。文様は口縁端部上面に櫛描波状文を施し、頸部に現状で5帯の櫛描直線文を施したのち直線文の上に1帯おきに扇形文を施す。櫛描1単位あたり、口縁端部では4条、頸部ではいずれも8~10条で構成される。大和第II-3様式に位置づけられる。

7は壺の頸部である。4条のヘラ描沈線を施す。8は壺の口縁部である。外面の調整はナデを、内面の調整は横方向のミガキを施す。外面下端には削出凸帯の上辺が遺存する。10は壺の底部である。外面の調整は縱方向のハケの後、横方向のミガキを施す。

黒色シルト層出土土器 (fig.14)

壺 11は壺胴部である。外面の調整は横方向のミガキを、内面の調整は粗いナデを施す。上半には8条のヘラ描沈線を施す。12は壺口縁部である。口縁端部には1cmあたり2の刻目を施す。13は壺底部である。表面の摩滅が激しいが、外面の調整は横方向のミガキを施しているようである。

青灰色シルト層出土土器 (fig.15)

石包丁 14は緑泥片岩製の磨製石包丁である。全体に丁寧な研磨を施す。刃面は腹面側にのみに存在する。紐部は敲打によって窪みをつけたのち、穿孔を行う。紐部の径は8mmである。背面側の刃部中央部分に微細剥離痕が存在する。

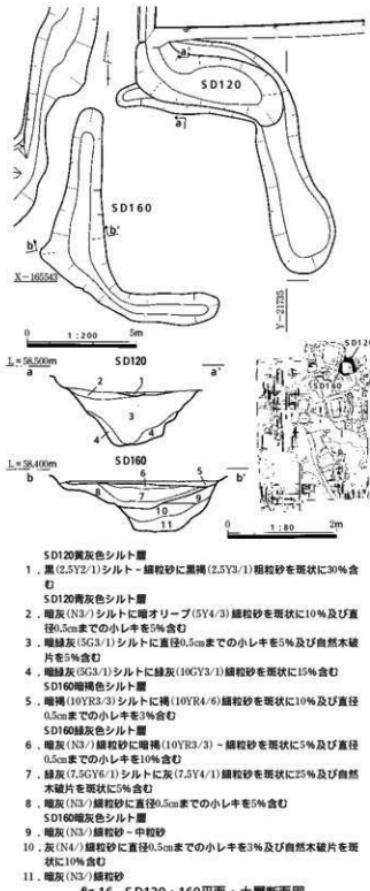
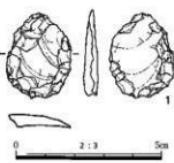
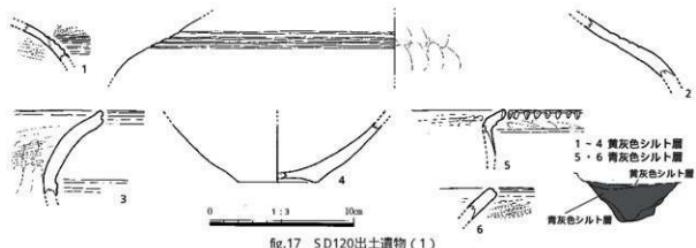


fig.16 SD120・160平面・土層断面図



SD110

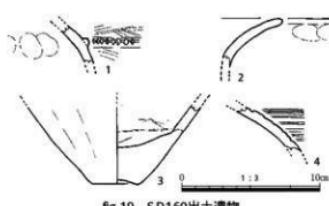
遺構 (fig.12) U-W-6区で検出された溝である。南側の肩がSD100の一部にかかる。検出部の幅約2.2m、深さ約0.6mを測る。断面形態は「U」字形を呈し、底部は平坦である。埋土はSD100と共に通しておらず、埋没プロセスを同じくしていないと考えられる。土器小片を含む。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

SD266

遺構 (fig.12) AA-AE-12区で検出された溝である。北側の肩がSD100にかかる。検出長約5.6m、幅約1.8m、深さ約0.5mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈し、底部は平坦である。埋土は概ね2層からなり、上層より黒褐色土層（第32～36層）、黒色シルト層（第37～39層）である。黒褐色土層はブロックの混入する細粒砂を主体とする。黒色シルト層は暗灰色の細粒砂を主体とし、自然木の破片を含む。掘削後暫く湛水した状態で埋没（黒色シルト層）し、その後周囲からの崩落で埋没したもの（黒褐色土層）と考えられる。土器小片を含む。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

SD120

遺構 (fig.16) AE-AH-9-12区で検出された溝である。直線的にのびる部分と、直角に曲がる部分からなる。鉤括弧状に屈曲した溝は調査区画の北側へとのびており全体像は不明である。検出幅2.0～3.2m、深さ約0.3～0.8mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈し、底部にはレベル差が見られる。埋土は概ね2層からなり、上層より黄灰色シルト層（第1層）、青灰色シルト層（第2～4層）である。青灰色シルト層には、自然木の破片・土器小片を含む。屈曲部より北側のトレンチ外へと続く溝は、屈曲部より南側とは底面に大きなレベル差が確認でき、鉤括弧形の溝が握り込みを共有していると推測される。埋土からは掘り返した様子は確認できず、同時に並存か浅い溝が深い溝に先行すると推測される。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。



遺物 (fig.17, 18) 出土遺物のうち土器6点、石器1点について報告する。

黄灰色シルト層出土土器 (fig.17)

壺 1は壺胴部である。外面の調整は横方向のミガキを、内面の調整は横方向のナデを施す。外面に5条のヘラ描沈線を施す。2は壺胴部である。外面の調整は横方向のミガキを、内面の調整はナデを施す。肩部に4条のヘラ描沈線を施す。3は壺口縁部である。外面の調整は横方向のミガ

キを、内面の調整はナデのち横方向のミガキを施す。口縁端部外面に1条のヘラ描沈線を、頸部に現状で1条のヘラ描沈線を伴う削出凸帯を施す。4は壺底部である。外底面が凹面をなす。

青灰色シルト層出土土器 (fig.17)

壺 6は壺口縁部である。口縁端部に1条のヘラ描沈線を施す。

甕 5は甕口縁部である。口縁端部に1cmあたり2の刻目を、屈曲部に1条のヘラ描沈線を施す。内面の調整は横方向のミガキを施す。

各層出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であり、溝の埋没時期を示すものとは考えられない。

黄灰色シルト層出土土器 (fig.18)

石罐未製品 1は石罐未製品である。背腹両面に素材面を残すが、腹面側には主要剥離面が大きく残存する。基部から体部にかけて両面調整されているが、切先は調整されていない。剥片の形状は腹面右側が厚く、側辺から切先にかけて形成等の調整ができなかったことから、未製品段階で廢棄されたと考えられる。

SD160

遺構 (fig.16) AD～AF-10～13区で検出された溝である。直線的にのびる部分と、直角に曲がる部分からなる。検出幅1.5～3.2m、深さ3.2～4.8mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈し、底部は平坦である。埋土は概ね3層からなり、上層より暗褐色シルト層（第5層）緑灰色シルト層（第6～8層）、暗灰色シルト層（第9～11層）である。3層ともブロックを含まないシルト質土を主体とするが、緑灰色シルト層には、ほとんど遺物が含まれず、暗灰色シルト層には、自然木の破片と土器小片を含む。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.19) 出土遺物のうち土器4点について報告する。

壺 1は壺胴部である。外面の調整は横方向のミガキを施す。1条の刻目凸帯を施す。2は壺口縁部である。口縁端部にはゆるい面を持つ。3は壺底部である。底径は小さく、強く外傾する。外底面に凹面を持つ。4は壺胴部である。7条のヘラ描沈線を施す。3条のヘラ描沈線に上下を挟まれて貼付凸帯を施すが、凸帯は剥離し、割付のヘラ描沈線のみ確認できる。

出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であり、溝の埋没時期を示すものとは考えられない。

SD130

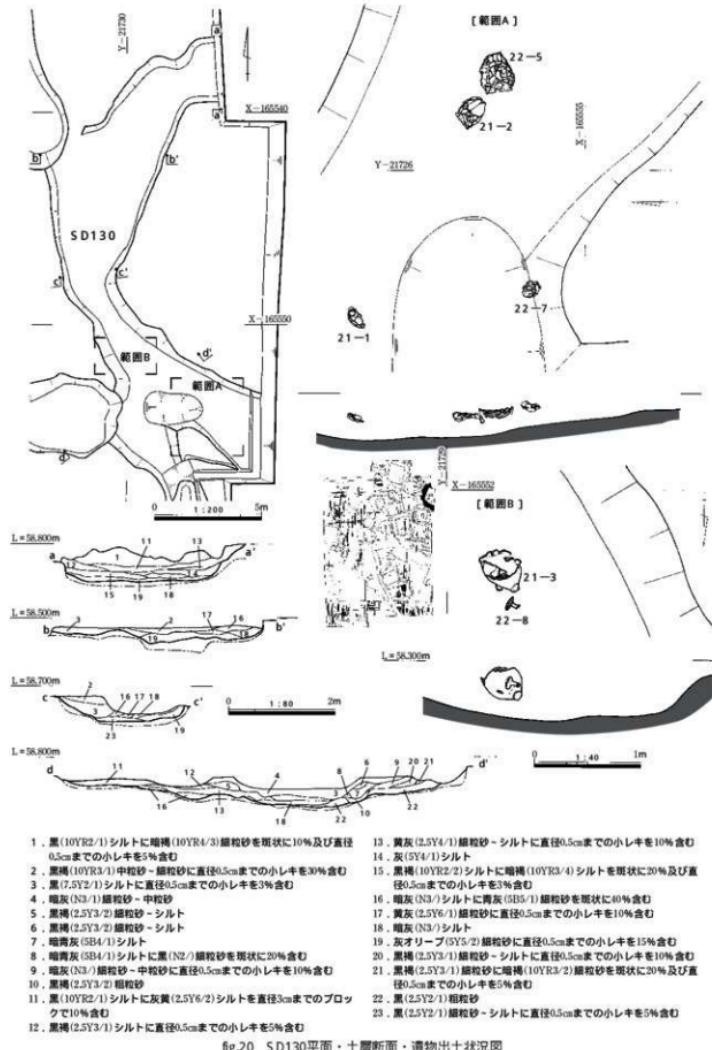
遺構 (fig.20) AH～AK-11～17区で検出された溝である。東端部は調査区外になるため、全体の形状は不明であるが、検出部分の形状は「コ」字状を呈する。検出幅1.8～3.6m、深さ約0.2mを測る。肩から底部に向けてだらかに傾斜する。底部は概ね平坦である。埋土は黒褐色の中粒砂を主体とし、底部には青灰色のシルトが堆積する。掘削後湛水した状態で堆積し、その後暫く流水を伴う溝として機能していたと考えられる。溝の西部では後述するSR30が窪みを共有して流れているようで、黒色系の粗粒砂が複雑な堆積をみせる。底部の青灰色シルト層上端より完形に復元できる土器が多く検出されている。図 (fig.20) 中〔範囲A〕からは甕2点と無頸甕が、〔範囲B〕からは甕と台付鉢が出土している。いずれも横倒しの状態で出土しており、完形の状態で横倒しになった後、土圧等の要因により破損したと考えられる。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig. 21、22) 出土遺物のうち土器7点について報告する。

甕 1は四分形甕である。出土状況図〔範囲A〕に示されるのはこの個体である。8割程度まで接合復元が可能である。球形に膨らんだ体部と短く立ち上がる口縁部を持つ。外面の調整は口縁部近くまで斜位のケズリを施す。内面の調整はナデを施す。

2はほぼ完形に接合可能である。出土状況図〔範囲A〕に示されるのはこの個体である。球形に膨らむ胴部と強く

第2章 発掘調査の成果



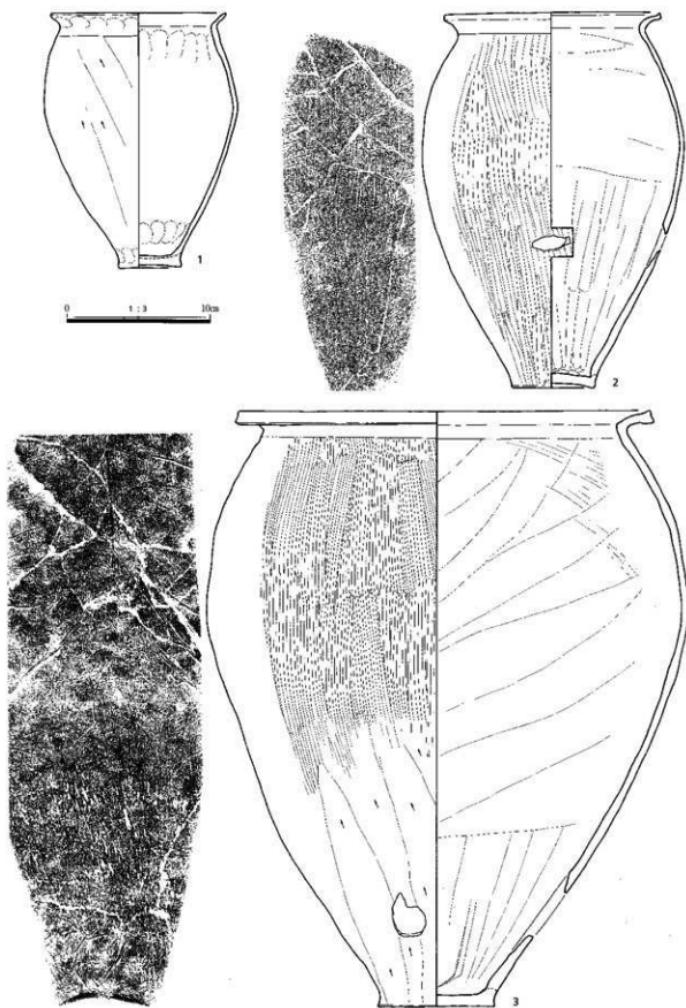


fig.21 SD130出土遺物(1)

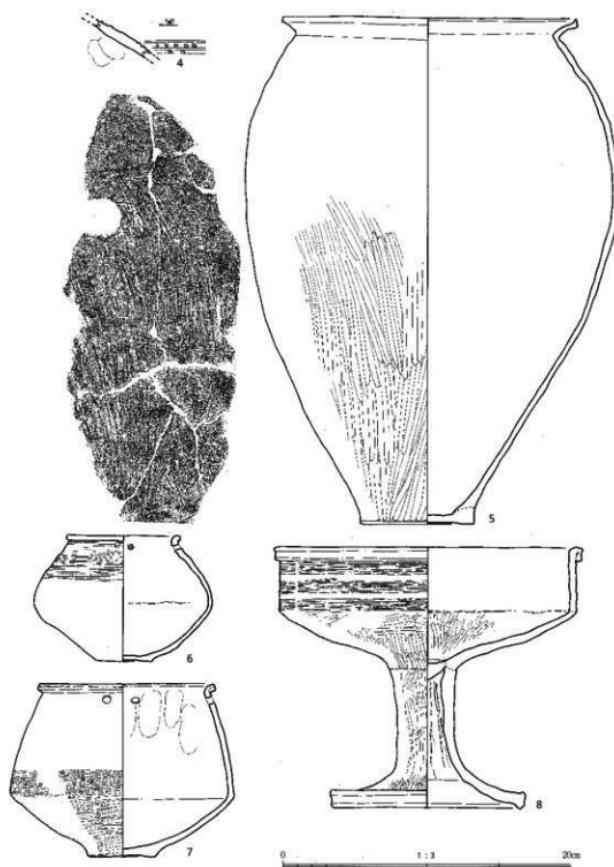


fig.22 SD130出土遺物(2)

屈曲する口縁部を持つ。外面の調整は口縁部はヨコナデを、上半部は縱方向のハケを、下半部にハケののち縱方向のミガキを施す。内面の調整は口縁部はヨコナデを、上半部は横方向のナデを、下半部は縱方向のナデを施す。胴部下半部に長径約2.5cmの焼成後穿孔を施す。大和第III-3様式に位置づけられる。

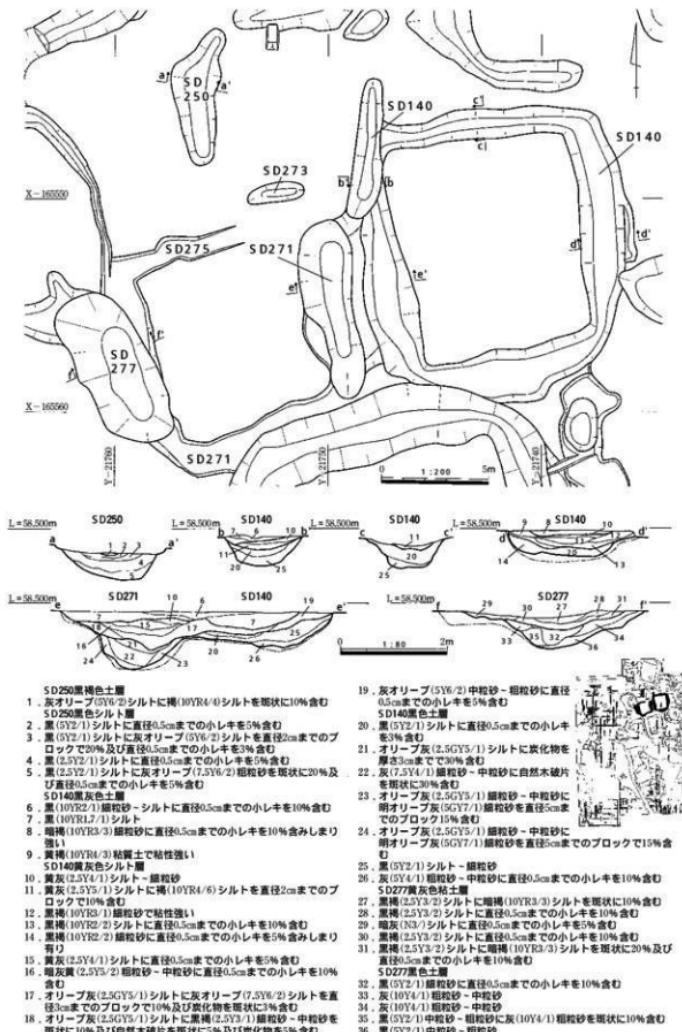


fig.23 S.D. 140 - 250 - 271 - 273 - 277 平面 - 土層断面図

3はほぼ完形に接合可能である。出土状況図〔範囲B〕に示されるのはこの個体である。球形に膨らむ胴部と強く屈曲する口縁部を持つ。外面の調整は口縁部にヨコナデを、胴部上半に縱方向のハケを、下半に縱方向のケズリを施す。内面の調整は口縁部にヨコナデを、胴部上半に斜め方向のハケを施す。胴部下端に直径約3cmの焼成後穿孔を施す。大和第III-2様式に位置づけられる。

5はほぼ完形に接合可能である。出土状況図〔範囲A〕に示されるのはこの個体である。球形に膨らむ胴部と強く屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は上方に突出する。外面の調整は口縁部はヨコナデを、胴部上半に縱方向のハケを、下半に縱方向のミガキを施す。大和第III-3様式に位置づけられる。

鉢 8は台付鉢である。鉢部の大半を欠損する。出土状況図〔範囲B〕に示されるのはこの個体である。まっすぐに

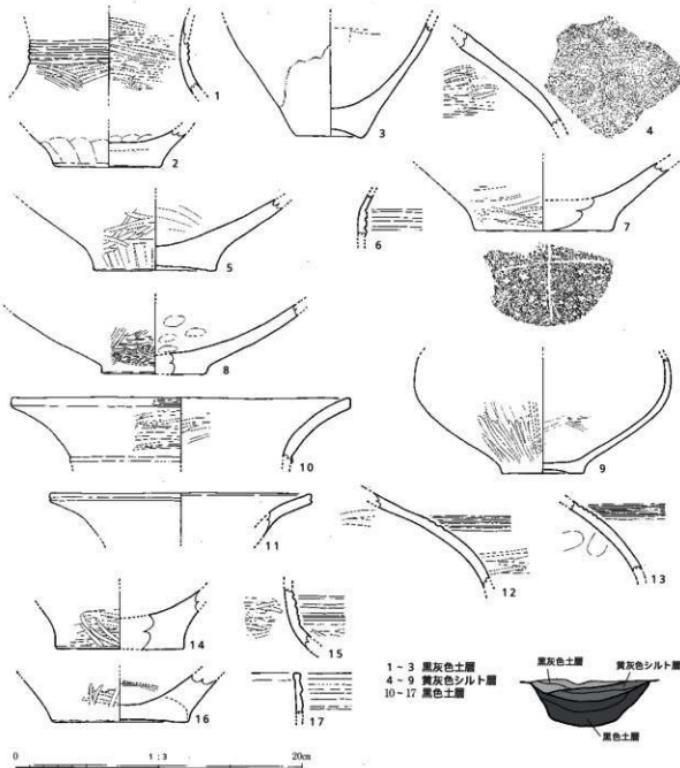


fig.24 SD140出土遺物(1)

立ち上がる口縁部と円柱状の脚部を持つ。口縁端部は短く折り返す。鉢底部は円盤を充填する。外面の調整は口縁部はヨコナデを、鉢底部は縦方向のミガキのち横方向のミガキを、脚部は縦方向のミガキを、脚端部はヨコナデを施す。内面の調整は口縁部はヨコナデを、鉢底部は縦方向のミガキを施す。文様は口縁部に3帯の櫛描直線文を施す。櫛描1単位当たりいずれも6条で構成される。大和第III-2様式に位置づけられる。

壺 6は無頸壺である。ほぼ完形に接合可能である。やや膨らむ扁平な胴部を持つ。口縁端部は短く折り返す。口縁端部には径約4mmの孔が、約2cm間隔で2つ穿孔されている。外面の調整は胴部下半に縦方向のミガキを施す。文様は胴部上半に3帯の櫛描直線文が施される。櫛描1単位あたり8~9条で構成される。大和第III-3様式に位置づけられる。

7は無頸壺である。ほぼ完形に接合可能である。出土状況図(範囲A)に示されるのはこの個体である。やや内傾した口縁部を持つ。口縁端部は短く折り返す。口縁端部には径約4mmの孔が2つ穿孔されている。外面の調整は胴部下半は横方向のミガキを施す。文様は摩滅により全体を把握できないが、胴部最大径の直上に2帯の簾状文を施す。櫛描1単位当たり7から8条で構成される。大和第III-3様式に位置づけられる。

4は壺腹部破片である。3条のヘラ描沈線間に竹管文を4mm間隔で施す文様を2帯以上有する。

SD140

遺構 (fig.23) AC~AG-13~18区で検出された溝である。直線部分と直角に屈曲する部分からなり、ほぼ東西南北に各辺を向け正方形にめぐる。北西隅は北側に突出している。検出幅1.2~2.4m、深さ約0.6mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底部は平坦である。埋土は概ね3層で、上層より黒灰色土層(第6~9層)、黄灰色シルト層(第10~19層)、黒色土層(第20~26層)である。黒色土層は僅かにブロックを含み、黄灰色土、黒灰色土はブロックをあまり含まない灰色系のシルト質土を主体とする。掘削後溝肩の崩落により埋没した後、湛水した状態で堆積したものと考えられる。各層より土器小片が、黄灰色シルト層より石礫が出土している。北西隅の突出部は、連続する、東西・南北の溝と若干のレベル差があり、方形にめぐる本体の溝と、短い溝が掘り込みを共有していると推測される。埋土の状態からは先後関係を推測することはできなかった。周溝墓をめぐる溝と考えられる。

遺物 (fig.24, 25) 出土遺物のうち、土器17点について報告する。

黒灰色土層出土土器 (fig.24)

壺 1は頸部である。調整は内外面ともに横方向のミガキを施す。現状で3条のヘラ描沈線を伴う削出凸帯を1帯施す。

器種不明 2は底部片である。底部外面上には縦方向の粗いミガキを施す。3は底部片である。表面の摩滅が激しく調査は判然としない。外面には黒斑が見られる。

黄灰色シルト層出土土器 (fig.24)

壺 4は胴部片と考えられる。内面の調整は横方向のミガキを施す。文様は現状で1帯の櫛描直線文と3つの櫛描円形文が施されている。櫛描1単位あたりいずれも8~9条で構成される。円形文は櫛描開始点が目立たないよう丁寧に施されている。大和第III様式に位置づけられる。

9は壺腹部と考えられる。球形の胴部を持つ。外面の調整は縦方向のミガキを施し、内面の調整は横方向のハケを施す。

器種不明 5・7は底部片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。8は底部片である。底部が若干突出する。外側の調整は横方向のミガキを施す。6は頸部片と考えられる。2条のヘラ描沈線を伴う削出凸帯を施す。

黒色土層出土土器 (fig.24)

壺 10は口縁部である。内外面ともに横方向のミガキを施す。破片の下端には削出凸帯が施されているようである。11は口縁部である。口縁端部には1条のヘラ描沈線を施す。12は胴部片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。

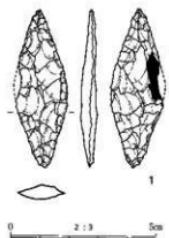


fig.25 SD140出土遺物(2)

遺構 (fig.23) Y・AA-12-14区で検出された溝である。中央部よりも北寄りで、若干「く」字状に屈曲する。検出幅1.6~2.3m、深さ0.4mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底部は平坦である。埋土は概ね2層からなり、上層より黒褐色土層(第1層) 黒色シルト層(第2~5層)である。黒色シルト層からは、土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.26) 出土遺物のうち土器2点について報告する。

器種不明 1は底部片である。外面の調整は縱方向のミガキを施す。2は底部片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。外底面は凹面をなす。

各層出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であり、溝の埋没時期を示すものとは考えられない。

SD273

遺物 (fig.23) AA・AB-15区で検出された溝である。検出幅約0.9m、深さ0.5m、長さ2.2mを測る。底部断面は「V」字形を呈する。底部は平坦である。埋土は黒褐色の細粒砂を主体とし、比較的多くの土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.26) 出土遺物のうち土器2点について報告する。

壺 3は胴部片である。現状で8条のヘラ描沈線を施す。

甕 4は底部片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。

各層出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であり、溝の埋没時期を示すものとは考えられない。

SD271

遺構 (fig.23) Y・AC-15-19区で検出された溝である。直線部分と直角に屈曲する部分からなる。東側の直線部はSD140と肩を接しており、南側の直線部はSD200と切合関係がある。検出幅1.4~2.4m、深さ0.1~0.6mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底面は平坦である。SD140と肩を接する東側直線部分とその他の部分との間にはレベル差がある。埋土はSD140と共に通ずる。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.27) 出土遺物のうち土器2点について報告する。

壺 1は胴部片である。外面の調整は櫛描文のうち文様間にミガキを施す。文様は現状で3帯の櫛描直線文を施す。櫛描1単位あたり6~8条で構成される。大和第II様式末~第III様式初頭に位置づけられよう。2は口縁破片である。口縁端部には面を持つ。

SD275

遺構 (fig.23) X ~ AA-14~16区で検出された溝である。直線部分と直角に屈曲する部分からなる。西側の溝は、SD271と切合関係があり、東端は浅くなって消滅する。検出幅約1.0m、深さ約0.1mを測る。肩から底部にかけてなだらかに傾斜する。底部は平坦である。SD271と連続する溝である可能性が高い。周溝墓をめぐる溝と考えられる。

SD277

遺構 (fig.23) W ~ Y-17・18区で検出された溝である。SD275、SD271と切合関係がある。検出幅約3.6m、深さ約0.4mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底部は平坦である。埋土は概ね2層からなり、上層より黃灰色粘土層（第27~31層）、黒色土層（第32~36層）である。黃灰色粘土層はシルト質土を主体とし、黒色土層は中粒砂から粗粒砂を主体とする。黄灰色粘土層より、比較的大きな土器破片が出土した。周溝墓をめぐる溝と考えられる。

遺物 (fig.27) 出土遺物のうち土器2点について報告する。

壺 3は細頸壺である。底部から胴部上端にかけて遺存する。球形の胴部を持つ。外面の調整は胴部下半ではナデのち横方向のミガキを、上半ではミガキのち横描文を施し様間にミガキを施す。内面の調整は胴部下半では横方向のハケを施す。文様は現状で3帯の櫛描直線文が胴部上半に施す。模描1単位あたり5~7条で構成される。大和第II-3様式に位置づけられよう。

SD190

遺構 (fig.28) AF ~ AJ-17~21区で検出された溝である。直線部分と直角に屈曲する部分からなり、「コ」字状を呈する。検出幅1.0~2.6m、深さ0.3~0.7mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底面は概ね平坦であるが、西側の南北溝と、東・南側との間にレベル差がみられる。埋土は概ね2層からなり、上層より黒色シルト層（第1~4層）、黄灰色シルト層（第5~9層）である。各層より土器小片が出土するほか、西側南北溝底面より鍔2丁および板材1枚が出土した。鍔は、ほぼ完形の状態で出土し、2丁とも北側に刃先部を向けて、並べられた状態で出土している。板材は鉢底下に置かれており、同時に埋まったものと推測される。周溝墓をめぐる溝と考えられる。

遺物 (fig.29、30、31) 出土遺物のうち土器2点、木器4点について報告する。

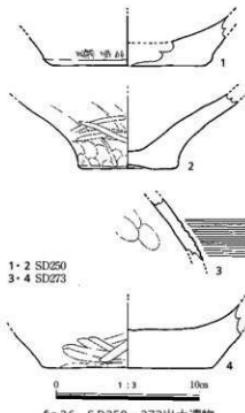


fig.26 SD250・273出土遺物

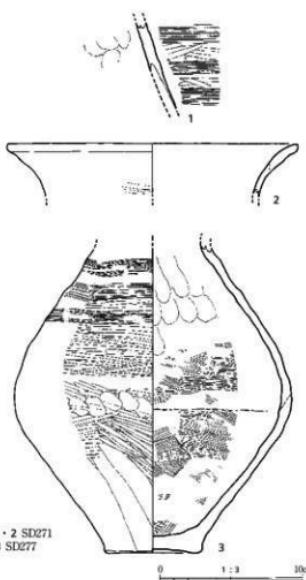


fig.27 SD271・277出土遺物

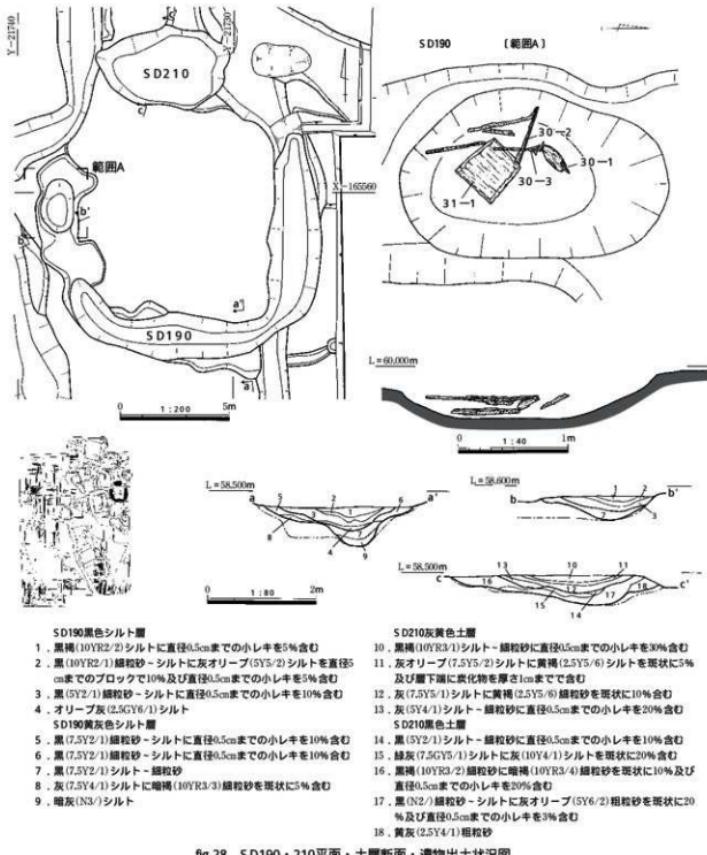


fig.28 SD190・210平面・土層断面・遺物出土状況図

出土土器 (fig.29)

壺 1は口縁部片である。口縁部は若干内傾する。2は肩部片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。現状で3条のヘラ描沈線を伴う削出凸帯を施す。

各層出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であり、溝の埋没時期を示すものとは考えられない。

出土木器 (fig.30、31)

鉤 (fig.30) 1は鉤刃先である。出土状況図 [範囲A] に示される2丁のうち、刃先が外れた個体がこれにあたる。平面形は纺錘形を呈し、上部は茎が欠損している。広葉樹柾目材を加工して作られている。表面の劣化が激しく明瞭な加工痕は観察できなかった。

2は鉤刃先である。出土状況図 [範囲A] に示される2丁のうち、刃先が装着された個体がこれにあたる。平面形は長方形を呈し、上部が欠損している。上端より8cmほど刃先寄りに側面の凹みが観察でき、ここが柄に固定するための紐等で巻いていた位置である可能性がある。広葉樹柾目材を加工して作られている。表面の劣化は激しいが加工痕が散見され、それによると加工工具の刃先幅は3~4cmである。

3は針膝柄片である。出土状況図 [範囲A] に示される2丁のうち、刃先が外れた個体に対応する柄である。枝の付け根を利用して製作されている。針葉樹柾目材を加工して作られている。刃先を固定する紐等の痕跡は観察できなかった。

出土木柾材 (fig.31) 1は木柾材と考えられる。出土状況図 [範囲A] に示される個体である。針葉樹柾目材を加工して作られている。材の両小口面には顯著な加工痕が観察でき、それによると幅3~4cmの刃先を持つ手斧状の工

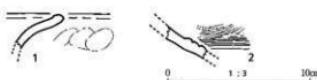


fig.29 SD190出土遺物 (1)

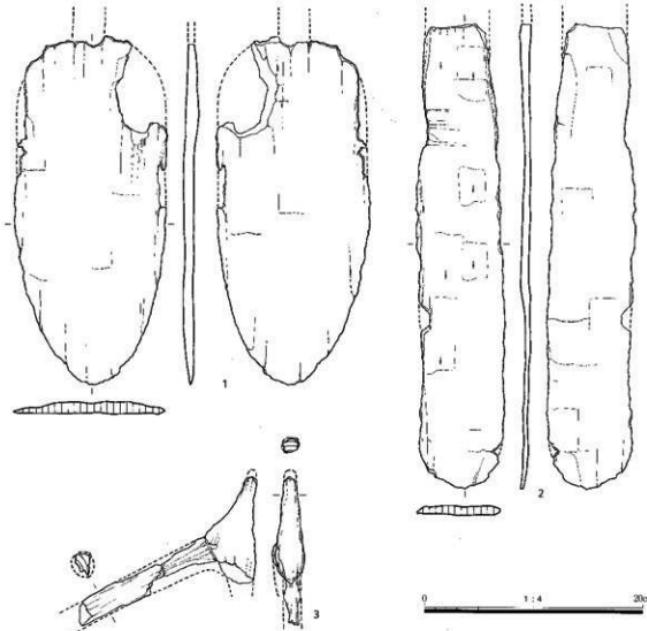


fig.30 SD190出土遺物 (2)

第2章 発掘調査の成果

具を両側から複数回打ち込むことによって切れ込みを入れ、最後は切れ込み部を支点に折ることにより切断しているようである。

SD210

遺構 (fig.28) AG - AI-16 - 17区から検出された溝である。検出幅約3.6m、深さ約0.5mを測る。肩から底部にかけてなだらかに傾斜する。底面は平坦である。埋土は概ね2層からなり、上層より灰黄色土層（第10 - 13層）黒色土層（第14 - 18層）である。各層より土器小片が出土し、とりわけ黒色土層からは完形に近い状態にまで接合可能な広口壺が出土している。周溝墓をめぐる溝と考えられる。

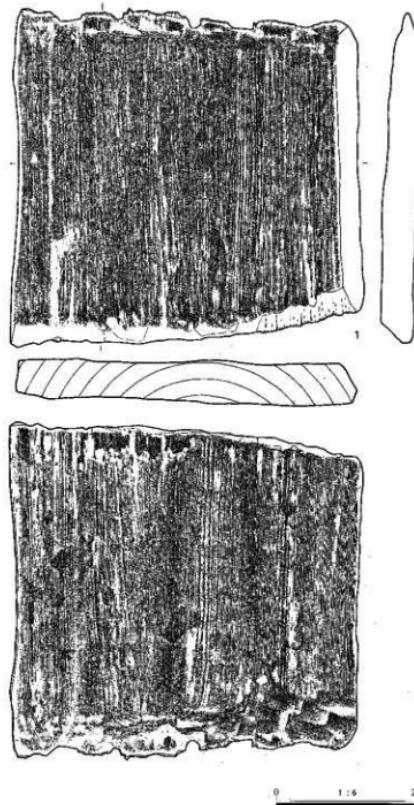


fig.31 SD190出土遺物（3）

遺物 (fig.32) 出土遺物のうち土器1点について報告する。

壺 1は広口壺である。胴部下半の一部を除いた5割ほど復元可能である。球形の頸部と広い頸部を持つ。口縁端部は上下に肥厚し、上方へ突出する。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部上半は縦方向のハケ、下半は縦方向のミガキを施す。内面の調整は口縁部はヨコナデを、頸部は横方向のミガキを、胴部は縦方向のハケを施す。文様は口縁上端に櫛描扇形文を、口縁下端に櫛描波状文を施す。頸部から胴部にかけては10帯の櫛描直線文を施し、直線文の下位に1帯の櫛描波状文を施す。櫛描文施文後に縦方向のミガキを頸部上端から胴部中ほどにかけて4条1單位で施す。櫛描1単位あたりいずれも7 - 8条で構成される。底部の遺存状態は良好ではないが、底部外面には煤の付着が認められる。大和第III-3様式に位置づけられる。

SD200

遺構 (fig.33) AA - AF-18 - 24区から検出された溝である。直線部分と直角に屈曲する部分からなり、ほぼ東西南北に各辺をむけた正方形になる。但し東側側辺の南側半分は溝が切れている。検出幅2.0 - 3.4m、深さ0.9 - 1.4mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底面は概ね平坦であるが、東側側辺がもっとも深

く、北側・西側の頸で浅くなり、南側側辺が最も浅くなる。埋土は概ね4層からなり、上層より黒灰色土層（第1・2層）、灰黄色粘土層（第3～5層）、黑色砂層（第6～15層）、黒色粘土層（第16～24層）である。各層より土器小片が出土し、黒色砂層からはほぼ完形に接合可能な模が、黒灰色土層からは全周する広口壺の口縁が出土している。周溝墓をめぐる溝と考えられる。

SD200で特筆すべき事項として、遺構南西隅の溝北西側溝（範囲A）より、櫛・壺蓋・無頸壺が出土していることである。無頸壺は底部を下にして直立した状態で出土し、壺蓋は無頸壺内部より無頸壺口縁部の破片とともに出土し、櫛は口縁部破片が口縁を下側に向けた状態で無頸壺の外側より出土しており、断面観察によても櫛方は確認できなかったが、3個体を組み合わせた土器棺墓の可能性が高い。

遺物（fig.34、35） 出土遺物のうち、土器13点について報告を行う。

黒灰色土層出土土器（fig.34）

壺 1は広口壺である。口縁部のみ遺存する。摩滅により調整は詳らかではないが、口縁上端に櫛描扇形文、口縁端部に櫛描波状文が施される。櫛描1単位あたり5～6条で構成される。大和第III-3あるいはIV様式に位置づけられる。

3は細頸壺である。頸部片のみ遺存する。外面の調整は櫛描文のち文様間にミガキを施す。内面の調整は縱方向のミガキを施す。文様は現状で6帯の櫛描直線文を施し、直線文を切って向かい合わせに櫛描扇形文を施す。櫛描1単位あたり7～8条で構成される。大和第III様式に位置づけられる。

櫛 4は壺の口縁部破片である。強く屈曲する口縁部を持つ。

器種不明 2は底部片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。

灰黄色粘土層出土土器（fig.34）

5は頸部片である。下端には現状で2条のヘラ描沈線を施す。6・7は底部片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。8は底部片である。外底面が凹面をなす。

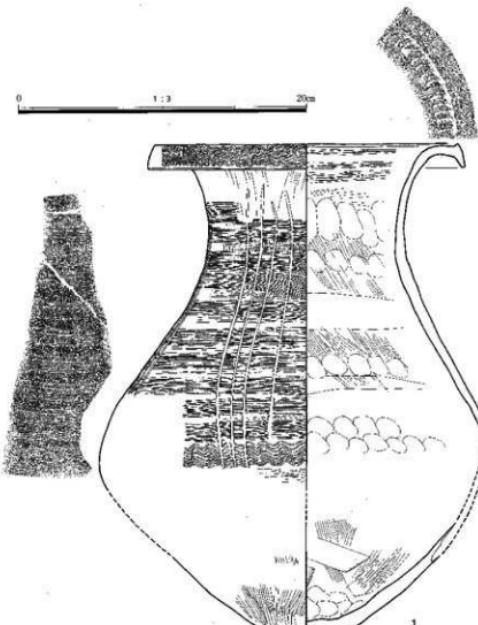


fig.32 SD210出土遺物

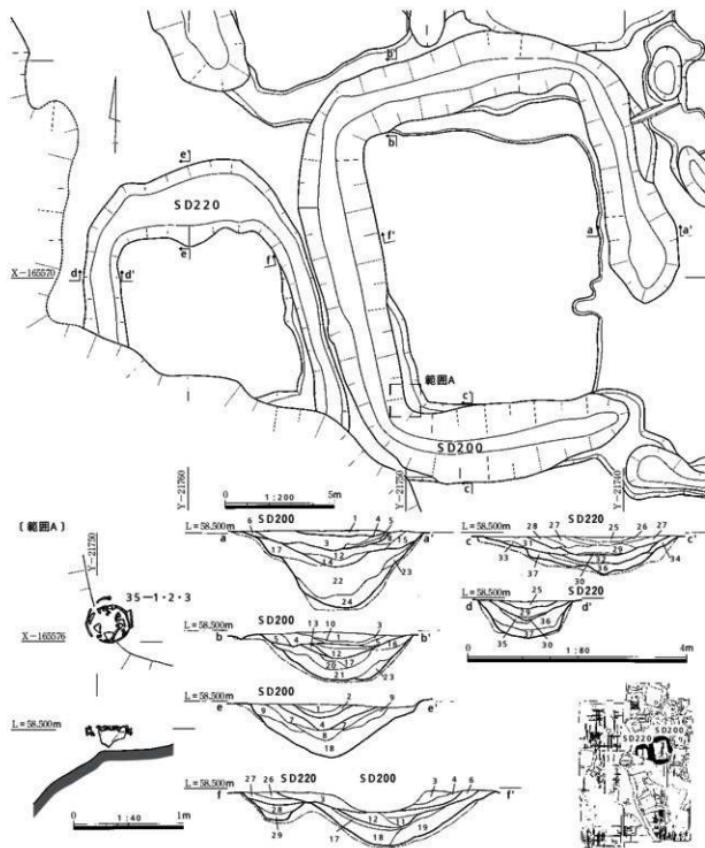


fig.33 SD200・220平面・土層断面・遺物出土状況図

黒色砂層出土土器 (fig.34)

壺 9は壺腹部片である。表面の摩滅により調整は観察できない。頸部屈曲部に1条の貼付凸帯を有する。

楕 10は四分形壺である。ほぼ完形に接合可能である。張りの少ない胴部を持つ。口縁部は短く外反する。表面の摩滅により調整は明瞭ではないが、胴部下半に縱方向のケズリが施される。大和第II-3様式に位置づけられる。

- SD200(黒灰色土層)
1. 黒(10YR3/1)シルト
 2. 黒(5Y2/1)シルト - 粒粒砂に灰オーリープ(7.5Y6/2)シルトを直径3cmまでのブロックで10%及び直径0.5cmまでの小レキを20%含む
SD200(黒灰色粘土層)
 3. 黒(10YR2/1)粒粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 4. 黒(2.5Y2/1)シルト
 5. 黒(2.5Y2/1)シルトに灰オーリープ(7.5Y6/2)シルトを直径1cmまでのブロックで10%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
SD200(黒色砂層)
 6. 黒(2.5Y3/2)粒粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 7. 黒(5Y2/1)粒粒砂 - 中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 8. 黒(2.5Y2/1)シルトに直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 9. 黒(5Y2/1)粒粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 10. 灰オーリープ(7.5Y6/2)シルトにオーリープ(2.5Y4/3)シルトを斑状に5%含む
 11. 緑灰(7.5GY5/1)シルトに灰(5Y5/1)粒粒砂を斑状に30%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 12. 灰オーリープ(7.5Y6/2)シルトに墨下端に炭化物を厚さ1cmまで含む
 13. 灰オーリープ(7.5Y6/2)シルトに墨(2.5Y2/1)粒粒砂 - シルトを斑状に15%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 14. 墓灰(NSV)シルトに緑灰(10GY6/1)シルトを斑状に30%含む
 15. 黒褐(10YR2/1)粒粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを10%含む
SD200(黒色粘土層)
 16. 黒(10YR2/1)粒粒砂 - 中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 17. 墓灰(NS)シルトに直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 18. 黒(5Y2/1)粒粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 19. 灰黄(2.5Y6/2)粒粒砂に墨(5Y2/1)粒粒砂を斑状に40%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 20. 墓灰(NS)粒粒砂に灰(7.5Y5/1)シルトを斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む

土器棺墓を構成する土器 (fig.35)

図 1は壺である。口縁部は完全に遺存するが、胴部は破片が不足し口縁部とは接合できない。ただし胎土の色、器壁の厚さ等からは同一個体と想定される。球形に膨らんだ胴部と、強く屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は上下に肥厚する。摩滅で明瞭ではないものの、胴部外面には縱方向の粗いミガキを施す。口縁端部には2条の凹線文を施す。大和第III-4様式に位置づけられる。

壺蓋 2は壺蓋である。外側の調整は縱方向のミガキのうち、下半に横方向のミガキを施す。径8mm程度の孔を約3.5cm間隔で2つ穿孔する。完形ではないが、復元される口縁部から後述する無頸壺に組み合わさる個体と考えられる。

壺 3は無頸壺である。口縁部の大半を欠損する。やや屈曲する胴部を持つ。口縁端部は幅広で厚みがある。口縁部に直径約8mmの孔を約3.5cm間隔で2つ穿孔する。外側の調整は口縁部にヨコナデを、胴部下半に縱方向のミガキのうち斜め方向のミガキを施す。内面の調整は丁寧なナデを施す。文様は胴部上端に1帯の櫛描波状文、その下部に7帯の櫛描直線文、その下部に1帯の櫛描波状文を挟んで2帯の櫛描直線文、最下段の胴部最大径付近に櫛描波状文を施す。櫛描1単位あたり8~9条で構成される。大和第III-4様式に位置づけられる。

SD220

遺構 (fig.33) W-AA-20-24区で検出された溝である。南側に開口部を持つ「コ」字形を呈する。東側の側辺はSD200と肩を接する。検出幅1.2~3.2m、深さ0.5~0.9mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は概ね平坦であるが、東側側辺は北・西側側辺と比べて浅い。溝の南半は後述するSR550によって埋されており、全体像は不明である。埋土は概ね3層からなり、上層より黒灰色シルト層(第25~30層)、灰黄色粘土層(第31~33層)、黒色粘土層(第34~37層)である。各層より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.36) 出土遺物のうち土器2点について報告する。

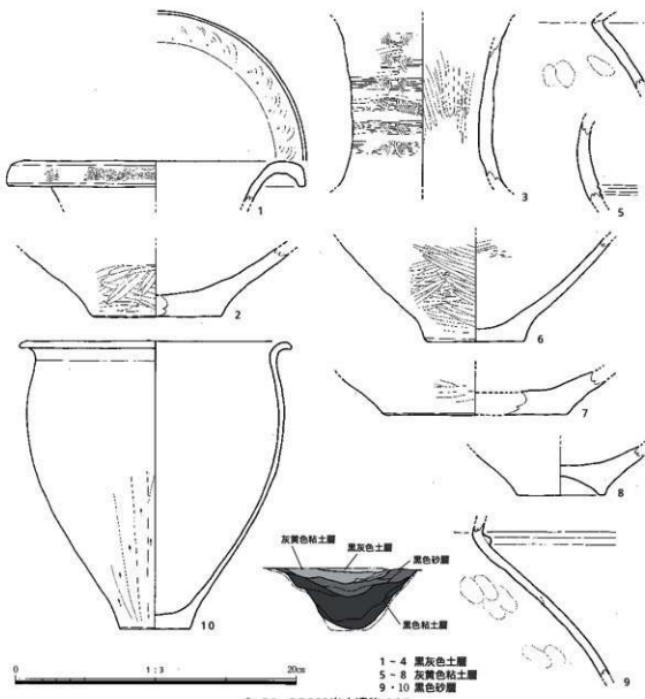


fig.34 SD200出土遺物(1)

黒灰色シルト層出土土器

1は底部片である。摩滅により明瞭ではないが、外面の調整は縦方向のミガキを施す。

黒色粘土層出土土器

2は四分形甕である。胴部上半が遺存する。膨らんだ胴部と短く立ち上がる口縁部を持つ。表面の摩滅により調整は明瞭に確認できないが、外面には縦方向のケズリを施すようである。大和第III様式に位置づけられる。

SD180

遺構 (fig.38) AF - AH-24・25区で検出された溝である。中央部が狭くなった瓢箪状の外形を呈する。検出面ではSD200に連続する淡い黒褐色土のしみとして認識されたが、完掘後では独立した溝となった。検出幅1.0~2.2m、深さ約0.8mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は平坦である。埋土は概ね3層からなり、上層より黒灰色シルト層(第1~3層)、黒色砂層(第4~10層)、青灰色シルト層(第11層)である。各層より土器小片が出土する。周溝基をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.37) 出土遺物のうち土器4点について報告する。

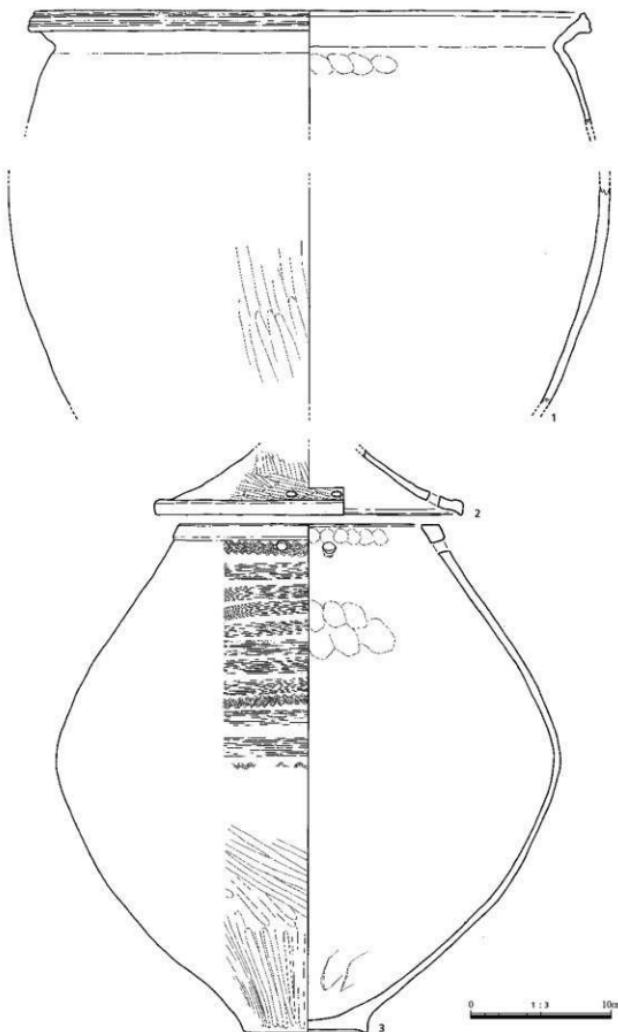


fig.35 SD200出土遺物(2)



fig.36 SD220出土遺物

青灰色シルト層出土土器

1は壺口縁部である。外面の調整は横方向のミガキを施す。2は頸部片である。現状で4条のヘラ描沈線を施す。

黒色砂層出土土器

3は頸部片である。1cmあたり2~3の刻目を施した凸帯を1条施す。4は壺口縁である。外面の調整は横方向のミガキを施す。

各層出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であり、溝の埋没時期を示すものとは考えられない。

SD230

遺構 (fig.38) AI・AJ-23-27区で検出された溝である。後述するSR30が遭構埋没後に流れていったため、西側肩は大きく削られている。また西側肩はSD283と切合関係がある。検出幅1.4~2.6m、深さ0.5mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は平坦である。埋土は概ね3層で上層より黒褐色土層（第1~7層）、灰黄色シルト層（第8~10層）、黒灰色砂層（第11~14層）である。いずれの層もシルトから細粒砂を主体とし、最下層の黒灰色砂層は、SD283の埋土の一部と考えられる。各層より土器小片が出土するが、黒褐色土層からはほぼ完形に接合可能な壺が粉々に砕けた状態で一箇所よりまとまって出土した。周溝基をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.39) 出土遺物のうち土器4点について報告する。

黒褐色土層出土土器

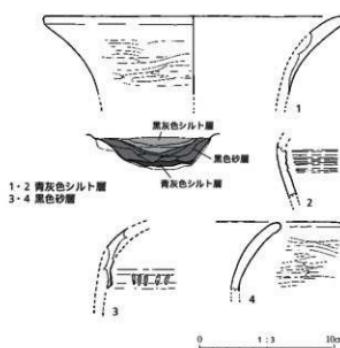


fig.37 SD180出土遺物

壺 2は広口壺である。出土状況図（範囲A）に示されるのはこの個体である。ほぼ完形に接合可能である。球形の胴部と短く立ち上がる頸部を持つ。口縁端部は肥厚する。外面の調整は口縁部はヨコナデを、胴部上半は縦方向のハケを、下半は縦方向の粗いミガキを施す。大和第三-4様式に位置づけられる。

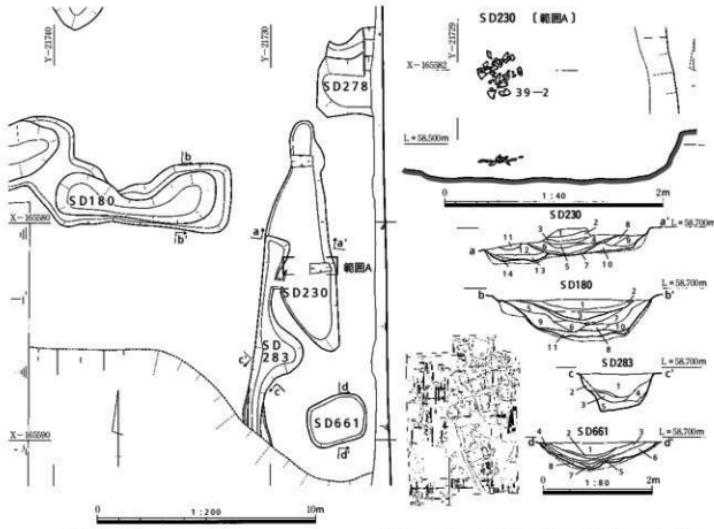
1は壺口縁である。外傾する口縁を持つ。現状で径約4mmの孔が1つ穿孔されている。3は底部片である。外面の調整は縦方向のハケを施す。

黒灰色砂層出土土器

壺 4は口縁部である。口縁端部がゆるく外傾する。

SD278

遺構 (fig.38) AJ・AK-23区より検出された溝である。東側は調査区の外側にのびており、全体像は不明である。



a-a' 開削面(SD230)

- 黄灰(2.5Y4/1)シルトに褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に20%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒褐(2.5Y4/2)シルト・細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 灰(5Y4/1)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを3%含む
- 暗褐(10YR3/4)シルト・細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを20%含む
- 灰(5Y5/1)シルトに灰オーリーブ(5Y6/2)シルトを直徑1cmまでのブロックで10%及び炭化物を5%含む
- 灰オリーブ(7.5Y6/2)シルトに褐褐(2.5Y5/3)シルトを斑状に10%含む
- 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂に灰オリーブ(7.5Y6/2)シルトを直徑3cmまでのブロックで30%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%及び炭化物を5%含む
- 黒褐(2.5Y3/2)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 黒(2.5Y3/2)細粒砂にオリーブ(5Y6/2)シルトを直徑2cmまでのブロックで10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 灰オリーブ(7.5Y6/2)シルトに黒褐(2.5Y3/1)細粒砂を直徑3cmまでのブロックで15%含む
- 黒(2.5Y2/1)シルトに褐褐(10YR3/3)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒(N2/1)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを5%及び炭化物を30%含む
- 黒(N2/1)シルトに暗青灰(10GB4/1)細粒砂を直徑3cmまでのブロックで10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 暗青灰(10GB4/1)細粒砂に黒(N2/1)シルトを斑状に30%含む
b-b' 開削面(SD180)

fig.38 SD180・230・278・283・661平面・土層断面・遺物出土状況図

4. 黒褐(2.5Y3/2)シルトに黒(7.5Y2/1)シルトを斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む

- 黒(5Y2/1)細粒砂に暗灰褐(2.5Y5/2)シルトを直徑5cmまでのブロックで5%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 黒(5Y2/1)細粒砂・シルトに直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒(2.5Y3/1)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒(2.5Y3/1)シルト・細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- オリーブ黒(5Y3/1)細粒砂・中粒砂に暗褐(10YR3/3)細粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒褐(2.5Y3/1)中粒砂
- 黒(5Y2/1)細粒砂・シルト
c-c' 開削面(SD283)
- 黒褐(2.5Y3/2)細粒砂・中粒砂
- 黒褐(2.5Y3/2)細粒砂・黒褐(2.5Y3/2)細粒砂を斑状に30%含む
- 灰(N4/1)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒(7.5Y2/1)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを15%含む
- 灰(N4/1)シルトに暗灰(7.5G7Y5/1)細粒砂を斑状に20%含む
d-d' 開削面(SD661)
- 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂に灰オリーブ(10YR3/3)シルトを斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- オリーブ(5Y5/2)シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%含む
- 黒(2.5Y2/1)細粒砂に灰オリーブ(5Y5/2)シルトを直徑3cmまでのブロックで20%及び直徑0.5cmまでの小レキを3%含む
- 黒褐(10YR6/1)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを15%含む
- 黒(5Y2/1)細粒砂・シルトにオリーブ灰(2.5GY5/1)シルトを直徑2cmまでのブロックで10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%及び炭化物を10%含む
- 黒褐(10YR3/2)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを20%含む
- オリーブ灰(2.5GY5/1)シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%含む
- オリーブ灰(2.5GY5/1)シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%含む

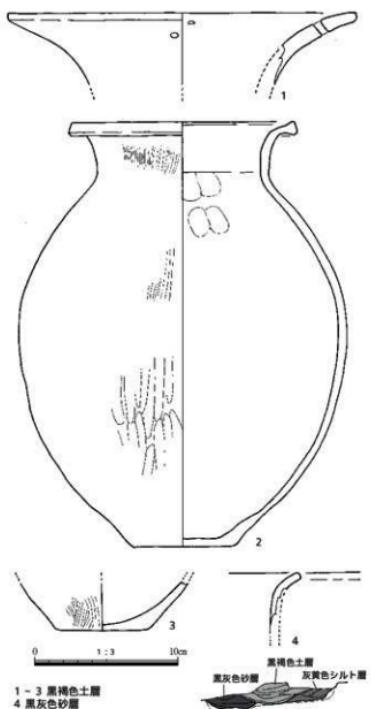


fig.39 SD280出土遺物

レンチと同じ幅で北側に続いていると考えられる。検出幅約2.0m、深さ約0.3mを測る。底部断面形態は緩やかな「U」字形を呈する。底面は平坦である。埋土は黒色の細粒砂を主体とする。埋土内より土器小片が出土しているほか、溝底部に接して完形の広口壺が横倒しになった状態で出土している。

遺物 (fig.40) 出土遺物より土器3点について報告する。

壺 1は広口壺である。若干欠損する部分はあるもののほぼ完形である。出土状況図(範囲A)に示されるのはこの個体である。球形の胴部に緩やかに立ち上がる頸部を持つ。口縁部は若干肥厚し、下方に巻き込む。外面の調整は口縁部はヨコナデを、胴部上半は横方向のミガキを、下半は斜め方向のミガキを施す。内面の調整は前面に横方向のミガキを施す。文様は頸部に2条の櫛描直線文を施す。櫛描1単位当たり9~10条で構成される。胴部下半に長径約4cm、短径約3cmの焼成後穿孔を施す。大和第III-1様式に位置づけられる。3は壺口縁である。口縁端部に明瞭な面を持つ。

検出幅約2.4m、深さ約0.5mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底面は平坦である。周溝墓をめぐる溝と考えられる。

SD283

遺構 (fig.38) AI-25~28区より検出された溝である。後述するSR30が遺構埋没後に流れていたため北半部の肩は大きく削られている。中央部で溝の幅が瘤状に膨らんでいるが、本来は瘤状膨らみより北部は幅広になっており、上記のSR30による破壊によって底部近くのみが検出できたためであると考えられる。南端は後述のSR550によって壊されている。検出幅0.8~2.2m、深さ0.6mを測る。埋土は黒褐色の細粒砂を主体とする。底部断面形態は「U」字形を呈する。底面は概ね平坦である。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

SD661

遺構 (fig.38) AJ・AK-28区より検出された溝である。検出状態では土坑と呼んだほうがふさわしいかもしれないが、検出面では、断面に見られる土層が南北軸の構造に見えており、東西に走る溝底部の窪みの一部であったと考えられる。検出幅約2.2m、深さ0.6mを測る。肩から底部にかけてだらんと傾斜する。埋土は黒褐色の細粒砂を主体とする。埋土中に遺物は検出しなかった。

SD505

遺構 (fig.42、43、44) AD~AF-33~35区より検出された溝である。北端は試掘トレンチに切られており、南端はSD525に切られる。試掘調査によると、下層より黑色系埋土の堆積が確認され、ほぼ試掘ト

標 2は胴部から口縁部にかけての破片である。膨らんだ胴部と、強く屈曲する口縁部を持つ。外面の調整は口縁部にヨコナデを、胴部に縦方向のハケを施す。

SD510

遺構 (fig.42, 43) AE~AF-36~39区より検出された溝である。試掘トレンチを挟んでSD525と連結し、南端はSD520と連結する。検出幅約1.4m、深さ約0.3mを測る。底部断面形態は縦やかな「U」字形を呈する。底面は平坦である。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.41) 出土遺物のうち土器3点について報告をする。

1は頸部破片である。2条のヘラ描沈線を伴う削出凸帯を1条施す。2は口縁部破片である。口縁端部に凹線状になる強いナデを施す。3は底部片である。摩滅により調整は不明瞭であるが、横方向のミガキを施すようである。

SD520

遺構 (fig.42, 43) AD~AE-39~40区より検出された溝である。SD510の南端に連結する。検出幅約3.6m、深さ0.8mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土はSD520と同様に黒色の細粒砂を主体とする。埋土内より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

SD525

遺構 (fig.42, 43, 44) X~AE-35~37区より検出された溝である。東端部は試掘トレンチにより分断されるが、試掘調査によるとこの位置に東西に走る溝が検出されているため、本来はSD510と一緒にあったと考えられる。検出幅0.6~3.2m、深さ0.4~0.9mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底面は概ね平坦であるが、AC~AD-35~36区では溝が深さを増している。埋土は概ね2層からなり、上層より黑色土(第12~16層)、黒灰色

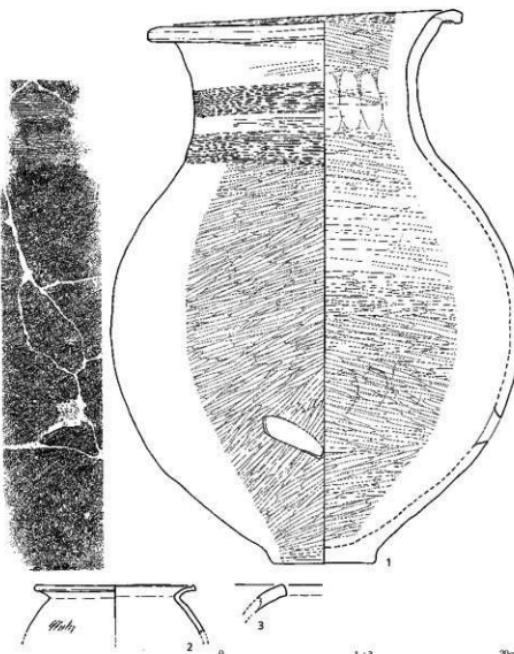


fig.40 SD505出土遺物

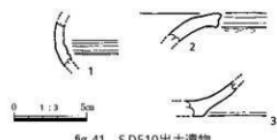


fig.41 SD510出土遺物

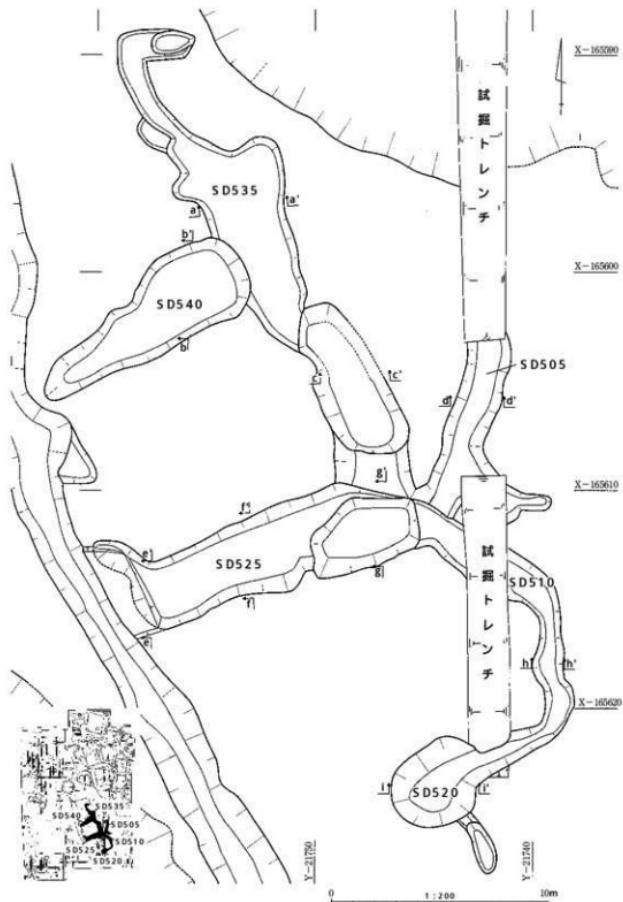


fig.42 SD505・510・520・525・535・540平面図

土層（第17～20層）である。各層から完形あるいは完形に近い状態まで接合することが可能な土器が出土している。遺物（fig.45、46）出土遺物のうち土器7点について報告する。

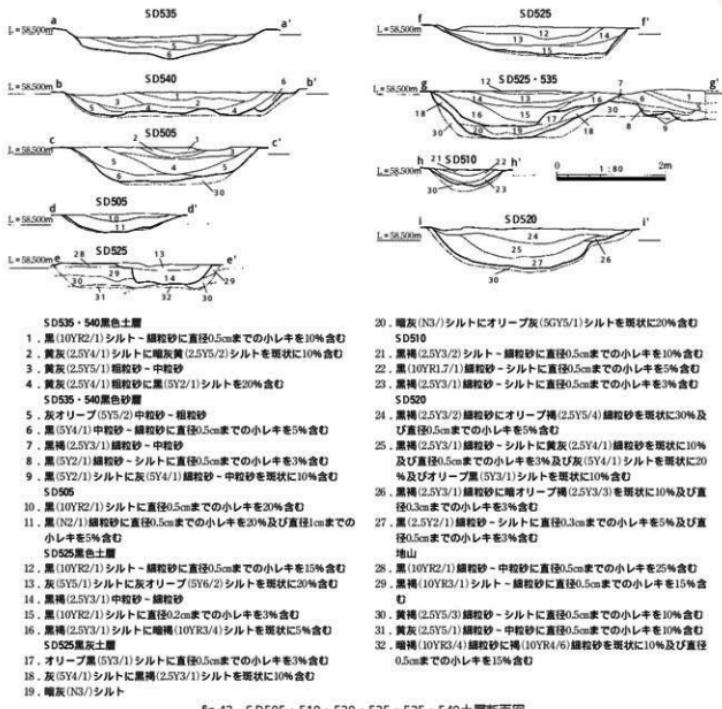


fig.43 SD505・510・520・525・535・540土層断面図

黒色土層出土土器

図1は広口長頸壺である。ほぼ完形に接合可能である。出土状況図〔範囲B〕に示されるのはこの個体である。球形の胴部を持ち、頸部周辺は明瞭に屈曲する。口縁端部は上下に肥厚し上方に突出する。外面の調整は口縁部はヨコナデを、頸部は横方向のミガキを、胴部下半は縦方向のミガキを施す。内面の調整は胴部上半は横方向の粗いハケを、下半は縦方向のハケを施す。文様は口縁端部に柳描兼状文、頸部から胴部上半にかけて7帯の柳描兼状文、胴部上半から胴部最大径にかけて4帯の柳描直線文、胴部最大径より少し下に1帯の柳描波状文を施す。模様1単位あたり8~10条で構成される。大和第III-2様式に位置づけられる。

2は広口長頸壺である。ほぼ完形に接合可能である。出土状況図〔範囲B〕に示されるのはこの個体である。球形の胴部と外反する頸部を持ち、頸部周辺は明瞭に屈曲する。口縁部は上下に肥厚する。外面の調整は口縁部はヨコナデを、頸部は縦方向のハケのち柳描文を施し文様間にミガキを、胴部下半は縦方向のハケのち横方向のミ

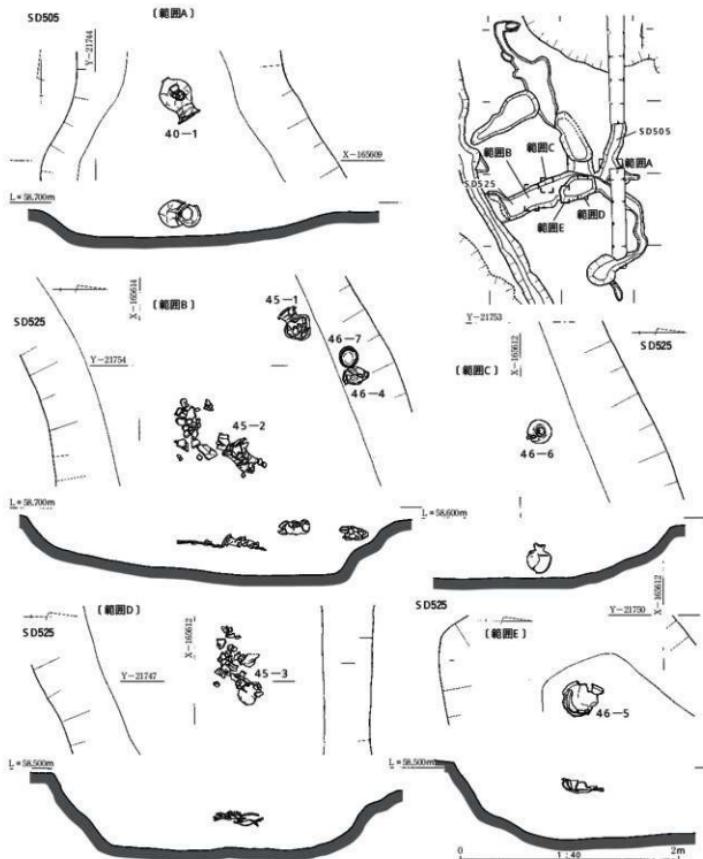


fig.44 SD505・525遺物出土状況図

ガキを施す。内面の調整は頸部上半に横方向のハケを施す。文様は口縁部に2cmあたり3程度の櫛原体による刺突文を施した上から2条のミガキ、頸部は8帯の櫛描直線文、胴部上半に6帯の櫛描直線文を施す。櫛描1単位当たり6~8条で構成される。大和第III-1様式に位置づけられる。

3は縦頸壺である。ほぼ完形に接合可能である。出土状況図(範囲D)に示されるのはこの個体である。球形の胴部と、やや内湾する頸部を持つ。口縁端部上面は平坦である。外面の調整は、頸部は櫛描文を施したのち文様間に

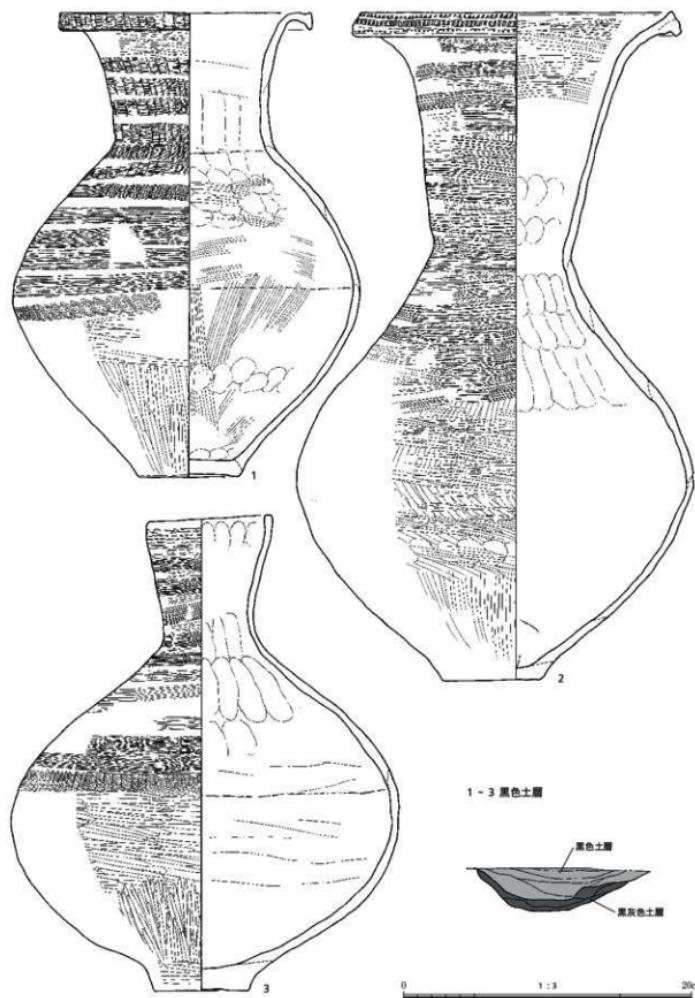


Fig.45 SD525出土遺物（1）

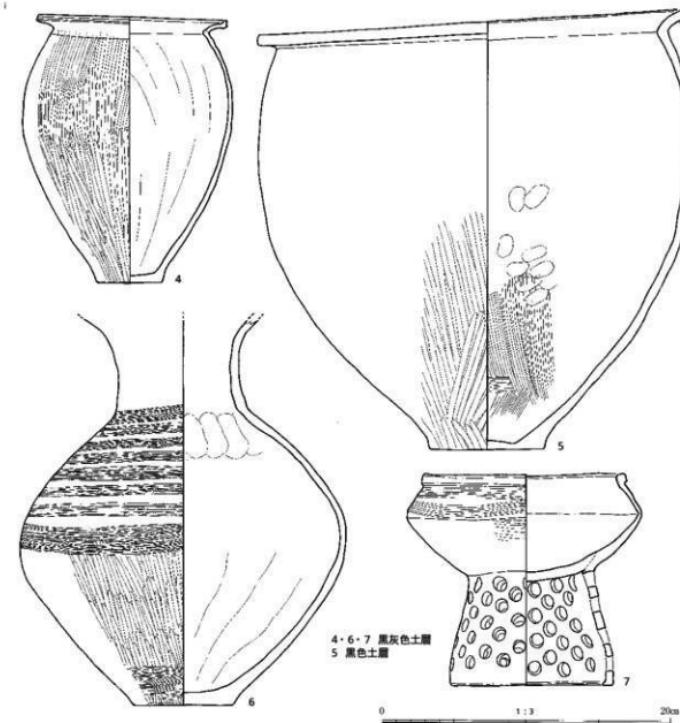


図46 SD525出土遺物(2)

ミガキを、胴部中ほどは横方向のミガキを、胴部下半は横方向のミガキのち縦方向のミガキを施す。内面の調整は丁寧なナデを施す。文様は頸部に5帯の櫛描直線文、胴部上半に7帯の櫛描直線文、直線文下段に1帯の櫛描波状文を施す。櫛描1単位あたり8~10条で構成される。大和第III-1様式に位置づけられる。

標 5は丁度半分遺存する。出土状況図〔範囲E〕に示されるのはこの個体である。若干膨らむ胴部と明瞭に屈曲する口縁を持つ。口縁端部は上下に肥厚する。全体的に器壁の摩滅が激しいが、外側の調整は胴部下半は縦方向のミガキを施される。内面の調整は胴部下半部に縦方向のハケが施される。大和第III様式に位置づけられる。

黒灰色土層出土土器

壺 6は広口壺である。口縁部を欠損するほかは完形である。出土状況図〔範囲C〕に示されるのはこの個体である。球形の胴部となだらかにのびる頸部を持つ。外側の調整は下半部は縦方向のミガキを施し、底部近くに横方向のハケを施す。内面の調整は丁寧なナデを施す。文様は頸胴部境界から9帯の櫛描直線文を施す。櫛描1単位あたり5~6

条で構成される。外面底部にはススが付着する。土器の検出状態は非常に良好であり、接合もほとんど必要なかったにもかかわらず底部に大きな破損部が最終的に残された。したがってこの破損部は埋没後の破損ではなく、人為的穿孔痕である可能性がある。口縁部の破損についても同様であり、口縁に打ち欠きを施していた可能性が高い。大和第III-3様式に位置づけられる。

甕 4は完形の甕である。出土状況図〔範囲B〕に示されるのはこの個体である。やや膨らんだ胴部と、強く屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は上方に突出する。外面の調整は、口縁端部は強いヨコナデを、胴部上半は縱方向のハケを、胴部下半は縱方向のミガキを施す。内面の調整は縱方向のナデを施す。大和第III-3様式に位置づけられる。

鉢 7は台付鉢である。出土状況図〔範囲B〕に示されるのはこの個体である。内傾する口縁部と4段の穿孔を伴う脚部を持つ。口縁端部は肥厚する。底部は円盤を充填する。外面の調整は、口縁部はヨコナデ、胴部下半は横方向のミガキを施す。文様は胴部上半に2帯の櫛描直線文を施す。櫛描1単位当たり6条で構成される。脚部の穿孔は孔同士を1.5cmほど離して、左右の孔が上下方向で互位置になるように配置する。大和第III-3様式に位置づけられる。

SD535

遺構 (fig.42、43) Y - AC-27 - 35区より検出された溝である。北端部は先述のSP574と接し、南端部はSD525と切合関係を有する。31 - 33区ではSD540と連結する。検出幅0.8 - 3.6m、深さ0.4 - 0.8mを測る。肩から底部にかけてなだらかに傾斜する。底面は概ね平坦であるが、AB-32 - 34区では溝が深さを増している。埋土は概ね2層からなり、上層より黒色土層（第1 - 4層）、黒色砂層（第5 - 11層）である。各層より土器小片が出土している。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。なお先述のように北端に接するSP574との切合関係が不明瞭であるため、SP574近傍の土器も一括してSD535出土として取上げた。従ってSP574出土の可能性がある土器もここでふれることとする。

遺物 (fig.47) 出土遺物のうち土器3点について報告する。なお報告遺物のうちSP574との間で帰属が曖昧であるのはfig.47-3である。

壺 2は壺口頭部破片である。外面の調整は横方向のナデを施す。頭部には4条のヘラ描沈線を施す。3は壺口縁である。胴部以下を欠損する以外は完形である。外面の調整は横方向のミガキを施すようである。頭部には2条の貼付凸帶を施す。

甕 1は口縁部破片である。緩やかに立ち上がる口縁を持つ。口縁端部には2cmあたり3の刻目を6個1単位で約11cmの間隔を空けて施される。調整は明瞭でないが、外面に縱方向のミガキが施されるようである。口頭部には4条のヘラ描沈線を施す。

出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であり、溝の埋没時期を示すものとは考えられない。

SD540

遺構 (fig.42、43) X - AA-31 - 33区より検出された溝である。東端部はSD535と連結する。検出幅0.2 - 0.4m、深さ約0.4mを測る。埋土はSD535と共通する。

SD630

遺構 (fig.48) AK - AI-41 - 43区より検出された溝である。東側・南側がトレンチ外側に続くため全体像は不明である。検出幅約1.8m、深さ0.8mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底面は平坦である。埋土はシルト質土を主体とする。埋土より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.49、50) 出土遺物のうち土器6点について報告する。

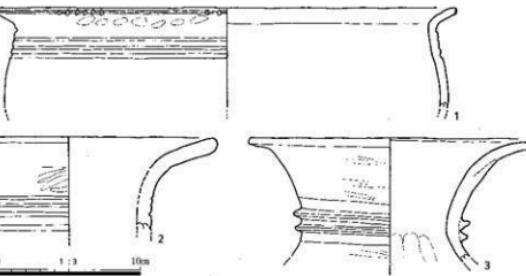


fig.47 SD535出土遺物

出土土器 (fig.49)

1・4は口縁部破片である。内外面の調整は横方向のミガキを施す。1は現状で2条のヘラ描沈線を施す。2は口縁部破片である。口縁底部は丸くおさめる。3は胴部破片である。外面の調整は横方向のナデを施す。現状で4条のヘラ描沈線を施す。5・6は底部片である。外面に横方向のミガキを施す。

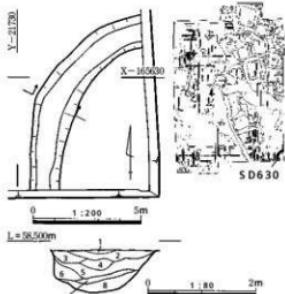
出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であり、溝の埋没時期を示すものとは考えられない。

出土石器 (fig.50)

1は硬質の砂岩製の敲き石である。体部に研磨面が確認でき、敲打部が研磨面を切ることから、磨石から敲き石に転用されたと考えられる。敲打部は体部に散発的に広がるほか、側面の一部と端部に帯状に確認できる。

SD545

遺構 (fig.52) U-AC-27~43区より検出された溝である。北端はSR550によって壊され、南端は調査区南側へと続く。検出幅1.8~3.6m、深さ1.0~1.3mである。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は緩やかに南側へと傾斜する。埋土は概ね4層で、上層より茶白色粘土層(第1~5層)、黒色土層(第6~11層)、灰白色砂層(第12~16層)、黒色粘土層(第17~26層)である。黒色粘土層にはブロックが混入し、灰白色砂層は、自然木破片が混入したあまり疎



1. 灰(7SY6/1)シルトに黄褐色(2.5YV5/3)シルトを直径1cmまでのクロックで40%含む
2. 黒(10YR2/1)細粒砂・中粒砂に黄褐色(2.5YV1/1)細粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを15%含む
3. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂・シルトに黒(10YR2/1)シルト・細粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
4. 増灰(3N3)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
5. 増灰(3N3)シルトに灰(NA)細粒砂を斑状に50%含む
6. 増青灰(5B3/1)細粒砂・シルトに暗灰(3N3)シルト・細粒砂を斑状に10%含む
7. 灰(10Y6/1)中粒砂・粗粒砂
8. 青灰(10BG5/1)細粒砂に暗灰(3N3)シルトを斑状に50%含む

fig.48 SD630平面・土層断面図

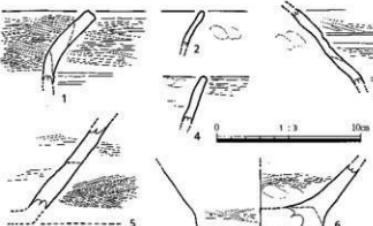


fig.49 SD630出土遺物 (1)

混じらないシルト質土を主体とする。掘削後肩の崩落で埋没した後、湛水状態で堆積したと考えられる。各層より土器小片が出土する。

遺物 (fig.51) 出土遺物のうち土器7点について報告する。

茶白色粘土層出土土器

1は底部破片である。外面の調整は横方向のミガキを施す。

黒灰色土層出土土器

壺 2は口縁部破片である。径約5mmの孔が1個穿孔されている。4は底部破片である。外面底部寄りに指押圧痕が明瞭に観察できる。

壺蓋 3は上端部破片である。外面の調整は縱方向のミガキを、内面の調整は斜め方向のミガキを施す。

灰白色砂層出土土器

5は底部破片である。外面の調整は斜め方向のミガキを施す。

黒色粘土層出土土器

壺 6は壺胴部破片である。内外面ともに横方向のミガキを施す。5条のヘラ描沈線を施す。

鉢 7は口縁部破片である。外面の調整は横方向のハケを施す。

出土土器は弥生時代前期までの様相を示す。ただしいずれも小片であること、また、供獻土器の出土から弥生時代中期以降の年代が考えられる点からも、この時代の土器片が普遍的に出土することを踏まえると、満の時期を示すものとは考えられない。

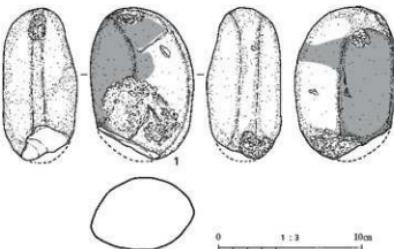


fig.50 SD630出土遺物(2)

(3) 自然流路

SR550

遺構 (fig.54, 55, 56) 調査区全体に広がる大規模な流路である。調査区の西側半分を占める本流と、調査区の東半分を西流する支流からなる。本流の調査区内北端には肩が中州状にめぐる。調査区の遺構は、この流路との切合関係によって大きく2時期に分けられる。本流部分の検出幅32m以上、深さ1.5m以上で支流部分の検出幅8.0~14.0m、深さ1m以上を測る。流路の主体となる埋土は灰色系の中粒砂を主体とし、細かな単位がいくつも確認できる。検出範囲より細い単位の流路が、埋没を繰返しながら流れっていた様子が窺える。また流路肩から流路底に向けて崩れ落ちるような堆積状態で、黒褐色細粒砂の層が認められる。主体となる中粒砂からは遺物の出土はほとんど見られないが、岸

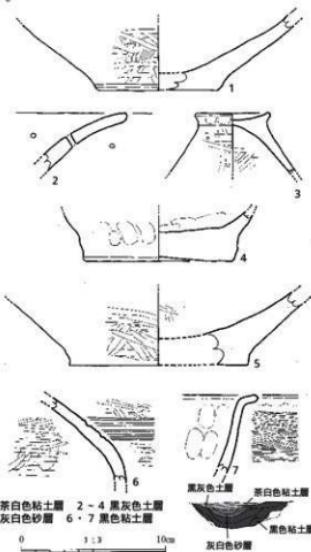
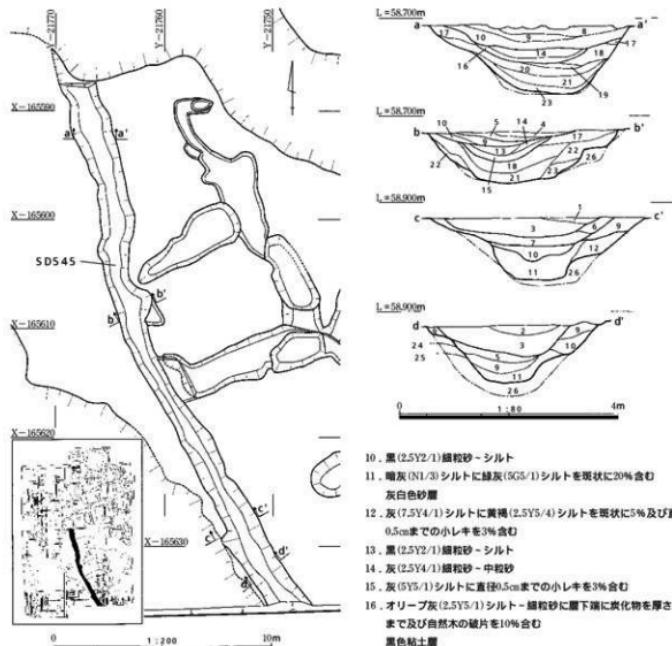


fig.51 SD545出土遺物



17. 黒褐(10YR3/1)シルト－繊維砂に堆積(10YR3/4)繊維砂を斑状に含む
20%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む

18. 黒褐(2.5Y3/1)繊維砂－中粒砂に堆積(10YR3/4)繊維砂を斑状に含む
10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む

19. 灰(10Y4/1)中粒砂－繊維砂にオリーブグリーン(2.5GY5/1)シルトを直徑5cmまでのブロックで10%含む

20. 緑(7.5G5/1)繊維砂－中粒砂に自然木片を5%含む

21. 墓頭緑(10G4/1)繊維砂

22. 墓頭緑(5G4/1)シルトに灰白(7.5Y7/2)粗粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む

23. 緑灰(10G4/1)繊維砂に堆積(10G4/1)繊維砂を直徑5cmまでのブロックで15%含む

24. 黄褐(2.5Y4/5)粗粒砂－中粒砂に褐(10YR4/6)繊維砂－中粒砂を斑状に10%含む

25. 墓頭緑(3N/1)シルト

26. 緑灰(5G5/1)繊維砂－シルト

fig.52 SD545平面・土層断面図

辺に堆積する黒褐色細粒砂の層からは、土器小片が出土する。

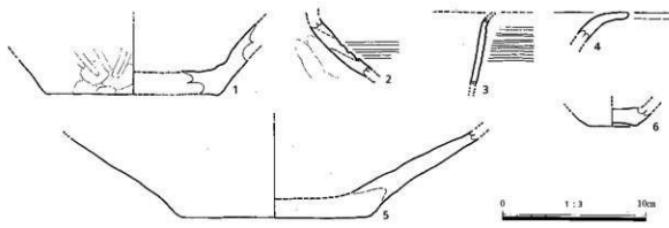


fig.53 SR550出土遺物

遺物 (fig.53) 出土遺物のうち土器6点について報告を行う。

1は底部破片である。外面の調整は縦方向のミガキを施す。2は肩部破片である。現状で3条のヘラ描沈線を施す。3は頸部破片である。現状で6条のヘラ描沈線を施す。4は口縁部破片である。5は底部破片である。肩部壁面は大きく外傾して広がる。6は底部破片である。外底面が凹面をなす。

(4) 周溝墓

(2) で報告した溝は、単独あるいはいくつかが組み合わさることで周溝墓を構成すると考えられる。ここでは溝の配置から周溝墓と認定したものについて報告を行う。なお、復元される墳丘規模・主軸・時期については一覧表 (tab.1) を参照されたい。

周溝墓1 (fig.57) U-W-5~6区に位置する。

SD110を南側周溝とする。大半は調査区外にあり全形は不明である。築造時期は明確ではないが、埋没時期は埋土が共通することから周溝墓2と相前後する時期には築造されたと考えられる。

周溝墓2 (fig.57, 58) X-AE-5~12区に位置する。

SD100によって四周を囲まれる。墳丘主軸は北を指向する。墳丘断ち削りを行ったが、観察された土層は周溝外側肩と連続するものであり、墳丘盛土は確認できなかった。北西隅は周溝がめぐらしく陸橋となっている。西側周溝を周溝墓5と共に有する。東側周溝から出土した細頸壺 (fig.14-6) が供獻土器と考えられるが、掘削後溝がある程度埋まつた後に横倒しになつて埋没している状態を、築造時墳丘上に供獻してあった土器が周溝内に転落したと考えるならば、中層以上より出土する土器の時期である大和第II-3様式が周溝墓2の墳丘築造時期下限と考えられる。

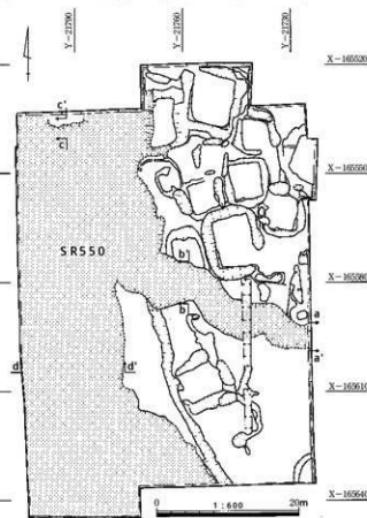
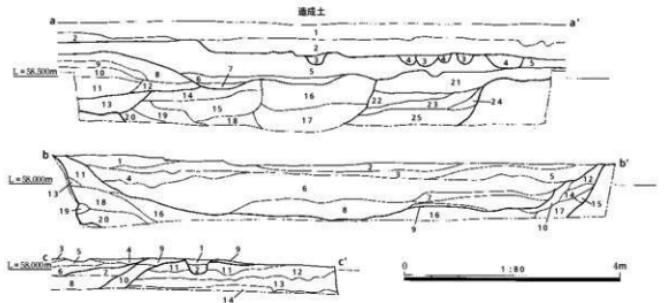


fig.54 SR550平面図



a-a' 剥離面

- 緑灰(5G5/1)シルト
- 暗灰(2.5V4/2)細粒砂 - シルトに暗褐(10YR3/4)細粒砂を斑状に20%及び直徑0.5cmまでの小レキを15%含む
- 黄灰(2.5V4/1)シルト - 細粒砂に暗褐(10YR3/3)細粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- にぶい黄褐(10YR4/1)細粒砂 - シルトに黄褐(2.5V5/3)細粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 黒褐(10YR2/2)細粒砂 - シルトに暗褐(10YR3/4)細粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを20%含む
- 灰灰(2.5Y6/2)細粒砂
- 黄褐(2.5V4/1)シルト - 細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを15%含む
- 黒褐(2.5Y3/2)細粒砂 - シルトに直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 灰オリーブ(5V5/2)細粒砂 - 中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを20%含む
- オリーブ黒(5Y3/1)細粒砂 - シルトに黄褐(2.5Y5/3)シルトを直徑5cmまでのブロックで10%含む
- 黄褐(2.5Y5/3)シルトに接する(10YR4/6)細粒砂を斑状に35%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂 - シルトに暗灰(2.5V5/2)中粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを30%含む
- 緑灰(10Y5/1)シルト
- 黒(10Z2/2)細粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを20%含む
- 黒(10Z2/2)細粒砂
- 灰オリーブ(5V5/2)細粒砂 - 中粒砂
- 緑灰(10Y5/2)細粒砂 - 中粒砂
- 緑灰(10Y5/1)細粒砂に暗灰(7.5G5/1)シルトを直徑5cmまでのブロックで30%含む
- 暗緑(7.5Y5/1)シルト
- 黄褐(2.5Y3/2)シルトを直徑3cmまでのブロックで10%及び直徑0.5cmまでの小レキを20%含む
- 灰(7.5Y5/1)中粒砂 - 細粒砂に黒(10Z2/1)細粒砂を斑状に40%含む
- 暗灰(10N3/1)中粒砂 - 細粒砂に灰(5Y4/1)細粒砂を斑状に30%含む
- 黒(10Z2/1)細粒砂 - 中粒砂
- 黒(10Z2/1)細粒砂に灰(7.5Y4/1)シルトを斑状に20%含む

b-b' 剥離面

- 暗褐(10YR3/3)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを20%含む粘性、しまり共に強い
- 褐(10YR4/4)細粒砂 - シルトに褐褐(10YR2/2)シルトを斑状に40%及び直徑0.5cmまでの小レキを含む
- 黄褐(10YR5/6)シルトに黒褐(10YR2/2)シルトを斑状に5%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%、泥炭の中央付近では灰白(10YR8/1)細粒砂を部分的に含む。粘性強い
- 黒褐(10YR2/1)粗粒砂は堅く、しまり共にない。北側の泥炭の附着付近では堅度が強くなる。粘性あり。しまり強い。
- 褐灰(10YR6/1)粗粒砂

- 灰黄褐(10YR5/2)粗粒砂 - 粗粒砂粘性、しまり共にない。細粒砂は若干白味がかり、粗粒砂と細粒砂がシマ状に堆積している。
- 暗青灰(10YR5/1)シルト - 粗粒砂粘性あり、しまりは弱い。
- にぶい灰(10YR7/2)細粒砂、粘性、しまり共にない。部分的に粗粒砂を含む。

- 暗青灰(10YR4/1)シルト粘性強くしまり弱い
- 暗青灰(10YR3/1)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを5%含む

- 黒(10YR2/1)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを10%含む。粘性やや有り、しまり弱い。

- 黒褐(10YR3/1)細粒砂に接する(10YR4/4)シルトを部分的に及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む。粘性有り、しまり弱い。

- 暗褐(10YR2/3)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを含む。粘性有り、しまりより強し。

- 灰褐(10YR2/1)中粒砂

- 暗青灰(10YR4/1)シルト - 粘性、しまり有り

- 赤灰(2.5YR5/1)シルト - 細粒砂に崩赤褐(2.5YR5/6)細粒砂を帯状に含む

- 黒(10YR2/1)細粒砂 - 中粒砂、粘性、しまり有り

- 黒褐(10YR2/2)中粒砂

- 灰褐(10YR2/1)細粒砂 - シルト

- 黒(10YR2/1)細粒砂 - レキ砂とんど含まない

- 黒(10YR2/1)細粒砂 - 中粒砂

- 黒(10YR2/1)シルトに接する(10YR3/3)シルトを帯状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを1%含む

- 灰(10Y4/1)シルトに暗褐(10YR3/3)シルトを帯状に10%含む

- オリーブ灰(7.5Y3/2)シルトに暗褐(10YR3/3)シルトを帯状に5%及び直徑0.5cmまでの小レキを1%含む

- オリーブ灰(7.5Y3/2)シルトに接する(10YR3/3)シルトを帯状に10%含む

- オリーブ灰(10Y5/2)中粒砂 - 粗粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを3%含む

- 暗褐(10YR4/6)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを10%含む

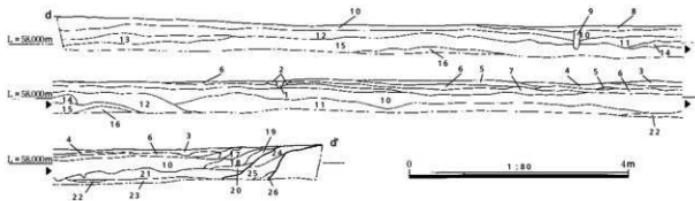
- オリーブ灰(5V5/2)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを1%含む

- 黒褐(2.5Y3/1)シルトに接する(7.5Y3/4)シルトを帯状に3%及び直徑0.5cmまでの小レキを1%含む

- 暗褐(2.5Y3/1)シルトに接する(7.5Y3/4)シルトを帯状に20%含む

- 暗褐(2.5Y3/1)シルトに接する(7.5Y3/4)シルトを帯状に20%含む

fig.55 S550土層断面図（1）



- d - d'断面圖
1. 黒(10YR2/1)細粒砂 - シルトを直徑0.5cmまでの小レキを15%含む
 2. 黒褐(10YR3/1)細粒砂 - シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 3. 黄灰(25Y5/1)粗粒砂 - 中粒砂
 4. 墓灰(10YR3/1)シルトに褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 5. 黒(25Y2/1)シルトに灰オリーブ(5Y6/2)シルトを直徑3cmまでのブロックで30%含む
 6. 黒褐(10YR3/1)細粒砂に黄褐(2.5Y5/3)細粒砂を斑状に20%含む
 7. 灰オリーブ(5Y5/2)シルトに灰(5Y4/1)シルトを直徑1cmまでのブロックで15%含む
 8. 灰オリーブ(5Y5/3)細粒砂に褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に15%含む
 9. 黄灰(25Y4/1)シルトに暗褐(10YR3/4)細粒砂を斑状に5%含む
 10. 緑(7.5G5/1)シルトに褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に10%含む
 11. 灰オリーブ(5Y6/2)粗粒砂 - 中粒砂
 12. 黄灰(25Y5/1)粗粒砂 - 中粒砂
 13. 灰(10Y3/1)細粒砂 - 中粒砂
 14. 灰白(5Y7/2)中粒砂 - 粗粒砂
 15. 褐灰(10GY5/1)細粒砂 - 中粒砂に灰白(7.5Y7/1)中粒砂 - 粗粒砂をシマ状に30%及び褐(10YR4/6)粗粒砂 - 中粒砂をシマ状に30%含む
 16. 灰(5Y4/1)粗粒砂 - 中粒砂
 17. 黒(25Y2/1)細粒砂 - 中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを20%含む
 18. 黒(25Y2/1)シルト - 細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 19. 黒(25Y2/1)シルトに灰(10Y4/1)シルトを直徑3cmまでのブロックで30%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
 20. 細粒砂(7.5GY5/1)シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に3%及び黒(2.5GY2/1)細粒砂 - シルトを斑状に5%含む
 21. オリーブ(5Y6/1)細粒砂 - 中粒砂
 22. オリーブ(5Y6/1)細粒砂に暗褐(10YR3/1)を斑状に30%含む
 23. 墓灰(10YR3/1)シルトに自然木片を10%含む
 24. 黒褐(10YR3/1)細粒砂 - シルトに直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
 25. 墓灰(10YR3/2)細粒砂 - シルトに直徑0.5cmまでの小レキを5%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 26. 墓灰(10YR3/1)細粒砂 - シルトに緑(7.5GY5/1)細粒砂を斑状に30%含む

fig.56 SR550土断面図(2)

周溝墓3 (fig.57) AD - AE-5・6区に位置する。SD90を南側周溝とする。大半は調査区外にあり全形は不明である。SD90より出土した完形に接合可能な甕・壺 (fig.13) が供獻土器と考えられるが、周溝墓2と同様に最下層が埋没した後に横倒しの状態で出土しており、土器が埋没する過程も周溝墓2と同じと考えられるため、これらの土器の時期である大和第III-1様式が築造時期の下限と考えられる。

周溝墓4 (fig.57) AE - AG-7~9区に位置する。SD120の北側半分を南側周溝とする。大半は調査区外にあり全形は不明である。SD120は西端が折れ曲がり北側調査区外にのびると考えられるため、その存在が想定される。南側周溝を周溝墓7と共有する。供獻土器と考えられる出土状況の土器は見られないため、時期比定は困難である。

周溝墓5 (fig.57) U - X-8 ~ 13区に位置する。SD100によって北・東・南側を囲まれる。西側はSR550によって破壊されており全形は不明であるが、東側周溝の形状から推測すると埴丘主軸は北を指向する。東側周溝を周溝墓2と共有する。供獻土器と考えられる出土状況の土器は見られないが、SD100は周溝墓2の周溝でもあり、周溝墓2が大和第II様式後半と考えられること、SD100からは大和第II様式後半に比定される比較的大きな土器片が他にも出土していることを踏まえると、周溝墓5の築造時期も大和第II様式後半と推定される。

周溝墓6 (fig.57, 58) Y ~ AC-12 ~ 15区に位置する。SD266を北側、SD250を西側、SD273を南側、SD140を東側周溝とする。埴丘主軸は北を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、観察された土層は周溝外側肩と連続するものであり、埴丘盛土は確認できなかった。それぞれの周溝は連続せず、四隅が切れた平面形を呈する。東側周溝は周溝墓11と共有する様でもあるが、周溝墓11との接点は隅で接するのみであり、溝同士の切合と考えたほうが妥当である。供獻土器と考えられる出土状況の土器はみられないため、時期比定は困難である。

周溝墓7 (fig.57, 58) AD - AH-9~13区に位置する。SD160を西側および南側周溝、SD120を北側および東側周溝とする。埴丘主軸は北を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、観察された土層は周溝外側肩と連続するものであり、埴丘盛土は確認できなかった。SD160・120は連続せず、北西隅と南東隅の周溝が切れている。北側周溝は周溝墓4と共に共有する。供献土器と考えられる出土状況の土器はみられないため、時期比定は困難であるが、埋土の状態より、埋没時期は周溝墓4と同時期と考えられる。

周溝墓8 (fig.57, 58) AG - AL-11~17区に位置する。SD130を西側および南側周溝とする。北東側が調査区外へ広がり全形は不明であるが、西側周溝の形状から推測すると埴丘主軸は北北東を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、植物に起因すると考えられる擾乱を確認したほかは基本層序第VI層に位置づけられる粗粒砂を主体とする層を確認したのみであり、埴丘盛土は認められなかった。SD130より出土する完形に復元可能な土器が供献土器と考えられるが、周溝底部にはほとんど接する位置より出土しており、掘削後直に転落したか、当初より周溝内に置かれていたものと考えられる。したがって、これらの土器の時期である大和第III様式が周溝墓8の築造時期と考えられる。

周溝墓9 (fig.57) U - X-17~19区に位置する。SD271を東側周溝とする。南北を区切る周溝は無く、西側がSR550に破壊されているため全形は不明である。東側周溝を周溝墓10と共に共有する。東側周溝以外確認できず、周溝墓としての認定は他の遺構よりも弱いが、後述する周溝墓10の埴丘主軸とSD271の主軸が大きくずれている点を踏まえて、この位置に周溝墓の存在を推定した。供献土器と考えられる出土状況の土器はみられないが、SD271埋土中より出土した弥生土器破片 (fig.27-1) が大和第II~III様式期と考えられ、周溝墓9も同様な時期が与えられるであろう。

周溝墓10 (fig.57, 58) X - AC-15~18区に位置する。SD271を西側、SD275を北側、SD277を東側および南側の周溝とする。埴丘主軸は北西を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、観察された土層は自然堆積に起因するものであり、埴丘盛土は確認できなかった。西側周溝を周溝墓9と共に共有する。東・西側の周溝が深く、南・北側の周溝が浅い。東側周溝の埋土は周溝墓11と共に通してあり、埋没時期は周溝墓11と同時期と考えられる。出土位置は詳らかでないが、SD277埋土中より完形に近い形にまで復元可能な細頸壺胴部片 (fig.27-3) が出土しており、これが供献土器であると仮定するならば、この土器の時期である大和第II~3様式には築造されていたと考えられる。

周溝墓11 (fig.57, 58) AC - AG-14~18区に位置する。SD140によって四周を囲まれる。埴丘主軸は北を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、観察された土層は自然堆積に起因するものであり、埴丘盛土は確認できなかった。北西隅を周溝墓6の東側周溝と共に共有する。西側周溝の埋土は周溝墓10と共に通してあり、埋没時期は周溝墓10と同時期と考えられる。供献土器と考えられる出土状況の土器はみられないが、埋土上層より出土した大和第III様式後半の土器片 (fig.24-4) が溝の埋没年代を示すものと考えられる。

周溝墓12 (fig.57, 58) W - AA-20~24区に位置する。埴丘および周溝南側はSR550によって切られている。SD220によって東・西・北側を囲まる。埴丘主軸は北北西を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、植物に起因すると考えられる擾乱を確認したほかは基本層序第VI層に位置づけられる粗粒砂を主体とする層を確認したのみであり、埴丘盛土は認められなかった。また、こここの断ち割り調査ではSR550との完形を確認するために、埴丘内からSR550へ続く確認トレンチを2ヵ所設定した。その結果J'-J'間断面からは周溝（第8・9層）がSR550（第1~7層）に切られている様子を土層の上からも確認できた。またJ'-J'間断面からは、地山層（第13~18層）直上にSR550埋土（第1~12層）が堆積している様子が観察でき、南側の周溝がSR550によって完全に破壊されている様子が確認できた。周溝埋土中よりかなり大きな広口壺破片 (fig.36-2) が出土しており、これが供献土器であると仮定するならば、築造時期は大和第III様式と考えられよう。

周溝墓13 (fig.57, 58) AA - AF-18~24区に位置する。SD200によって四周を囲まる。埴丘主軸は北北西を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、植物に起因すると考えられる擾乱を確認したほかは基本層序第VI層に位置づけられる粗粒砂を主体とする層を確認したのみであり、埴丘盛土は認められなかった。東側周溝の南側3分の1は溝が

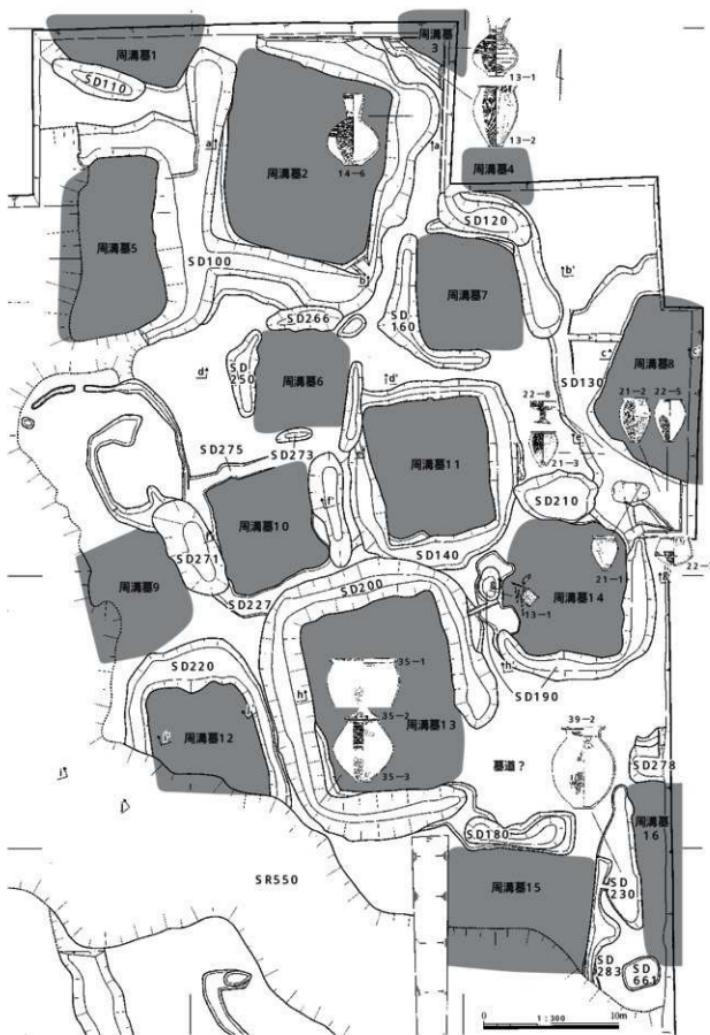


fig.57 SR550以北に営まれた周溝墓

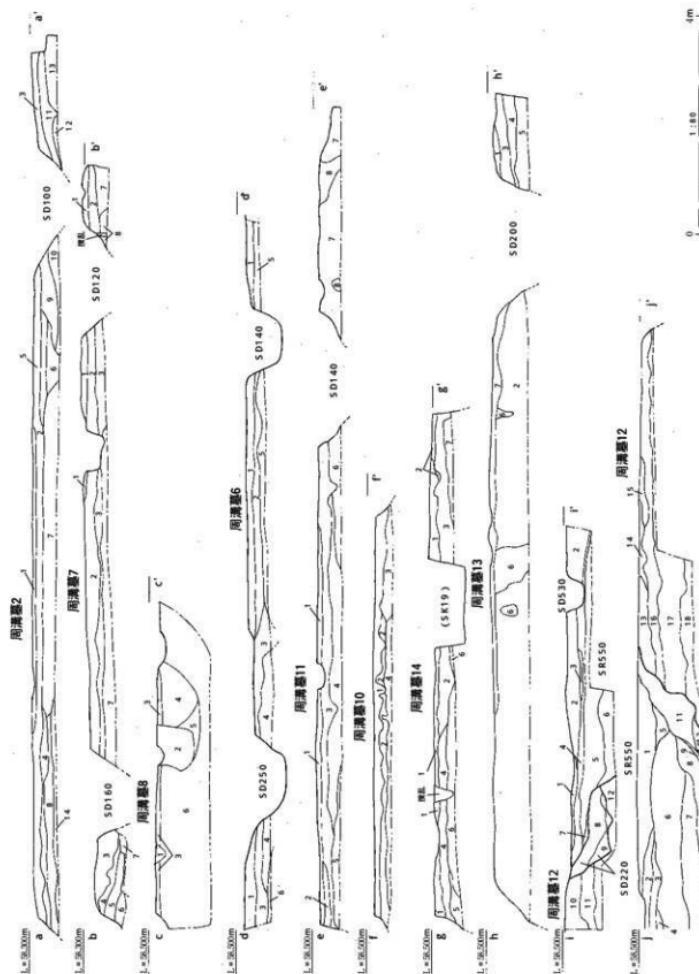


fig.58 周溝墓2・6・7・8・10・11・12・13・14墳丘部断ち割り土層断面図

a-a' 開断面(周溝墓5丘部)

- にぶい黄(10YR4/3)シルトに黒褐(10YR3/4)細粒砂を斑状に30%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒褐(2.5Y3/1)シルトに黒褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを3%含む
- 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂・中粒砂中に(10Y1M/6)細粒砂を斑状に10%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
- 灰オリーブ(5Y5/3)細粒砂中に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- オーリーブ(2.5V4/4)シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 灰オリーブ(5Y5/3)細粒砂中に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 灰(5Y4/1)細粒砂・シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 明暦灰(10G4/1)細粒砂中に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%含む
- 灰(5Y4/1)細粒砂・シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂・中粒砂中に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 灰オリーブ(5Y5/2)中粒砂・粗粒砂
- 灰オリーブ(5Y5/3)細粒砂に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 灰オリーブ(5Y5/3)細粒砂に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 明暦灰(10G4/1)細粒砂中に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%含む
- 灰(5Y4/1)細粒砂・シルトに褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%含む
- 明暦灰(2.5Y5/2)中粒砂・細粒砂中に直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 - b-b' 開断面(周溝墓7丘部)
- 黄(2.5Y5/1)シルト・細粒砂に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に40%含む
- 黒(10YR2/1)細粒砂・シルトに黒褐(10YR3/3)細粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを15%含む
- 暗灰(2.5Y5/1)細粒砂・シルトに黒褐(2.5Y3/1)細粒砂を斑状に20%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
- 黄(2.5Y4/1)細粒砂・中粒砂中に暗灰(2.5Y5/2)シルトを斑状に10%含む
- 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂・中粒砂
- 灰(2.5Y5/2)中粒砂
- 明暦灰(5G4/1)細粒砂・シルトに褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に5%含む
- 明暦灰(5G4/1)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 - c-c' 開断面(周溝墓8丘部)
- 暗灰(5P4/1)中粒砂・直徑0.3cmまでの小レキを含む
- 明暦灰(5P4/1)中粒砂・粗粒砂に直徑0.3cmまでの小レキを含む
- 明暦灰(5P4/1)中粒砂・粗粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
- 灰オリーブ(7.5YR5/3)中粒砂
- にぶい黄(10YR5/1)中粒砂・粗粒砂
- 褐(10YR5/1)中粒砂・粗粒砂
- にぶい黄(7.5Y/4)細粒砂・粗粒砂。粗粒砂と細粒砂がシマ状に堆積
 - d-d' 開断面(周溝墓5丘部)
- 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂・シルトに黒褐(10YR3/3)シルトを斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを3%含む
- 黄(2.5Y5/1)細粒砂・シルトに直徑0.5cmまでの小レキを3%含む
- 灰オリーブ(7.5Y/6/2)細粒砂に黒褐(2.5Y3/1)細粒砂を斑状に10%含む
 - e-e' 開断面(周溝墓11丘部)
- 黒(10YR2/1)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを50%含む
- 黒褐(10YR3/1)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを40%含む
- 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂・中粒砂に黒褐(10YR3/3)細粒砂を斑状に5%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 黒(5Y2/1)中粒砂・細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを3%含む
- 暗灰(2.5Y/2)中粒砂・粗粒砂
- 明暦灰(2.5Y/2)中粒砂・粗粒砂
- 明暦灰(2.5Y/2)中粒砂・粗粒砂
 - f-f' 開断面(周溝墓10丘部)
- 黒褐(2.5Y3/2)シルト・細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを20%含む
- 灰オリーブ(5Y5/2)シルト・細粒砂に黄褐(2.5Y5/4)細粒砂を斑状に20%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 灰オリーブ(5Y5/2)シルト・細粒砂
- 黒褐(2.5Y1/1)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを30%含む
 - g-g' 開断面(周溝墓11丘部)
- 黒褐(2.5Y3/2)細粒砂に褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に15%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 暗灰黄(2.5Y4/2)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを30%含む
 - h-h' 開断面(周溝墓13丘部)
- 黒褐(10YR2/1)細粒砂・細粒砂に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に5%及び直徑0.5cmまでの小レキを10%含む
- 暗灰(2.5Y2/1)粗粒砂・中粒砂
 - i-i' 開断面(周溝墓13丘部)
- 黒褐(10YR2/1)シルト・粗粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを30%含む
- 灰オリーブ(5Y5/2)中粒砂・粗粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを30%含む
 - j-j' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 黄褐(10YR4/2)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを3%含む
- 褐(10YR3/1)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 - k-k' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 黒褐(10YR2/1)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 - l-l' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(5Y5/1)シルト
 - m-m' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(5Y5/1)シルトにリーピー質(5Y6/4)細粒砂をシマ状に50%含む
 - n-n' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 黒褐(10YR3/1)シルトに直徑0.5cmまでの小レキを5%含む
 - o-o' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - p-p' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - q-q' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂・中粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - r-r' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - s-s' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - t-t' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - u-u' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - v-v' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - w-w' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - x-x' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - y-y' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)
- 暗灰(10YR3/3)細粒砂に直徑0.5cmまでの小レキを含む
 - z-z' 開断面(周溝墓13丘部とRS550埋土)

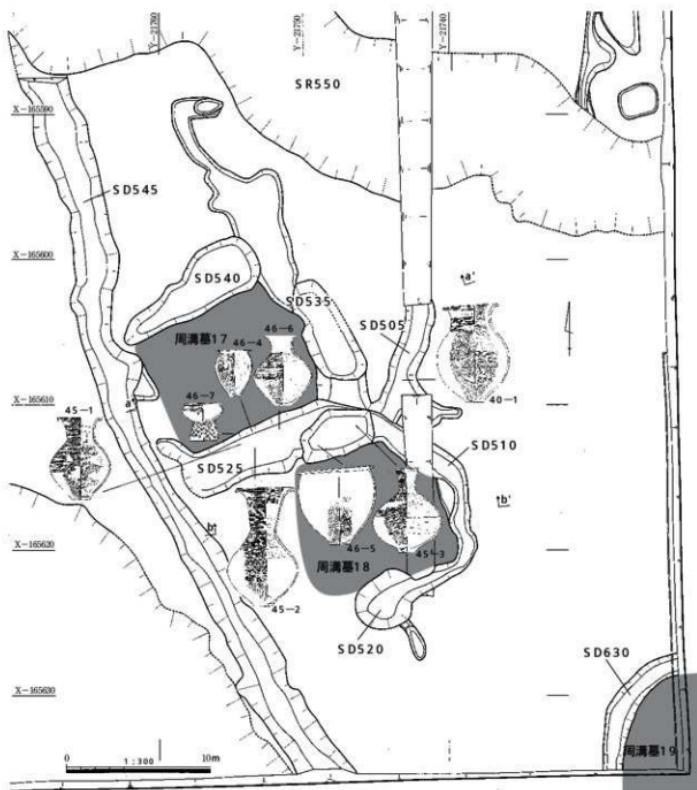


fig.59 SR550以南に営まれた周溝墓

めぐらず、陸橋となっている。陸橋の東側には、他の周溝がめぐらない平坦地が東方へのびてあり、墳丘内へ進入するための墓道のような役割を果たしていたとも考えられよう。西側周溝は周溝墓12の東側周溝と接しており、主軸も共通することから、強い関係性を想起させる。出土状況は明らかでないが、ほぼ完全に接合可能な様（fig.34-10）が中層より出土しており、これが供獻土器であると仮定するならば大和第II-3様式が築造時期と考えられよう。ただし、墳丘南西より検出された土器宿室に用いられる土器（fig.35）の形式が大和第III-4様式である事から、築造後の3時間間に渡る遊びが行われていたことを想起させる。

周溝基14 (fig.57, 58) AF ~ AJ-16~21区に位置する。SD210を北側、SD190を東・西・南側周溝とする。埴丘主軸は北を指向する。埴丘断面剥りを行ったが、観察された十層は自然堆積に起因するものであり、埴丘盛土は確認

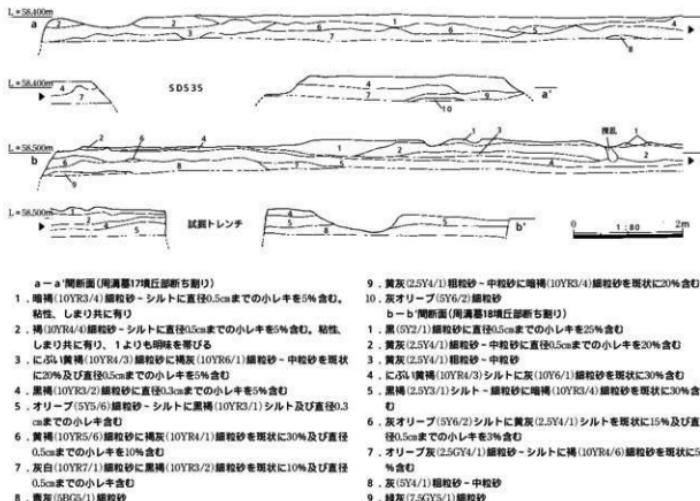


fig.60 周溝基17・周溝基18埴丘部断ち割り土層断面図

できなかった。北東および北西隅には周溝がめぐらないようである。出土状況は明らかでないが、SD210埋土中よりほぼ完形に復元可能な広口壺 (fig.32-1) が出土しており、これが供獻土器であると仮定するならば、大和第III-3様式が埴丘築造時期の下限と考えられよう。西側周溝より鋸2丁および木棺材と考えられる木材が出土している。

周溝基15 (fig.57) AF - AI-25 - 28区に位置する。南側はSR550によって切られており全形は不明である。SD180を北側、SD283を東側周溝とする。北東隅の周溝が切れた部分は、周溝基13の箇所で述べた墓道状の平坦地につながっており、関係性が想起される。供獻土器と考えられる土器は出土しておらず、時期比定は困難であるが、東側周溝 (SD283) と、東隣する周溝基16の西側周溝 (SD230) との切合関係により、周溝基16に先行するようである。周溝基16 (fig.57) AJ - AK-23 - 28区に位置する。東側は調査区外へと続くため全形は不明である。SD278を北側、SD230を西側、SD661を南側周溝とする。埴丘主軸は北を指向する。SD230埋土より供獻土器と考えられる広口壺 (fig.39-2) が出土しているが、溝底部から浮いた位置に破壊された状態での出土であり、これが築造埴丘上に置かれていたものの転落した様子を考えるならば、築造時期は大和第III-3様式後半と考えられよう。

周溝基17 (fig.59, 60) X - AC-31 - 37区に位置する。SD540を北側、SD535を東側、SD525を南側周溝とする。埴丘主軸は北西を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、観察された土層は周溝外側肩と連続するものであり、埴丘盛土は確認できなかった。西側の周溝は存在しないが、埴丘西端が想定される箇所にSD545が存在しており、これが周溝基17と何らかの関係を持つことが想定される。南側周溝 (SD525) 埋土中より多くの土器が良好な状態で出土しており、これらは供獻土器と考えられる。南側周溝は周溝基18の北側周溝もあるため、まずこれらの土器の帰属について整理する。

まず検出状況の平面位置では、溝の北側寄りに出土する一群と、溝の南側寄りに出土する一群とに分けられる。

tab.1 弥生時代中期周溝墓主要諸元

遺構名 (×1, 2)	主軸 平面規模(m) 長軸×短軸 幅・深さ	周溝規模(m) 幅	供獻土器(×3)	周溝				時期 (×4)	備考
				東	西	南	北		
周溝墓1	**** *** × ***	2.2 - 1.12		***	***	SD110	***		
周溝墓2	北- 15.1 × 13.6 3.65 - 1.26	縹類壹1以上、広口長縹壹	SD100 SD100 SD100 SD100					II-3	北東隅に隆構
周溝墓3	**** *** × ***	1.2 - 0.54 縹1、縹類壹1		***	***	SD90	***	III-1	
周溝墓4	**** *** × ***	2.4 - 1.18		***	***	SD120	***	?	周溝墓7と周溝共有
周溝墓5	北- 13.8 × ***	3.3 - 0.86 (縹類壹)	SD100 *** SD100 SD100					II-3?	西側SR550に埋される
周溝墓6	北- 8 × 7.7	1.95 - 0.88	SD140 SD250 SD273 SD266					?	周溝四隅が切れる
周溝墓7	北- 9.5 × 8.5	2.1 - 1.04	SD120 SD160 SD160 SD120						周溝4&周溝共有
周溝墓8	北北東- 13.4 × ***	3.05 - 0.72 縹3、台付縹1、無縹壹2		***	SD130	SD130	***	III-3	
周溝墓9	**** *** × ***	3.5 - 0.7 (縹類壹)	SD271	***	***	***	***	II-3?	周溝墓10と周溝共有
周溝墓10	北西- 8.7 × 8.7	2.5 - 1.1 (縹類壹)	SD271 SD277 SD271 SD275					II-3	周溝墓9と周溝共有
周溝墓11	北- 11.0 × 9.7	2.5 - 0.7	SD140 SD140 SD140 SD140					III-3?	
周溝墓12	北北西- 9.5 × 8.7	3.6 - 0.7 (広口壹)	SD220 SD220 *** SD220					III	南側SR550に埋される
周溝墓13	北北西- 16.7 × 12.6	3.6 - 1.4 (縹)	SD200 SD200 SD200 SD200					II-3	填丘南西隅に土器複数(Ⅲ-4)
周溝墓14	北- 10.3 × 9.8	2.5 - 1.0 広口壹1	SD190 SD190 SD190 SD210					III-3	周溝内より、縹2・木程使用材
周溝墓15	**** *** × ***	3.2 - 0.8	SD283	***	***	SD180			
周溝墓16	北- 13.4 × ***	2.1 - 0.7 広口壹1		***	SD230	SD661	SD278	III後半	
周溝墓17	北西- 13.7 × 9.4	3.3 - 0.6 縹1、広口壹3、台付縹1、縹1	SD535 SD545 SD525 SD540					III-1 - 3	周溝墓18と周溝共有
周溝墓18	北西- 16.6 × 11.2	2.1 - 0.9 周溝壹7と同様(×5)	SD510 *** SD520 SD525					III1	周溝墓17と周溝共有
周溝墓19	**** *** × ***	1.8 - 0.8	***	***	***	SD680	?		

×1 主軸は長軸・短軸に関わらず、座標北からの距離を表記した。

×2 × - の記号は、各方向22.5°の範囲内において東に埋れる場合を×、西に埋れる場合を-とした。

×3 出土状況が詳らかでないものに関してして、ほぼ完形に復元できる個体がある場合は該箇所に記号を付記した。

×4 時期は、周溝墓造造の下限を示す。

×5 共有する添SD525出土土器があるが、掲載については推測の域を出ないため。

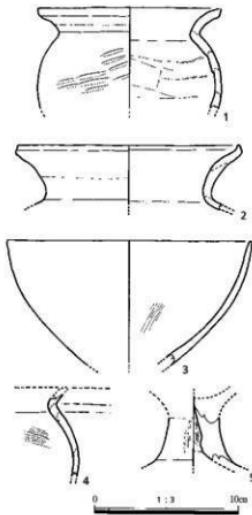
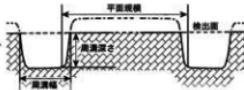


fig.61 SP682出土遺物

両群の土器様式は前者の土器は概ね大和第III様式後半に位置づけられるものであるのに対して、後者は概ね大和第III様式前半に位置づけられる。両群の出土層位は、前者は1点を除いて下層からの出土であるのに対して、後者は上層からの出土である。また前者は周溝底（あるいは肩）直上から出土する。以上の点を踏まえると、北側出土土器群中の下層出土土器は周溝墓17に所属する蓋然性が高く、しかもあらかじめ溝の中に供献されたものであろう。これに対して南側出土土器群は周溝墓18に所属する蓋然性が高く、しかも築造時に埴丘上に供献されていたものが溝内に転落したものと考えられる。したがって周溝墓17は、築造時期は明確ではないが、早くとも大和第III様式後半では利用されていたと考えられる。周溝墓18 (fig.59, 60) AB - AF-35 - 40区に位置する。SD525を北側、SD510を東側、SD520を南側周溝とする。埴丘主軸は北西を指向する。埴丘断ち割りを行ったが、観察された土層は周溝外側肩と連続するものであり、埴丘盛土は確認できなかった。西側の周溝は存在しないが、周溝墓17と同様にSD545との関係が想定される。北側周溝 (SD525) より、多くの土器が良好な状態で出土しており、これらは供献土器と考えられる。これら供献土器の帰属については周溝墓17で整理したとおりであり、それを前提にすると、築造時期は大和第III様式前半と考えられる。周溝墓19 (fig.59) AI - AK-41 - 43区に位置する。SD630を周溝とする。大半が調査区外であり詳細は不明である。

第3項 弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構 と遺物

弥生時代の遺構のうち、SR550に後行する遺構を弥生時代終末期～古墳時代初頭と位置づけて、調査区西部より検出したピット1基、溝10基、土坑6基、南西部より検出した井戸2基、北東部より検出した流路1本について報告を行う。

(1) ピット

調査区全体から検出された。出土遺物より時期比定が可能な1例について報告する。

SP682

遺構 (fig.8) H-29区より検出されたピットである。西半が調査区西壁にかかっており、全体像は不明である。検出径約0.4m、深さ約0.1mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。内部に落ち込むような出土状況で、土器小片がまとめて検出された。遺物 (fig.61) 出土遺物のうち土器5点について報告する。

瓶 1は口縁部から胴部にかけて遺存する。膨らんだ胴部と屈曲した口縁部、外反する口縁部を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部は右上がりのタタキを施す。内面の調整は横方向のハケを施す。

4は胴部から口縁部の破片である。緩やかに立ち上がる口縁部を持つ。内面の調整は横方向のハケを施す。

壺 2は広口壺である。口縁部の破片である。外反する口縁と上方に突出する口縁端部を持つ。口縁部の調整はヨコナデである。

鉢 3は口縁部破片である。内面の調整は縦方向のハケを施す。

高杯 5は脚柱部破片である。外面の調整は縦方向のミガキを施す。

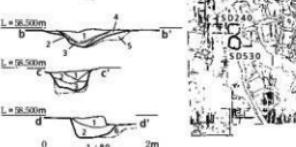
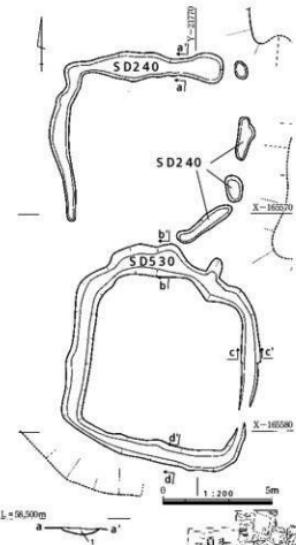
出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

(2) 溝

調査区西部の若干北寄りに集中して検出された。調査の進展とともに、周溝墓を巡る周溝であると認識するに至ったが、調査開始時では認識が不十分で蛇行する溝として調査を行ったこと、隣り合う周溝墓同士で溝を共有する場合があり周溝墓主丘部への帰属が複雑な場合があることから、一旦溝として報告し、溝の配置などを総合的に検証した上で、周溝墓として認定した遺構について後述することとする。

SD240

遺構 (fig.62) R-V-19～22区より検出された溝である。直線部分と直角に屈曲する東北半部と、短い溝が断続的に連続する



1. 黒(2.5Y2/1)シルト・繊粒砂に黒褐(2.5Y3/2)繊粒砂を斑状に20%及び直径1.5cmまでの小レキを15%含む
 2. 黒褐(10YR3/2)繊粒砂に直径0.5cmまでの小レキを20%含む
 3. ぶどう黄褐(10YR4/3)シルト
 4. 黒褐(10YR3/1)シルト
 5. 墓場(10YR3/4)繊粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
- * 記記は各剖面共通

fig.62 SD240・530平面・土層断面図

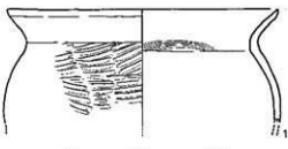


fig.63 SD530出土遺物

西南半部からなる。後述するように浅い溝であるため、南西部の断続した溝も本来は連結していたと考えられる。検出幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。底部断面形態は緩やかな「U」字形である。底面には若干の凹凸が見られる。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

SD530

遺構（fig.62） R-V-22-25区より検出された溝である。直線部分と直角に屈曲する部分からなり、ほぼ東西南北に各辺をむけた正方形を呈する。検出幅約0.5m、深さ約0.4mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。埋土は黒褐色の細粒砂を主体とする。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物（fig.63） 出土遺物のうち土器1点について報告する。

機 1は口縁部から胴部にかけて遺存する。緩やかに立ち上がる口縁部を持つ。外面の調整は口縁はヨコナデを、胴部は右上がりのタタキを施す。内面の調整は口縁部は横方向のハケを施す。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

SD585

遺構（fig.64、65） H-L-21-26区より検出された溝である。西側が調査区外側へとびており全体像は不明であるが、おそらく各辺をほぼ東西南北にむけた正方形になると考えられる。北辺からはSD625・SD615、東辺からはSD600が突出し、南辺の南側肩はSD610と肩を接する。検出幅1.2~2.0m、深さ約0.3mを測る。肩から底部にかけてなだらかに傾斜する。底面は平坦である。埋土は黒褐色細粒砂を主体とする。埋土中より土器片が出土し、とりわけ南辺からは、溝底部に横倒しになったと思われる状態（範囲A）と口縁を下に向けて直立していたと思われる状態（範囲B）で、半分以上復元可能な甕が出土する。土器の後元が半分程度に留まるのは、検出面直下からの出土であるため、上半部が削平されたためと考えられる。土器の周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物（fig.66） 出土遺物のうち土器14点について報告する。

機 1は口縁部破片である。緩やかに屈曲し外反する口縁を持つ。口縁端部は上方へ突出する。2は頸部から口縁部破片である。屈曲した頸部と外反する口縁を持つ。口縁端部は下方へ突出する。3は胴部から口縁部が遺存する。緩やかに屈曲する頸部と外反する口縁部を持つ。口縁端部は面を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部は水平なタタキを施す。

4は完形に接合可能である。出土状況図（範囲A）に示されるのはこの個体である。やや膨らんだ胴部と「く」字形に屈曲する口縁部を持つ。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部に面を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部上半はタタキを、胴部下半はタタキのち縦方向のナデを施す。内面の調整は胴部上半は横方向のハケを、胴部下半は縦方向のハケを施す。

5はほぼ完形に復元可能である。出土状況図（範囲A）に示されるのはこの個体である。球形に膨らむ胴部と「く」字形に屈曲し、外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部は右上がりのタタキを施す。

6は口縁部から胴部中ほどまで遺存する。出土状況図（範囲A）に示されるのはこの個体である。緩やかに屈曲し、外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部には面を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部上半は右上がりのタタキを施す。内面の調整は胴部上半に斜め方向のハケを施す。

7はほぼ完形に接合可能である。出土状況図（範囲A）に示されるのはこの個体である。球形に膨らむ胴部と「く」字形に屈曲し、外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。胴部は2段階成形を行う。外面の調整は口縁端部はヨコナデを、胴部上半は右上がりのタタキを施す。内面の調整は胴部上半に斜め方向のハケを施す。

8は口縁部から胴部中ほどまで遺存する。出土状況図（範囲B）に示されるのはこの個体である。「く」字形に屈

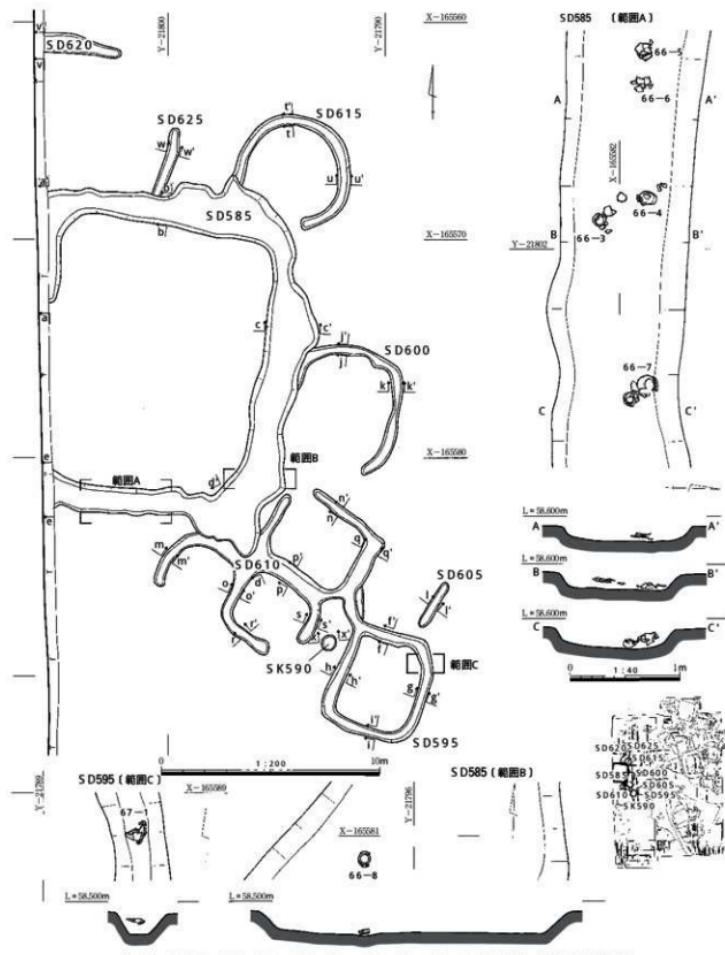
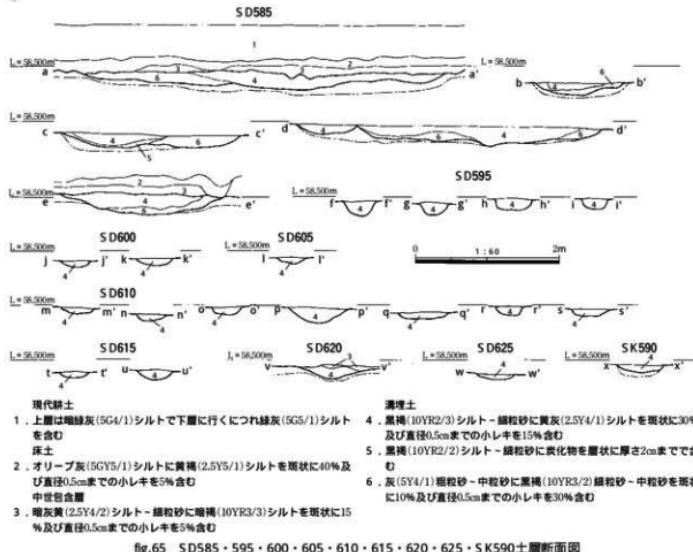


fig.64 SD585・595・600・605・610・615・620・625・SK590平面・遺物出土状況図

曲し、外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部に面を持つ。

9は底部のみ遺存する。球形に膨らむ胴部を持つ。外面の調整は右上がりのタタキを施す。内面の調整は縱方向



のハケを施す。

高杯 10は杯部破片である。皿型の杯部に内湾しながら立ち上がる口縁部を持つ。外面の調整は、縦方向のミガキを施す。11は杯部破片である。皿型の杯部に内湾しながら立ち上がる口縁部を持つ。外面の調整は縦方向のミガキを施す。内面の調整は縦方向のミガキを施す。12は脚柱部破片である。下方にむかって「ハ」字形に広がる脚部を持つ。外面の調整は縦方向のミガキを施す。現状で上下2段の透孔が確認できる。13は脚部破片である。中実の脚柱部と「ハ」字形に広がる裾部を持つ。外面の調整は縦方向のミガキを施す。現状で1箇所の透孔が確認できる。

壺 14は広口壺である。口縁部から胴部の破片である。球形の胴部と緩やかに立ち上がる口縁部を持つ。内面の調整は横方向のハケを施す。

出土土器の様相は、概ね圧内1式に該当すると考えられる。

SD595・SD610

遺構 (fig.64, 65) J-N-25~29区で検出された溝である。直線部分と直角に屈曲する部分からなり、東北方向に主軸を向いた正方形が連結した形状を呈する。検出幅0.6~0.8m、深さ0.1~0.2mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈し、底面は概ね平坦である。埋土中より土器小片が出土し、南東部より横倒しになった状態で、半分以上復元可能な壺が出土している。土器の復元が半分程度に留まるのは、検出面直下からの出土であるため、上半部が削平されたためと考えられる。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.67) 出土遺物のうち土器2点について報告する。

壺 1は直口壺である。出土状況図 (範囲C) に示されるのはこの個体である。底部を欠損するものの、概ね完形に

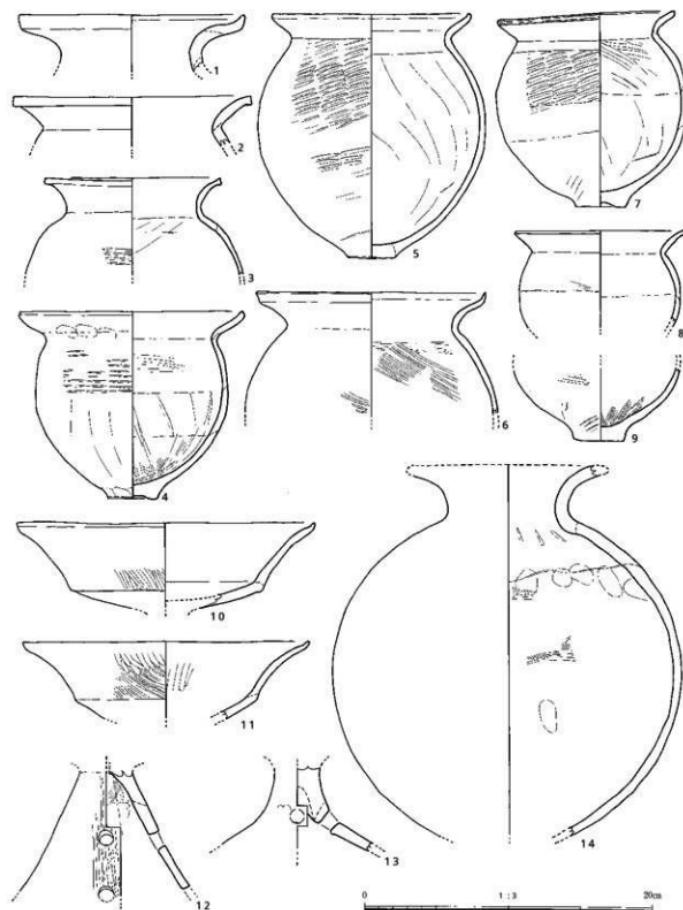


Fig.66 SD585出土遺物

接合可能である。外面の調整は縦方向のミガキを施す。内面の調整は横方向のハケを施す。断面より粘土の積上げを観察すると、倒立して製作したようである。

4は底部のみ遺存する。外面の調整は縦方向のハケを施す。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

SD600

遺構 (fig.64, 65) L・M-23~25区より検出された溝である。直線部分と緩やかに屈曲する部分からなり、西端がSD585に連絡する。検出幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。底面は平坦である。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.67) 出土遺物のうち土器1点について報告する。

壺 2は頸部破片である。緩やかに立ち上がる口縁を持つ。

SD605

遺構 (fig.64, 65) N-27区より検出された溝である。検出幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

SD615

遺構 (fig.64, 65) K・M-20・21区より検出された溝である。ほぼ正円形を呈する。検出幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

SD620

遺構 (fig.64, 65) H・I-18・19区より検出された溝である。西端はトレーナー外側へのびる。検出幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

遺物 (fig.67) 出土遺物のうち土器1点について報告する。

甕 3は口縁部から胴部の破片である。外面の調整は右上がりのタタキを施す。

SD625

遺構 (fig.64, 65) J-21・22区より検出された溝である。検出幅約0.4m、深さ約0.1mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土中より土器小片が出土する。周溝墓をめぐる周溝と考えられる。

(3) 土坑

調査区南西部より検出された。周溝墓群に接してある1基と、周溝墓群からは南に離れて分布する5基について報告する。

SK590

遺構 (fig.64) L-28区より検出された土坑である。周溝墓群に接した位置である。検出径0.6m、深さ0.1m

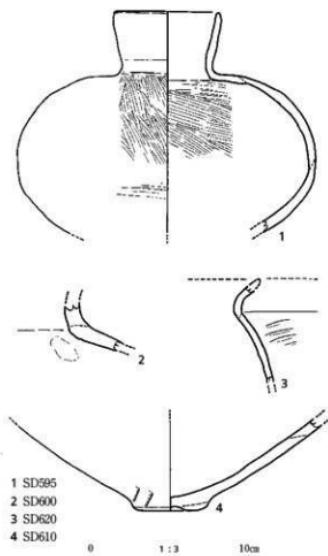


fig.67 SD595・600・610・620出土遺物

を測る。埋土中より、かなり大型の器種不明土器片が出土した。

SK638

遺構 (fig.70) J-40区より検出された土坑である。平面形は円形を呈する。検出径約1.2m、深さ約0.3mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。埋土は黒色を呈するシルト～細粒砂を主体とする。埋土中より土器片が出土する。

遺物 (fig.68) 出土遺物のうち土器3点について報告する。

壺 1は広口壺の口縁部破片である。口縁端部は上方に外反しながら立ち上がる。外面の調整は縦方向のハケを施す。口縁端部下端に斜めの刺突文を施す。

甕 2は口縁部破片である。「く」字形に屈曲する。外面の調整は右上がりのタタキを施す。

鉢 3は外反口縁鉢である。底部を除く多くの部分が遺存する。外面の調整は、胴部に縦方向のハケを施す。内面の調整は口縁部に横方向のハケを施す。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

SK642

遺構 (fig.70) J-41・42区より検出された土坑である。平面形は円形を呈する。検出径約1.3m、深さ約0.5mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。埋土中より比較的多くの土器片が出土する。

遺物 (fig.69) 出土遺物のうち土器5点について報告する。

甕 1は口縁部から胴部上半まで遺存する。「く」字形に屈曲し、外反する口縁部を持つ。口縁端部には面を持つ。外面の調整は口縁部はヨコナデを、胴部上半は右上がりのタタキを施す。内面の調整は横方向のハケを施す。2は底部のみ遺存する。外面の調整は右上がりのタタキを施す。内面の調整は縦方向のハケを施す。5は口縁部から胴部上半まで遺存する。「く」字形に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は面を持つ。内面の調整は横方向のケズリを施す。

高杯 3は脚柱部破片である。外面の調整は縦方向のナデを施す。現状で径約8mmの透孔を上下2段設す。

壺 4は無頸壺の口縁部破片である。口縁端部が肥厚する。径約3mmの孔が1箇所認められる。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

SK649

遺構 (fig.70) J-35区より検出された土坑である。平面形は橢円形を呈する。検出長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。底部断面形態は緩やかな「U」字形を呈する。埋土中より比較的大きな土器片が出土する。

遺物 (fig.71) 出土遺物のうち土器5点について報告する。

甕 1は口縁部から胴部が遺存する。「く」字形に屈曲する。内面の調整は胴部上半に斜め方向のナデを施す。

壺 3は広口壺口縁部破片である。内湾しながら立ち上がる頸部と上方に立ち上がる口縁部を持つ。口縁屈曲部は外側に突出する。

5は胴部が遺存する。球形の胴部を持つ。外面の調整は縦方向のハケを施す。

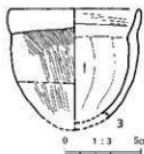


fig.68 SK638出土遺物

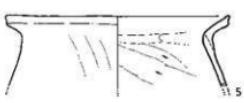
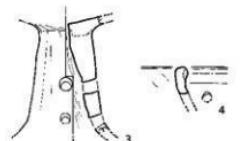
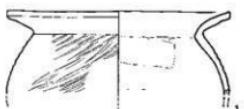
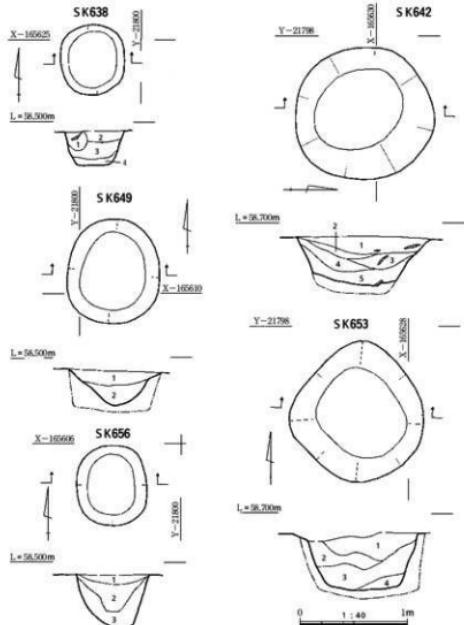


fig.69 SK642出土遺物

第2章 発掘調査の成果



- SK638**
1. 丸筒形・直径10cm/高さ5cm・中程砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 2. 磨擦(2.5YR/2)・縦粒砂・シルトに直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 3. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 4. 黒灰(2.5YR/1)・シルト
- SK642**
1. 丸筒形・直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 2. 磨擦(2.5YR/2)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 3. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 4. 黒灰(2.5YR/1)・シルト
- SK649**
1. 丸筒形・直径10cm/高さ5cm・中程砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 2. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 3. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 4. 黒灰(2.5YR/1)・シルト
- SK653**
1. 丸筒形・直径10cm/高さ5cm・中程砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 2. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 3. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 4. 黒灰(2.5YR/1)・シルト
- SK656**
1. 丸筒形・直径10cm/高さ5cm・中程砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 2. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 3. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 4. 黒灰(2.5YR/1)・シルト
- SK658**
1. 丸筒形・直径10cm/高さ5cm・中程砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
 2. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 3. 黒灰(2.5YR/1)・縦粒砂に直径0.5cmまでの小レキを30%含む
 4. 黒灰(2.5YR/1)・シルト



高杯 2は杯部破片である。皿上の杯部と強く外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。内外面ともに縱方向のミガキを施す。

4は杯部が遺存する。楕円形の杯部を持つ。杯底部は内壁を充填して製作している。外面の調整は縱方向のミガキを施す。内部の調整は横方向のミガキを施す。

SK653

遺構 (fig.70) J-41区より検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈する。検出幅約1.2m、深さ約0.5mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。埋土中より土器9片が出土する。

遺物 (fig.72) 出土遺物のうち土器9点について報告する。

高杯 6は杯部破片である。皿状の杯部に緩やかに立ち上がる口縁部を持つ。8は脚部破片である。下方にむかって「八」字形に広がる脚部を持つ。外面の調整は縱方向のミガキのち、腹部に横方向のミガキを施す。9は脚部破片である。

下方にむかって「八」字形に広がる脚部を持つ。外面の調整は縱方向のミガキを施す。

楕 1・3・4は口縁部破片である。若干内湾しながら立ち上がる口縁部である。

壺 2は口縁部破片である。口縁部が下方に突出する。

器種不明 7は頸部破片である。2条の貼り付け凸帯を有する。5は口縁部破片である。内外面にミガキを施す。

出土土器の様相は、混入と考えられる5・7を除いて概ね庄内1式に

fig.70 SK638・642・649・653・656平面・土層断面図

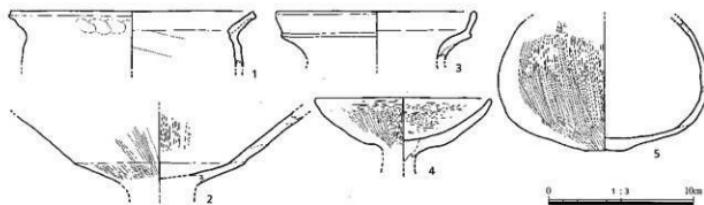


fig.71 SK649出土遺物

該当すると考えられる。

SK656

遺構 (fig.70) J-34区より検出された土坑である。平面形は橢円形を呈する。検出長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.5mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土中より土器小片が出土する。

遺物 (fig.73) 出土遺物のうち土器4点について報告する。

1は裏口縁部破片である。「く」字形に屈曲する口縁部を持つ。外面の調整は右上がりのタタキを施す。2は口縁部破片である。外面の調整は縦方向のハケを施す。3は底部破片である。外面の調整は右上がりのタタキを施す。4は口縁端部破片である。端面には4条の凹線を施す。

SK656

遺構 (fig.74) I-44・45区より検出された土坑である。西側が調査区外にのびるため、全形は不明である。検出最大幅約5.9m、深さ0.3~0.7mを測る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈する。遺構内北側端〔範囲A〕より土器の比較的大きな破片が集中して出土する。この土器滴りの上面では筵のような植物繊維を編んだ製品が出土した。

遺物 (fig.75) 出土遺物のうち土器21点について報告する。

1は口縁部から胴部上半まで遺存する。やや膨らんだ胴部と「く」字形に屈曲する口縁部を持つ。外面の調整は、胴部上半は右上がりのタタキを施す。

2は口縁部から胴部上半まで遺存する。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部上半は右上がりのタタキを施す。

3は口縁部から胴部上半まで遺存する。「く」字形に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は下方に突出する。外面の調整は縦方向のハケ調整を施す。

4は口縁部から胴部中ほどまで遺存する。緩やかに立ち上がり、やや外反する口縁を持つ。外面の調整は口縁部はヨコナデを、胴部外面は右上がりのタタキを施す。内面の調整は横方向のナデを施す。

5は口縁部から胴部中ほどまで遺存する。膨らんだ胴部と「く」字形に屈曲する口縁部を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部上半は右上がりのタタキを施す。

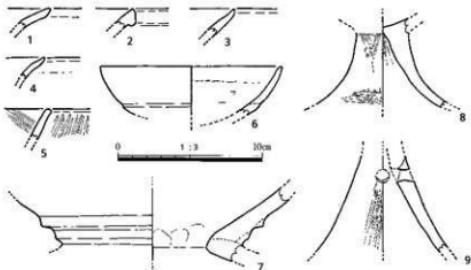


fig.72 SK653出土遺物

す。内面の調整はケズリを施す。

6は底部が遺存する。外面の調整は右上がりのタキを施す。分割成形により製作する。

7は底部破片である。下端は破面となっており、脚が附属していることが予想される。内外面の調整は縦方向のハケを施す。

高杯 8は杯部下半から脚部まで遺存する。皿状の杯部と、「ハ」字形に開く裾部を持つ。

10は底部から脚部が遺存する。「ハ」字形に開く裾部を持つ。脚

柱部には径約4mmの透孔を1箇所穿孔する。外面の調整は縦方向のミガキを、内面の調整は横方向のミガキを施す。

11は脚部のみ遺存する。径約5mmの透孔を1箇所穿孔する。外面の調整は縦方向のミガキを施す。

12は杯部下半と脚部上半が遺存する。楕円形の杯部と、「ハ」字形に開く脚部を持つ。径約9mmの透孔を1箇所施す。

13は脚裾部を欠損するほかはほぼ完形である。楕円形の杯部と、「ハ」字形に広がる脚部を持つ。外面の調整は、

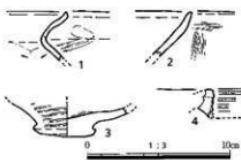
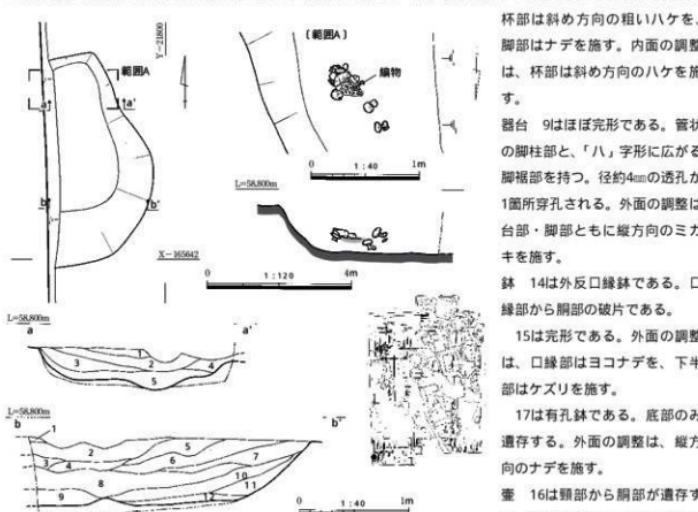


fig.73 SK656出土遺物



1. 噴嘴: 10YR3/4細粒砂 - シルト
2. 噴嘴: 10YR3/4細粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを10%含む
3. 噴灰質: 2.5Y/4/2細粒砂に炭化物を3%含む
4. 噴嘴: 10YR4/4細粒砂に黄灰2.5Y/1シルトを斑状に20%及び炭化物を厚さ2cmまでの層状に5%含む
5. 黒褐色: 2.5Y/3/1細粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを5%及び炭化物を3%含む
6. 噴灰質: 2.5Y/2細粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを10%含む
7. 灰5Y/1/1細粒砂 - シルトに直径0.5cmまでの小レキを5%含む
8. 灰7.5Y/1/1シルト - 細粒砂に噴嘴: 10YR3/4細粒砂を斑状に3%及び自然木破片を3%含む
9. 灰オリーブ5Y/6/2細粒砂 - 細粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
10. 黄灰2.5Y/6/2中粒砂 - 細粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%含む
11. 灰オリーブ5Y/6/2細粒砂に灰5Y/4/1細粒砂を斑状に20%含む
12. 灰5Y/4/1細粒砂 - 中粒砂

fig.74 SK656平面・土層断面・遺物出土状況図

杯部は斜め方向の粗いハケを、脚部はナデを施す。内面の調整は、杯部は斜め方向のハケを施す。

器台 9はほぼ完形である。管状の脚柱部と、「ハ」字形に広がる脚裾部を持つ。径約4mmの透孔が1箇所穿孔される。外面の調整は台部・脚部とともに縦方向のミガキを施す。

鉢 14は外反口縁鉢である。口縁部から脣部の破片である。

15は完形である。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、下部はケズリを施す。

17は有孔鉢である。底部のみ遺存する。外面の調整は、縦方向のナデを施す。

壺 16は頸部から胴部が遺存する。球形の胴部と明瞭に屈曲する頸部を持つ。

19は広口壺口縁部破片である。口縁端部は上下に肥厚し、端面には1~1.5cm間隔で竹管文を施す。頸部には、1条の沈線を施す。

21は口縁部から胴部上半が遺存する。外面の調整は縦方向の

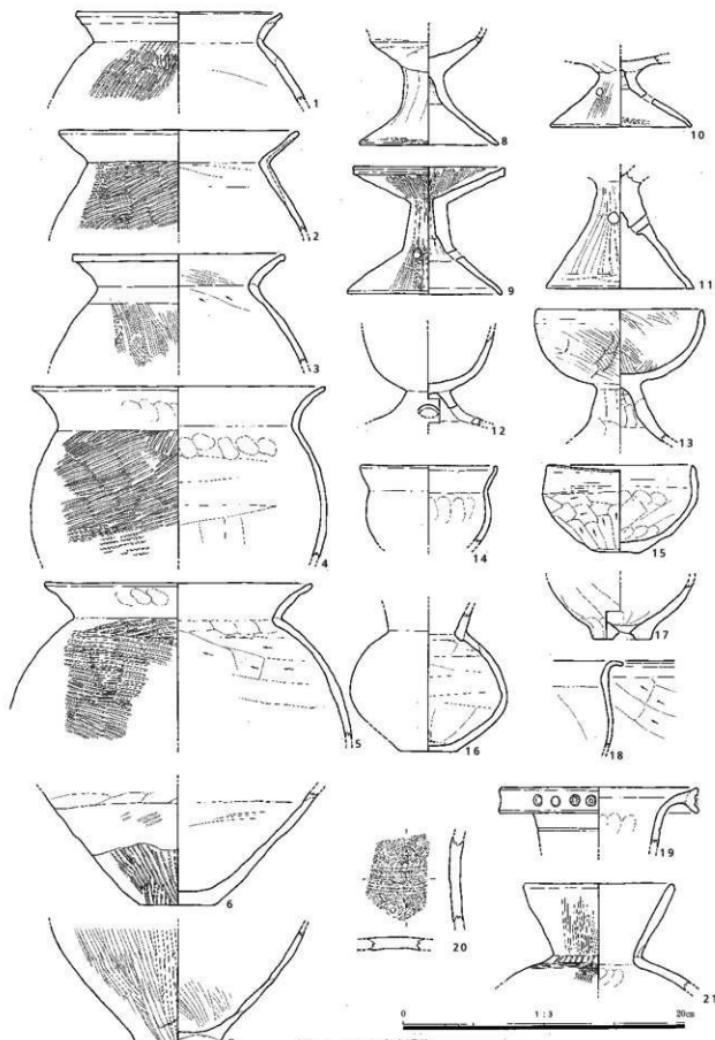
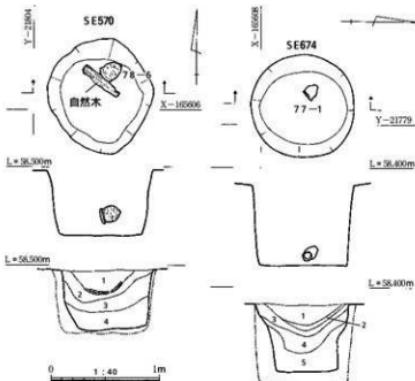


fig.75 SK565出土遺物



- SE570
- 黒褐(2.5Y3/2)細粒砂・中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを5%及び層下端に炭化物を厚さ3cmまで含む
 - 黒褐(2.5Y3/1)細粒砂・中粒砂に直径0.5cmまでの小レキを3%及び層下端に炭化物を厚さ3cmまで含む
 - 黒(2.5Y2/1)シルト・細粒砂に暗灰黄(2.5Y5/2)細粒砂を斑状に10%含む
 - 黒(5Y2/1)シルトに直径0.5cmまでの小レキを5%含む
- SE674
- オリーブ(5Y3/1)中粒砂・細粒砂に直径0.5cmまでの小レキを10%含む
 - オリーブ(2.5GY6/1)シルトに炭化物を含む
 - 灰(7.5Y4/1)シルトに灰オリーブ(5Y6/2)シルトを直径2cmまでのブロックで5%含む
 - 灰(7.5Y4/1)シルトに炭化物を3%含む
 - 灰(7.5Y4/1)シルト

fig.76 SE570・674平面・土層断面図

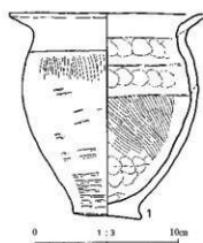


fig.77 SE674出土遺物

ミガキを施す。文様は胴部上端より櫛原体による刺突文、櫛描直線文1帯、櫛描波状文1帯の順で施す。櫛描1単位あたり5~6条で構成される。器種不明 18は口縁部破片である。外面の調整は縱方向のケズリを施す。20は絵画・土器破片である。櫛描波状文、櫛描直線文を施す。施文される絵画は、梢円を2つ重ねたものであるが、下方を欠失しており全体像は不明である。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられるが、一部大和第V様式の土器片が混ざる。

(4) 井戸

SE570

遺構 (fig.76) I-33・34区より検出された井戸である。平面形は円形を呈する。検出径約1.0m、深さ約0.5mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。埋土は黒色系シルト質土を主体とするが、第1層下端には土器破片の堆積が見られる。底面からは完形の甕と長さ40cmほどの丸木材が出土した。

遺物 (fig.78) 出土遺物のうち土器6点について報告する。

甕 1は短頸甕である。口縁部から胴部上半まで遺存する。球形の胴部と外反する口縁部を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部は縦方向のケズリを施す。

2は短頸甕である。緩やかに屈曲し短く立ち

上がる口縁部を持つ。外面の調整は口縁部はヨコナデ、胴部は右上がりのタタキののち縦方向のハケを施す。口縫端部に1条の沈線を施す。

3は口縁部から胴部中ほどまで遺存する。「く」字形に屈曲する口縁部を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部は右上がりのタタキを施す。

4は口縁部破片である。口縁端部は上下に肥厚し面を持つ。5は底部破片である。外面の調整は右上がりのタタキを施す。

6は完形である。出土状況図に示されるのはこの個体である。球形の胴部と内湾しながら立ち上がる口縁部を持つ。口縫端部は面を持つ。有孔鉢を底部にして積み上げる2段成形で、底面の孔も後でふさいでいる。外面の調整は口縁部はヨコナデを、胴部は右上がりのタタキを施す。内面の調整は胴部はハケを施す。注意して観察を行ったが、口縁部等には紐などの有機質を巻きつ

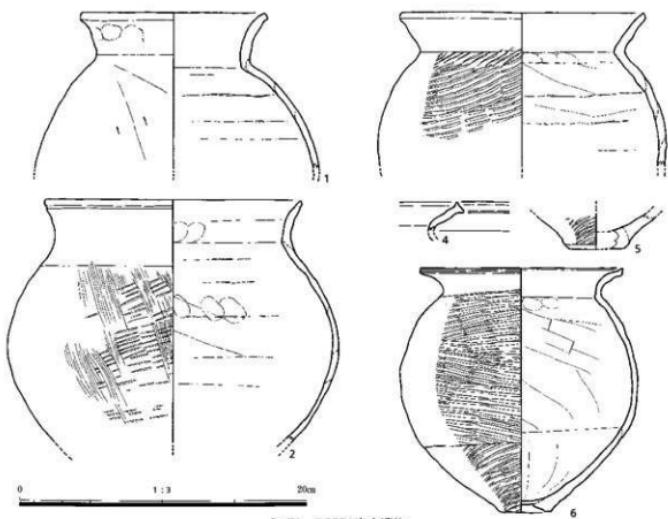


fig.78 SE570出土遺物

けた痕跡は見当たらなかった。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

SE674

遺構 (fig.76) Q-34区より検出された井戸である。平面形は円形を呈する。検出径約0.9m、深さ0.6mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。埋土は灰色シルト層を主体とする。埋土中からは土器小片が少量出土するほか、底面からは完形の甕が出土した。

遺物 (fig.77) 出土遺物のうち土器1点について報告する。

甕 1は完形である。出土状況図に示されるのはこの個体である。縦長の胴部と、外反する口縁を持つ。外面の調整は、口縁部はヨコナデを、胴部はタキのち崖方向のハケを施す。内面の調整は下半部に斜め方向のハケを施す。注意して観察を行ったが、口縁部等には紐などの有機質を巻きつけた痕跡は見当たらなかった。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

(5) 流路

調査区東端より検出した。

SR30・31

遺構 (fig.79) AH-AK-9-27区より検出された流路である。調査区東側より調査区内へと流れ込み、若干蛇行しながら北流する。途中17区付近で二股に別れ中洲状の岸を形成する。11区付近で、SR31と合流し、調査区北側へと続いている。検出幅0.7~1.3m、深さ0.4~0.9mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。埋土は灰色系の中~粗粒

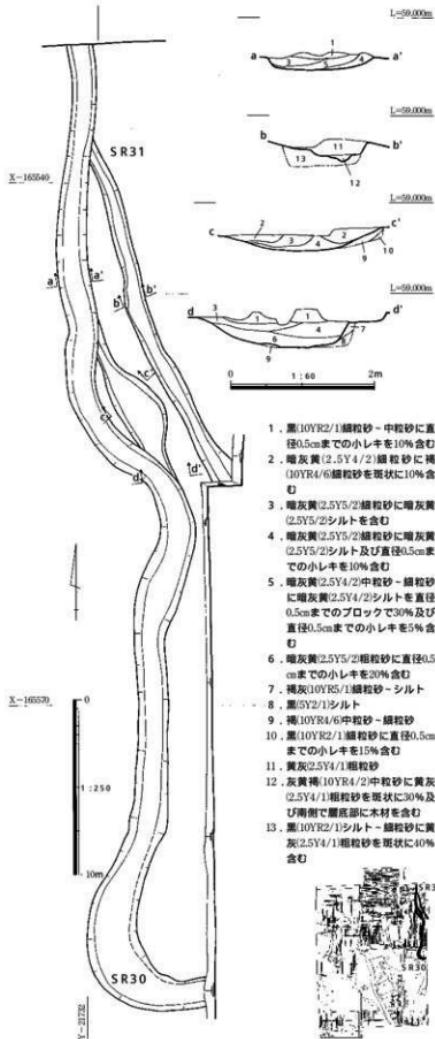


fig.79 SR30・31平面・土層断面図

砂を主体とする。埋土中より土器小片が出土するほか、埋土上層の検出面直下からは、ほぼ完形に復元可能な土器が出土する。蛇行の状態は下層の周溝墓に影響されているようだ。18-20区の湾曲はSD190東側溝のほぼ直上を、13-14区の湾曲はSD130の直上を流れている。

遺物 (fig.80) 出土遺物のうち土器8点、石製品1点について報告する。

出土土器 (fig.80)

標 1は口縁部から胴部の破片である。球形の胴部をもつ。口縁端部外面には沈線を施す。胴部外面の調整は左上がりの矢羽根タタキを平行に、内面の調整はケズリを施す。

2は口縁部から胴部下半まで遺存する。

球形の胴部を持つ。

3は完形に接合可能である。丸底で球形の胴部を持つ。底部近くに径約2cmの焼成後穿孔を施す。外面の調整は、口縁部はヨコナデ、胴部は横方向のハケを施す。内面の調整はケズリを施す。

高杯 4は脚部破片である。「八」字形に広がる根部を持つ。径約6mmの透孔を1箇所施す。8は杯部が遺存する。内面の調整はミガキを施す。

器台 5はほぼ完形である。「八」字形に広がる脚部を持つ。径約5mmの透孔を3方向に施す。外面の調整は縦方向のハケを施す。

鉢 6は口縁部破片である。調整は内外面ともに横方向のハケを施す。

器種不明 7は底部片である。内外面ともナデを施す。

出土土器の様相は、概ね庄内3式に該当すると考えられる。

出土石製品 (fig.81)

1は緑泥片岩製の石刀あるいは石剣の束の一部である。平行する5本の線刻が施される。側辺部分と線刻部分とは研ぎ別けがなされており、稜を形成している。

(6) 周溝墓

(2) で報告した溝は、単独あるいはいくつかが組み合わさることで周溝墓を構成すると考えられる。ここでは溝の配置から周溝墓と認定したものについて報告を行う。なお、復元される墳丘規模・主軸・時期については一覧表 (tab.2) を参照されたい。

周溝墓20 (fig.82) R-V-19~22区に位置する。SD240を東・西・北側、SD530を南側周溝とする。墳丘主軸は北を指向する。検出状況において溝が切れているのは、削平を受けたためと考えられる。築造時期は不明であるが、隣接し溝を共有していることから周溝墓21と近接する時期と予想される。

周溝墓21 (fig.82) R-V-22~25区に位置する。SD530に四周を囲まる。墳丘主軸は北北東を指向する。周溝埋土中より比較的良好な状態で出土した土器 (fig.63-1) が1点あり、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

周溝墓22 (fig.82) H-J-18~21区に位置する。SD20を北側、SD625を東側、SD585を南側周溝とする。墳丘主

軸は北北東を指向する。西側は調査区外へと広がっているため全形は不明である。築造時期は不明であるが、周溝墓24周溝に取り付くような位置に営まれていることから、周溝墓24より後行し近接する時期と予想される。

周溝墓23 (fig.82) K-M-20~21区に位置する。SD615によって四周を囲まる。平面形には明らかな角が無く円形を呈する。築造時期は不明であるが、周溝墓24周溝に取り付くような位置に営まれていることから、周溝墓24より後行し近接する時期と予想される。

周溝墓24 (fig.82) H-L-21~26区に位置する。SD585により四周を囲める。墳丘主軸は北北東を指向する。西側が調査区外となっており、全形は不明であるが、調査区西部に位置する周溝墓群の中で最大の平面規模を有する。南側周溝より多くの土器が出土しており、出土状況からそれらが供獻土器と考えられる。出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

周溝墓25 (fig.82) L-M-23~25区に位置する。SD600を東・北側、SD585を西側周溝とする。墳丘主軸は北北東を指向する。南側周溝が検出されていないのは、削平によるものと考えられる。築造時期は不明であるが、周溝墓24周溝に取り付くような位置に営まれていることから、周溝墓24より後行し近接する時期と予想される。

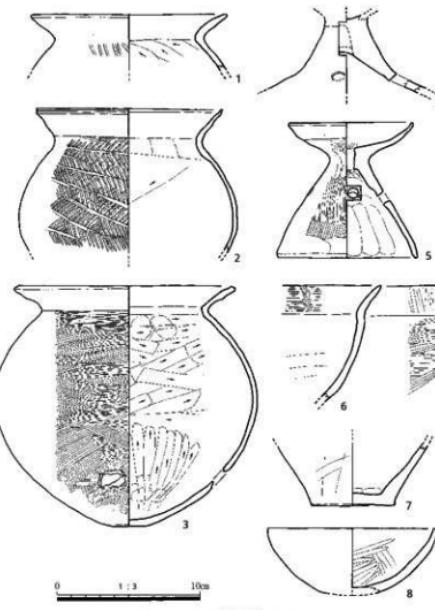


fig.80 SR30出土遺物 (1)

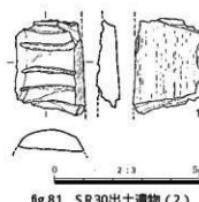


fig.81 SR30出土遺物 (2)

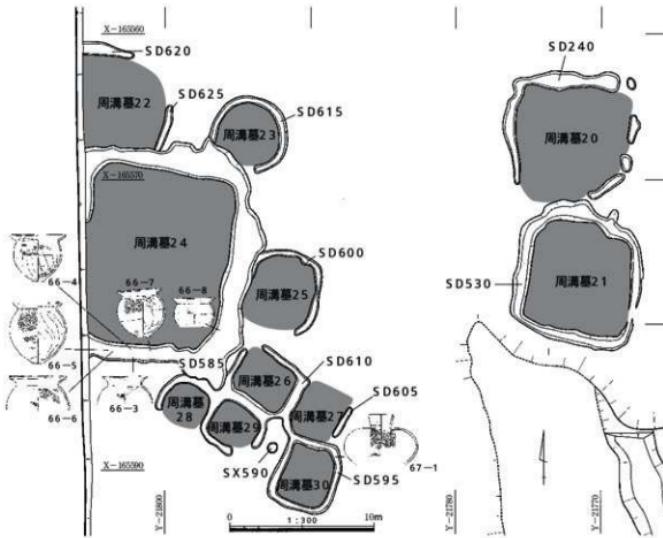


fig.82 SD550埋没後に當まれた周溝墓

周溝墓26 (fig.82) K ~ M-25 ~ 27区に位置する。SD610により四周を囲まる。墳丘主軸は北北東を指向する。東側周溝を周溝墓27と、南側周溝を周溝墓29と共有する。築造時期は不明であるが、周溝墓26 ~ 30は近接した位置にあり、周溝を共有するが多く、主軸も共通することから、すべて近接する時期に當まれたことが想定される。

周溝墓27 (fig.82) M ~ N-26 ~ 28区に位置する。SD610を西側、SD605を東側、SD595を南側周溝とする。墳丘主

tab.2 弥生時代終末期から古墳時代初頭周溝墓主要諸元

遺構名	主軸 (×1, 2) 長軸 × 短軸	平面規格(m) 幅 × 深さ	周溝規格(m) 幅 × 深さ	供獻土器(x3)	東	西	南	北	時期 (×4)	備考
周溝墓20 北	8.3 × 8.15	1.35 × 0.12			SD240	SD240	SD240	SD240	?	周溝墓21と周溝共有?
周溝墓21 北北東	8 × 7.45	1.19 × 0.4	覆?		SD530	SD530	SD530	SD530	庄内1	周溝墓20と周溝共有?
周溝墓22 北北東	*** × ***	0.9 × 0.22			SD625	***	SD585	SD620	?	
周溝墓23 北	4.6 × 4.4	0.6 × 0.16			SD615	SD615	SD615	SD615	?	円形周溝墓
周溝墓24 北北東	12.7 × 11.5	2.1 × 0.3	覆4以上、高杯?		SD585	SD585	SD585	SD585	庄内1	
周溝墓25 北北東	4.5 × ***	0.55 × 0.12			SD600	SD585?	***	SD600	?	
周溝墓26 北北東	4.2 × 3.45	0.45 × 0.22			SD610	SD610	SD610	SD610	?	
周溝墓27 北北東	3.25 × ***	0.5 × 0.1			SD605	SD610	SD595	***	?	周溝墓26・30と周溝共有
周溝墓28 北北東	3.2 × ***	0.5 × 0.12			SD610	SD610	***	SD610	?	周溝墓29と周溝共有
周溝墓29 北北東	3.4 × 2.95	0.55 × 0.22			SD610	SD610	SD610	SD610	?	周溝墓26・28と周溝共有
周溝墓30 北北東	4.15 × 3.55	0.65 × 0.22	壹?		SD595	SD595	SD595	SD595	庄内1	周溝墓27と周溝共有

* 1 主軸は長軸・短軸に限らず、座標記北からのれを表記した。

* 2 * - の表記は、各方位22.5°の範囲内において東に振れる場合を+、西に振れる場合を-とした。

* 3 出土状況が詳らかでないものに限しても、ほぼ完形に復元できる個体がある場合は括弧を付し表記した。

* 4 時期は、周溝墓前述の下限を示す。



軸は北北東を指向する。西側周溝を周溝墓26と、南側周溝を周溝墓30と共有する。

周溝墓28 (fig.82) J・K-26・27区に位置する。SD610を東・西・北側周溝とする。墳丘主軸は北北東を指向する。南側周溝が検出されていないのは、削平によるものと考えられる。周溝墓29と周溝墓30を共有する。

周溝墓29 (fig.82) K・L-27・28区に位置する。SD610により四周を囲まれる。墳丘主軸は北北東を指向する。北側周溝を周溝墓26と、東側周溝を周溝墓28と共に有する。

周溝墓30 (fig.82) L-N-28・29区に位置する。SD595により四周を囲まれる。墳丘主軸は北北東を指向する。北側周溝を周溝墓27と共に有する。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

出土土器の様相は、概ね庄内1式に該当すると考えられる。

第4項 平安時代の遺構と遺物

調査区北東部より検出された井戸1基、南西部より検出された井戸2基、掘立柱建物1棟について報告する。

(1) 井戸

SE28

遺構 (fig.83) AH・AI-17区より検出された井戸である。平面形は円形を呈する。検出径約0.9m、深さ0.8mを測る。曲物組型の井戸であり、検出状態では底部から2段の曲物を積み上げ、その上部に平面形が方形の井戸枠があったようである。但し後者については良好な状態で検出することができず、その構造

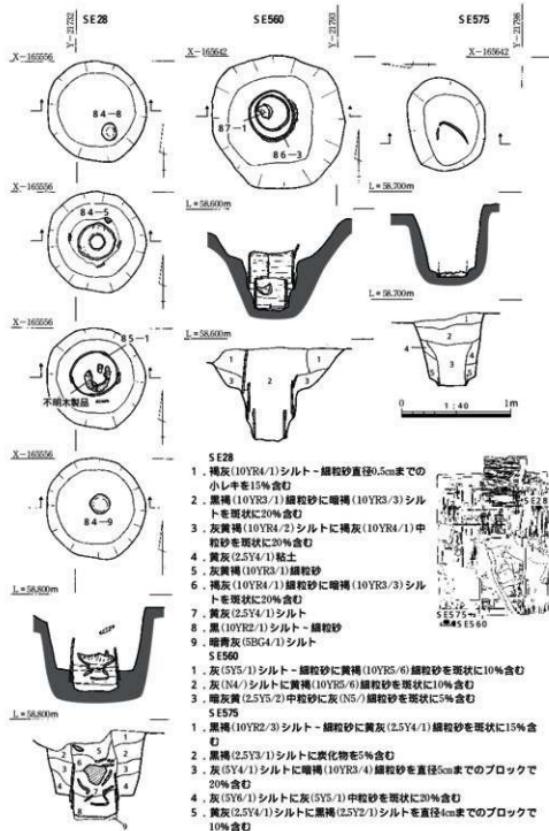


fig.83 SE28・560・575平面・土層断面図

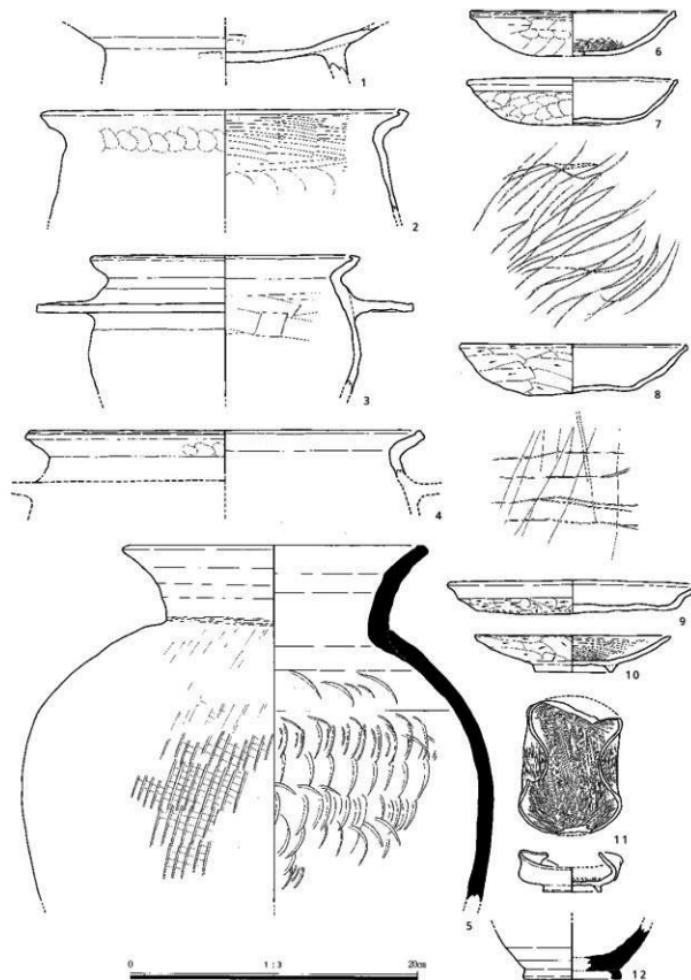


fig.84 SE28出土遺物(1)

は不明である。井戸枠内埋土より多量の遺物が出土している。

以下では遺物の出土状態について下層より解説を行う。最下層に土師器皿（fig.84-9）が置かれ、その直上に不明木製品（皿？）が置かれる。その上には胴部下半を打欠いた須恵器甕（fig.84-5）が口縁部を下にして置かれる。以上までは比較的整然とした状態で遺物が出土しているが、これより上層は雑然と投げ入れられたような状態で破片となった土器や径20cmほどの石が出土し、最上層からは、再び完形の土師器杯（fig.84-8）が置かれる。

遺物（fig.84、85） 出土遺物のうち枠内から出土した土器12点および木製品1点について報告する。

出土土器（fig.84）

土師器台付皿 1は台付皿である。底部のみ残存する。内外面ユビオサエのちナデ調整を施すが、全体的にナデが甘く粗い調整となっている。内外面二次焼成を受ける。土師器甕 2は「く」字状に強く外反する口縁と内面に折り返す口縁端部を有し、肩部は直線的に開く。体部内面に当て具によるオサ工、口縁部内面にハケ調整を施す。体部外面は口頭部付近にユビオサエを施すほか調整痕は明瞭でない。口縁部内面には炭化物の付着が見られる。

土師器釜 3は小型球胴形甕に長い鍔が付く形状を呈する。外面ナデ調整、体部内面は板状工具によ

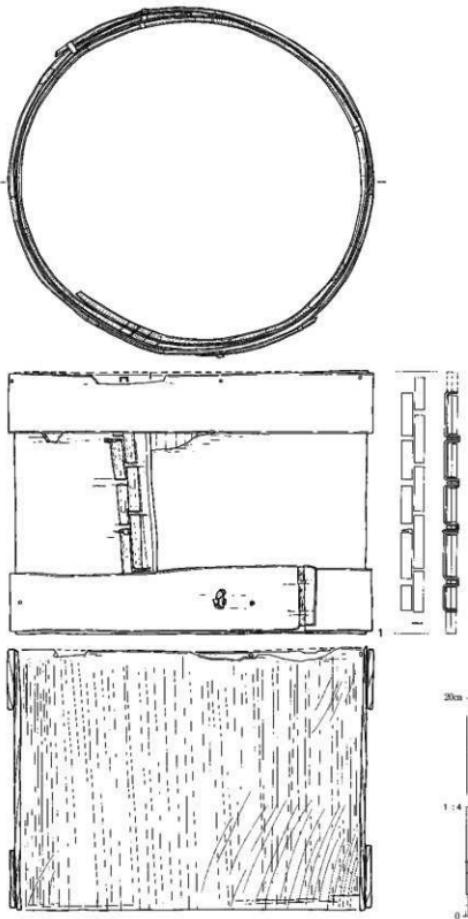


fig.85 SE28出土遺物（2）

るナデ調整を施す。鍔はほぼ水平に貼り付けられ、鍔以下には炭化物の付着が顕著に見られる。4は「く」字状に外反したのち端部を若干上方へつまみ出す口縁部を有する。内外面ナデ調整を施し、鍔は剥離痕のみ残る。

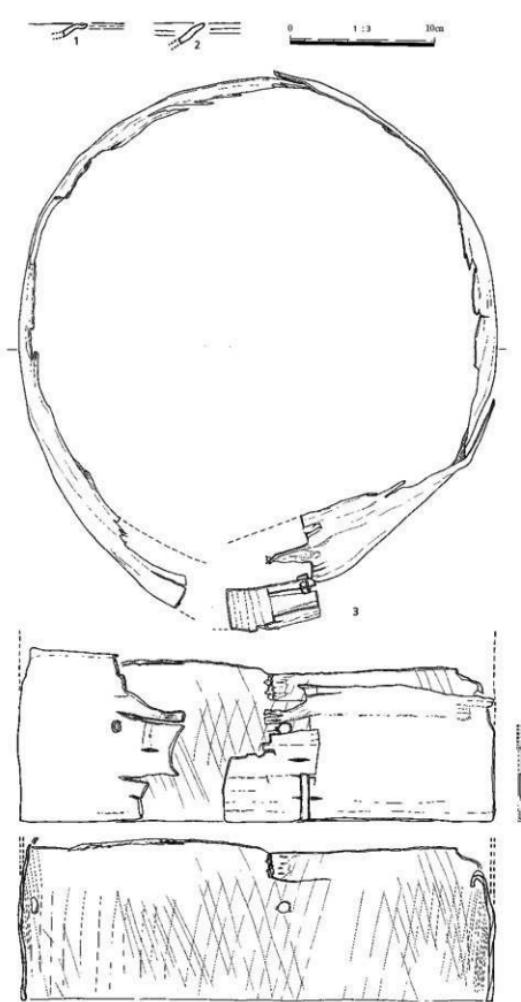


fig.86 SE560出土遺物 (1)

土師器杯 6は内面ハケ調整、外側ユビオサエのち口縁部をナデ調整する。口縁端部は若干外反したのち端部をわずかに上方へつまみ出す。胎土中に金雲母を多量に含む。7は内面ナデ調整、外側ユビオサエのち口縁部をナデ調整する。口縁端部は肥厚気味におさめる。8は内面ナデ調整、外側ユビオサエのち外面をヘラケズリする。ヘラケズリは口縁端部に及ぶ。口縁端部は若干外反したのち端部をわずかに上方へつまみ出す。内面に平行状の、外面に格子状の焼成後線刻がみられる。

土師器皿 9は屈曲した体部を有し、口縁端部を玉縁状に成形する。内面ナデ調整、外側ユビオサエのち体部外側屈曲部以下をヘラケズリし、外底面にはタタキ痕を、内面には板状工具痕をそれぞれ残す。

須恵器甕 5は水潤に使用されていた大型甕である。緩やかに外反する口縁部を有し、端部には上方より浅い沈線を施す。外側縁方向の平行タタキを施し、内面にて具痕が顕著に見られる。体部中位以下は内面當て具痕をナデ消す。

須恵器壺 12は壺Mの底部である。内外面回転ナデのち外面をヘラケズリする。

断面四角形の高台を有し、高台接合部は摩滅する。外底面は痕跡が不明瞭であるが、糸切と考えられる。

黒色土器皿 10はA類のものである。直線的な体部を有し、高台は若干厚い。外面ナデ調整のうち内面へラミガキ、外面へラケズリする。外面のラケズリは口縁端部に及ぶ。11はA類の耳皿である。外面ナデ調整のうち内面に密なヘラミガキを施す。胎土および焼成は9に類似する。

これらの遺物は杯A(6・7・8)において外面ユビオサ工のものとヘラケズリを施すものが混在すること、土器皿(9)が口縁部玉縁を持ち外面をヘラケズリすることなどから、南都II期中段階(9世紀末~10世紀初頭)の年代が考えられる。

木製品 (fig.85)

木製曲物 1は諸所に欠損が見られるものの概ね完形である。本体1段の上端および下端に箋を持つ。残存径約33.2cm、高さ約24.2cm。部材の厚さ約0.6cmを測る。針葉樹板目材の片側に切込みを施して板を曲げている。本体の連結部は、幅約9mmの樹皮を左右2列に配置し、それぞれ上下5段の孔に通すことによって固定している。2列に通される樹皮は下端でつながっており、2列1連として巻かれている。箋板は本体とは別種の樹皮により連結されており、幅約4mmの樹皮を2段の孔に通すことによって固定している。箋と本体の固定は上下段とも10本の木釘を打ち込むことによって行われている。ただし現状では抜け落ちているものが多い。箋には、板の連結とも、本体の固定とも機能的に関連がない位置に孔が穿たれ樹皮が巻かれているが、その用途は不明である。

SE560

遺構 (fig.83) L-46区で検出された井戸である。平面形は円形を呈する。検出径約1.2m、深さ約0.9mを測る。曲物組型の井戸であり、底部から2段の曲物を積み上げ、その上部に方形の井戸枠があったようである。但し後者については良好な状態で検出することができず、その詳細は不明である。井戸枠内埋土より、土器小片と瓢箪が出土している。

遺物 (fig.86, 87) 出土遺物のうち枠内から出土した土器2点および木製品2点について報告する。

出土土器 (fig.86)

土器皿 1は口縁部の細片である。強く屈曲したのち端部をわずかにつまみあげる口縁部を有する。内外面ナデ調整を施す。

土器皿 2は口縁部の破片である。わずかに屈曲する形態を有し、内外面ナデ調整を施す。

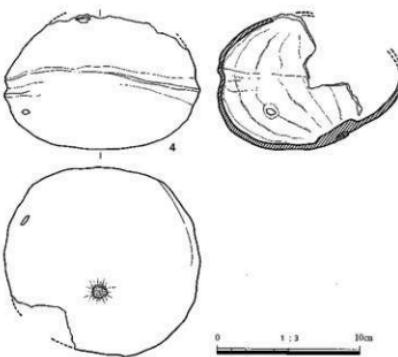


fig.87 SE560出土遺物 (2)

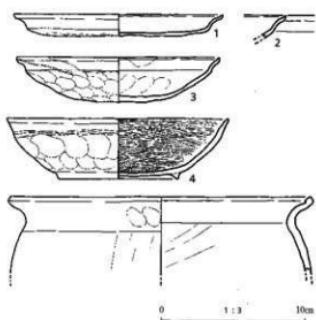
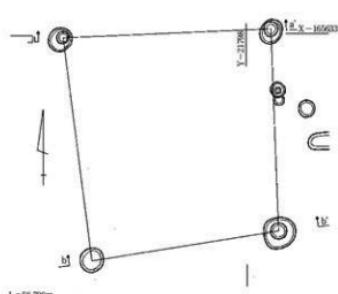


fig.88 SE575出土遺物

出土土器が細片のみのため時期決定が難しいが、おおむね南都II期新段階～III期古段階（10世紀前半から半ば）の年代が考えられる。

出土木製品 (fig.86, 87)

曲物 (fig.86) 3は上半および連結部を欠損する。残存径約43.8cm、高さ約16.0cm、部材の厚さ0.4cmを測る。針葉樹板目材の片面に切込を施して板を曲げている。連結部は、幅約8mmの樹皮を現状で3段の孔に通すことによって固定している。最下段は樹皮を二重に巻きつけて端部を固定している。樹皮の端部は遺存しないものの、おそらく下側から樹皮を巻き始めたものと考えられる。4方向に、箋に固定するためと考えられる径約1cmの孔が穿たれている。



1. 黄褐色(10YR5/6)シルト・細粒砂に
褐色(10YR6/1)を斑状に5%及び砂
粒を含み粘性・しまり共にあり
2. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト・細粒砂
に直接0.3cmまでの小レキを5%含
み、粘性・しまり若干あり
3. 喙褐色(10YR3/1)細粒砂に直接0.5cm
までの小レキを10%含む
4. 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂・中粒砂に直
接0.5cmまでの小レキを5%含む
5. 灰黄褐色(10YR5/3)シルト・細粒砂
(10YR2/4)細粒砂を斑状に20%及
び直接0.5cmまでの小レキを5%含む
6. 灰黄褐色(10YR4/2)シルト・細粒砂
に直接0.3cmまでの小レキを5%含む
7. 暗灰(2N2/1)シルトに灰(7.5Y5/1)シルトを直接10cmまでのブロッ
クで30%及び直接0.5cmまでの小レキを5%含む
8. 褐(10YR4/4)細粒砂に暗灰(2.5Y5/2)細粒砂を斑状に30%及
び直接0.5cmまでの小レキを5%含む
9. 灰(7.5Y5/1)シルトに褐(10YR4/4)細粒砂を斑状に10%含む

fig.89 SB635平面・土層断面図



fig.90 SB635出土遺物

瓢箪 (fig.87) 4は底部より若干浮いた位置より出土した。約半分を欠損しており全体像は不明であるが、瓢箪ではなく夕顔の変種である「ふくべ」の可能性が高い。萼部、輪部とともに残存し、柄を通した穴も見られないことから柄杓としての使用は考えにくい。体部中央付近に長軸5.5mm、短軸3.5mmの円孔を穿つ。釣瓶等に使用したと思われる紐等の痕跡も確認できなかった。

SE575

遺構 (fig.83) J-45区より検出された井戸である。平面形は円形を呈する。検出径約0.9m、深さ約0.7mを測る。曲物型の井戸と考えられる。但しほとんどが抜き取られて、最下層に遺存するのみであり、その詳細は不明である。井戸内埋土より完形あるいは、ほぼ完形に接合可能な土器が出土する。

遺物 (fig.88) 出土遺物のうち枠内から出土した土器5点について報告する。

土師器皿 1は内外面ユビオサエのちナデ調整を施す。口縁部は強く外反したのち端部を小さく玉縁に成形する。器厚は2.5mmを測る。2は口縁部のみ残存する。内外面ナデ調整を施す。口縁部はやや強く外曲したのち端部を小さく玉縁に成形する。

土師器皿 3は内面ナデ調整、外面掌状の圧痕ののち口縁部をナデ調整する。口縁部はやや強く外反したのち端部を小さく玉縁に成形し、口縁部外面には粘土紐巻上げの痕跡と考えられる粘土接合痕が残る。

土師器皿 5は外面オサエのち口縁部をナデ調整、内面オサエの後ナデ調整を施す。「く」字状に外反する口縁部を有し、肩部には口縁部の強いナデによりわざかに段を有する。残存部分には鉗の痕跡などは一切確認できない。

黒色土器桿 4はA類桿である。外面ユビオサエのち口縁部をナデ調整し、内面見込み部を一定方向の密なヘラミガキ、体部を密な横方向のヘラミガキで調整する。外面ナデ直下にはわずかにヘラミガキが見られる。高台は断面三角形を呈し小ぶりである。胎土内には金雲母をやや多く含む。

土師器皿や杯・黒色土器桿の形態から南都II期新段階（10世紀前半）の年代が考えられる。

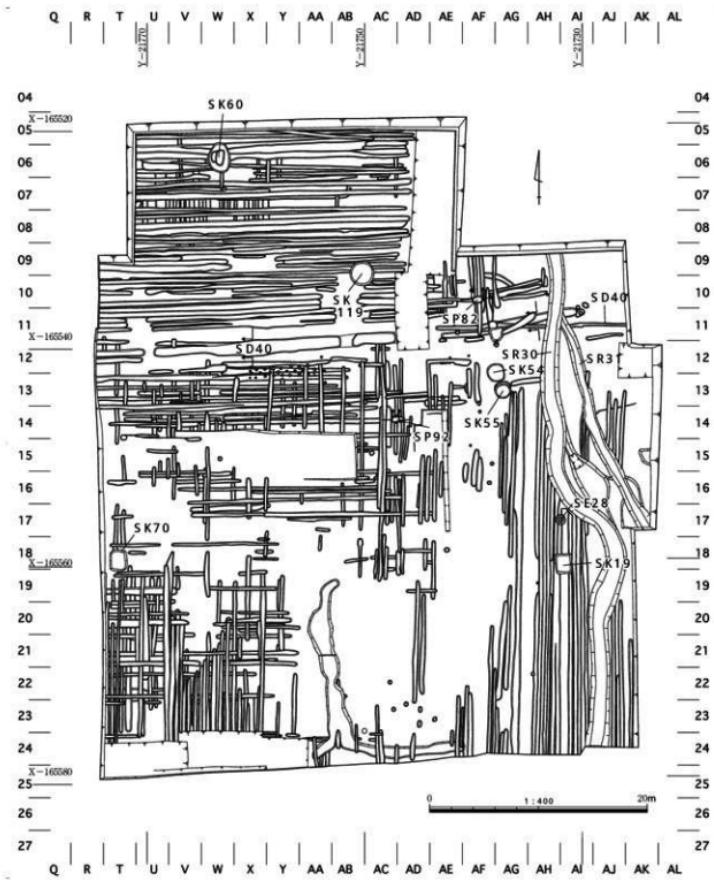


fig.91 遺構全体図 上層

第2章 発掘調査の成果



fig.92 SD40土層断面図

(2) 掘立柱建物

調査区南西より検出された1棟について報告を行う。

SB635

造構 (fig.89) I-K-42~44区より検出された掘立柱建物である。梁・桁行とともに1間の小規模な建物であるが、調査区西壁沿いに位置するため、調査区西側外へと続く可能性もある。南北3.7~4.1m、東西3.5~3.8mを測る。柱穴の平面形は円形で、検出径0.2~0.3m、深さは西側が浅く約0.1m、東側が深く0.2mである。建物主軸は若干北東を向く。柱抜取り跡により完全形に近い黒色土器椀が、掘方より土器小片が出土する。

遺物 (fig.90) 出土遺物のうち土器2点について報告する。

土器皿 2は柱掘方より出土した口縁部の細片である。口縁部を玉縁に成形し、内外面ナデ調整を施す。

黒色土器椀 1は柱抜取り跡に埋納されたものである。広く平坦な底部と弯曲する体部、断面三角形の低い高台を有する。外面ヘラケズリのうち内面見込み部に一定方向のヘラミガキ、体部内面に横方向のヘラミガキを施す。

これらの遺物はいずれも南都II期中段階（9世紀末~10世紀初頭）のものである。

第5項 中世の遺構と遺物

調査区北東より検出された溝1基、ピット2基、全体より検出された素掘小溝、南東より検出されたピット1基、調査区内各所より検出された土坑12基について報告する。

(1) 溝

SD40

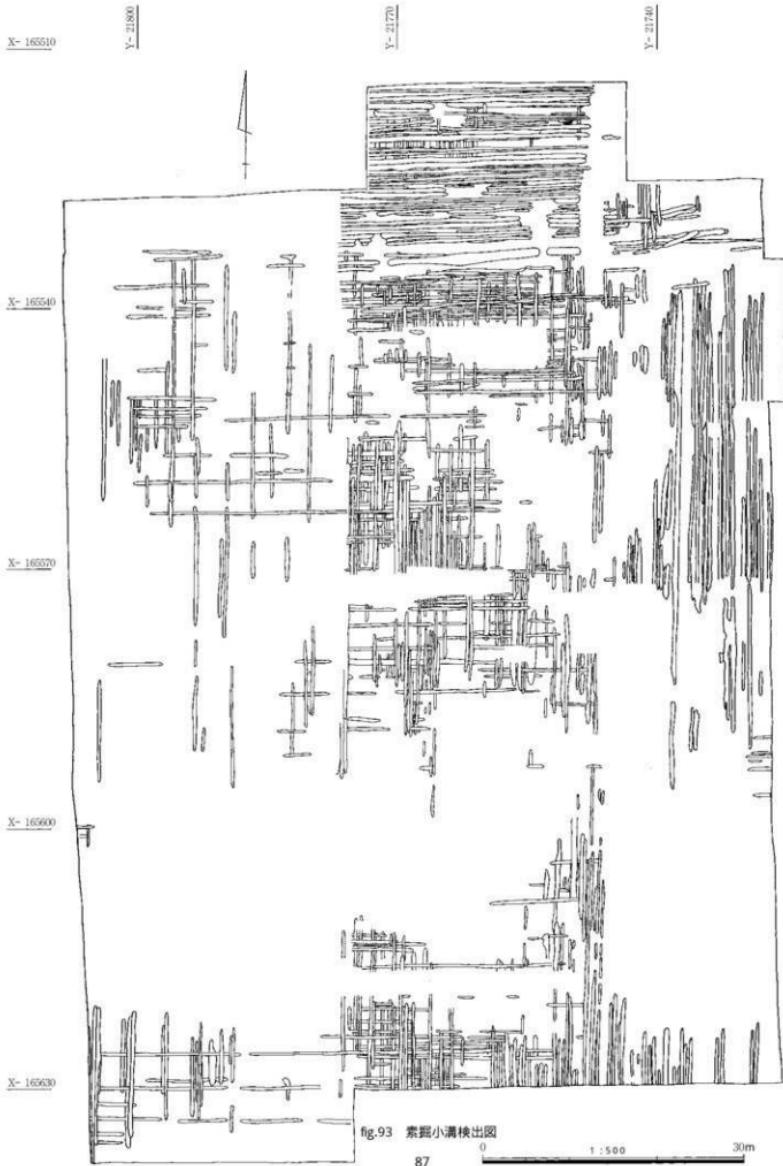
造構 (fig.91, 92) R~AK-11~12区より検出された溝である。東西方向の溝で、主軸は若干北へ振る。U~AC区間は明瞭で幅の広い溝であるが、これ以外の区間では幅の狭い溝となり、素掘小溝との区別も明瞭ではない。検出幅0.3~1.2m、深さ約0.2mを測る。底部断面形態は緩やかな「U」字形を呈する。底面は概ね平坦である。遺物はほとんど含まなかった。後述するように、坪境の溝と考えられる。

(2) 素掘小溝

造構 (fig.93) 調査区全体から検出された。調査区北西部で密に検出され、その他の部分では粗である。これは北東部以外は下層造構のみを対象として行ったためでもあるが、最終検出面の等高線 (fig.8) を見る限り、疎な部分を低く掘削しそぎているわけではない。AG区より東側では南北方向の溝のみが検出され、SD40より北側では東西方向の溝が主体となり、AG区より西側でSD40よりも南側では南北・東西の溝が錯綜する様子が確認できる。検出幅約0.2m、深さ0.1~0.3mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈し、明瞭な掘込が確認できる (PL33-2) 溝埋土より、土器小片が多数出土している。

遺物 (fig.94) 素掘小溝出土遺物のうち土器19点について報告する。

縄文土器深鉢 7は体部の細片である。外面横方向の条痕を有し、内面ナデ調整を施す。条痕の原体は不明である。胎土は暗褐色を呈し角閃石を多く含む。



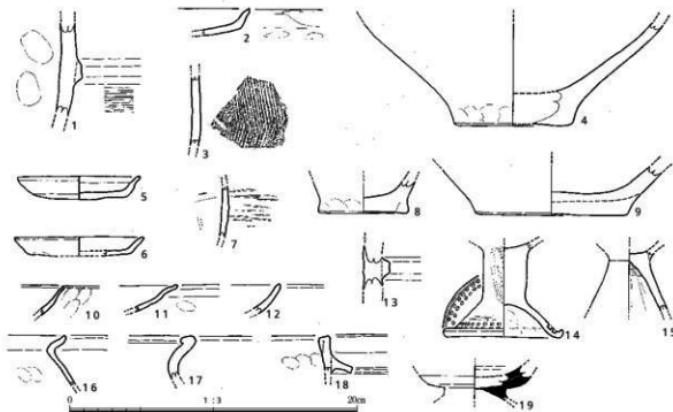


fig.94 素描小溝出土遺物

弥生土器甕 4は底部から体部下半が残存する。円盤状の底部を有する。外面ナデ調整のちへラミガキを施すとを考えられるが、内面調整とともに表面劣化のため不明瞭である。胎土内に金雲母をやや多く含む。9は底部のみ残存する。内外面ナデ調整を施し、外面は板状工具によるナデの可能性がある。胎土内に間隙が多く見られる。

弥生土器甕 8は底部のみ残存する。底部は円盤状で、外底面に粗圧痕を複数有する。

弥生土器高杯 14は柱状の脚部とややふくらみを持って開く脚根部を有する。端部は若干上方へ折り曲げ、端部に2列の刺突を施す。刺突は竹管状の原体を使用し、1つを除き原則貫通しない。外面縦方向のヘラミガキを施す。

古式土器器甕 16は「く」字状に強く外反する口縁部を有し、口縁端部の形状は摩滅のため不明瞭である。器厚は3mm前後と薄く、表面劣化のため内外面調整等不明である。

古式土器高杯 15は脚部の破片である。直線的に開く形状を呈し、内面にはヘラ状工具によるナデの痕跡が残る。表面劣化のため調整等は不明である。

須恵器脚付甕 19は壺底部と脚上部のみ残存する。外面回転ヘラケズリのちナデ調整を施す。

円筒埴輪 1はタガの一部が残存する。陶質に近い硬質の焼き上がりである。外面をヨコハケ調整、内面を粗いユビオサエで調整する。V期のものと考えられる。13は接の明瞭な力を持ち、胎土は精良である。摩滅のため内外面調整等不明である。V期のものと考えられる。

土器器皿 2は直線的に立ち上がる口縁部を有する。底面外ユビオサエ、底面内面一定方向のナデのち口縁部をナデ調整する。13世紀半ばから後半のものである。5は直線的に立ち上がる口縁部を有する。底面外ユビオサエ、底面内面



- SP82
1. 灰(5Y5/1)粗粒砂～中粒砂
2. 灰(5Y5/1)粗粒砂～中粒砂に暗灰黄(2.5Y5/2)シルト～細粒砂を斑状に20%含む
SP92
1. 暗灰黄(2.5Y5/2)粗粒砂に褐(10YR4/6)細粒砂を斑状に10%及び直径0.5mmまでの小レキを5%含む
2. 黒褐(10YR3/1)中粒砂～細粒砂に暗灰黄(2.5Y5/2)粗粒砂を斑状に40%及び直径0.5mmまでの小レキを3%含む

fig.95 SP82・92土層断面図

一定方向のナデのうち口縁部をナデ調整するが、2に比して底部外面のユビオサエが顯著である。13世紀半ば～後半のものである。6は直線的に立ち上がる口縁部を有する。底面外面ユビオサエ、底面内面一定方向のナデのうち口縁部をナデ調整する。口縁部の一部には煤が付着する。13世紀半ば～後半のものである。11は屈曲したのち端部をわずかにつまみあげる口縁部を有する。表面劣化のため内外面調整等は不明である。南都II段中～新段階（9世紀末～10世紀初頭）のものである。12は湾曲する口縁部を有し、内外面ナデ調整を施す。古代のものである可能性もあるが、細片のため不明である。

土師器蓋 17は口縁部のみの破片である。「く」字状に外反する口縁部を有し、端部を内側に折り返す。18は口縁部から鈎が残存する。内傾気味の口縁部を有し、口縁端部には面を持つ。鈎は斜め下がありに貼り付けられ、端部に1条の沈線を施す。14世紀代のものと考えられる。

瓦器桿 10は口縁部の破片である。口縁部はナデによりわずかに外反し、端部に退化した沈線を施す。川越編年III段階E型式～IV段階A型式（13世紀末～14世紀初頭）のものである。

瓦質土器桿 3は体部の破片である。外面細いタタキを、内面細いハケ調整を施す。

（3）ピット

調査区北東部より検出された2基、南東部より検出された1基について報告する。

SP82・92

遺構（fig.91、95） SP82はAF-10区、SP92はAG-11区より検出されたピットである。南北方向と東西方向の溝の結節点に位置しており、素掘小溝に切られている。どちらも平面形は円形を呈する。SP82は検出径約0.9m、深さ約0.2m、SP92は検出径約0.9m、深さ約0.4mを測る。底部断面形態は「U」字形を呈する。埋土は上層の素掘小溝のものと良く似る。埋土内よりの遺物出土は見られなかった。

SP523

遺構（fig.8） AD-32区より検出されたピットである。東半分は試掘トレンチによって切られる。埋土内より、半分以上復元可能な土師器片が出土する。

遺物（fig.96） 出土遺物の土師器小型鉢について報告する。1は砲弾形の体部と非常に精良な胎土を有する。内外面表面劣化のため調整等は不明である。

（4）土坑

調査区各所より検出された土坑12基について報告する。これらの土坑は平面形規模の上から大・中・小に分割できるため、小型・中型・大型の順で解説する。

小型土坑 短軸で1.5m以下の土坑を小型とする。平面形は、隅丸方形あるいは円形を呈する。素掘小溝を切る。

SK19

遺構（fig.97） AH・AJ-18・19区より検出された土坑である。平面形は南北方向に若干長い方形を呈する。南北方向に走る素掘小溝を切る。検出長軸約1.8m、短軸約1.5m、深さ約0.8mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がるか若干オーバーハングする。底面は平坦である。埋土はブロック土を20%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見られなかった。

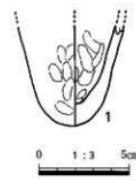
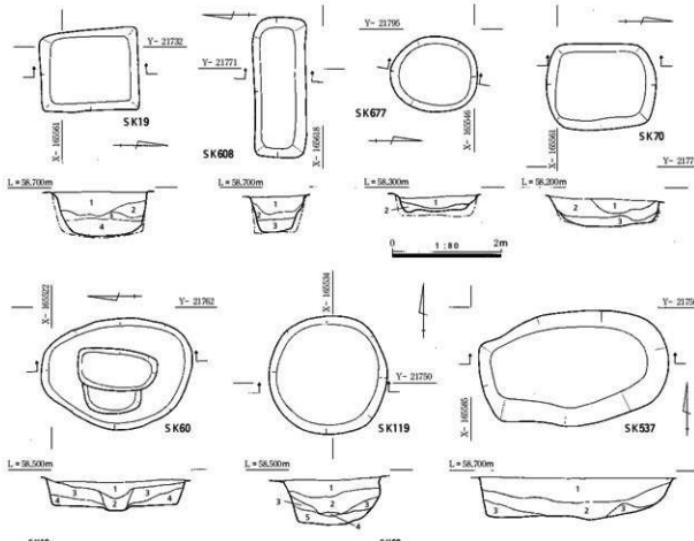


fig.96 SP523出土遺物



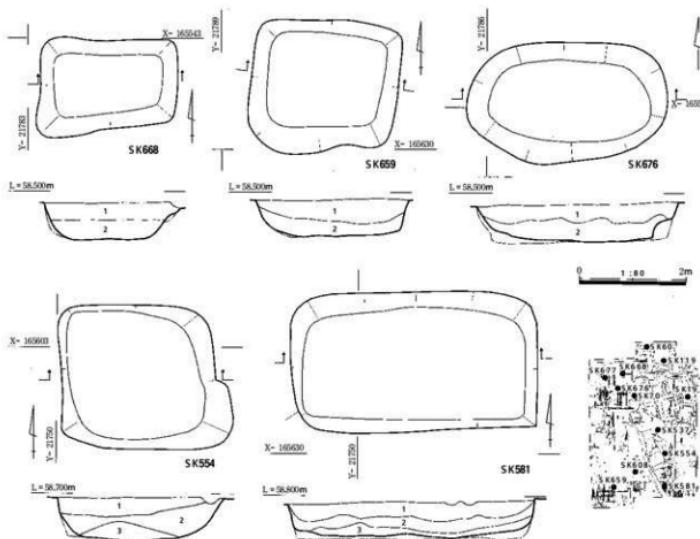
SK19

1. 黒(2.0T/3.1)/粗粒砂 - シルトに黒(10T/1.4)シルトを斑状に10%及び直徑0.2mmまでの小レキを3%及び黒(10T/2.1)シルトを直徑5cm程度のブロックで10%含む
2. 黒(2.0T/3.1)/粗粒砂 - シルトに黒(10T/2.1)シルトを直徑5cmまでのブロックで10%含む
3. 黑(2.5T/3.1)/粗粒砂 - シルトに黒(5V/1.1)シルトを直徑10cmまでのブロックで10%含む
4. 黒(5V/1.1)シルトに黒(10T/2.1)シルトを斑状に15%黒(2.5T/3.1)/粗粒砂 - シルトを直徑5cmまでのブロック状に1%含む
5. 黑(10T/5.1)/シルト - 粗粒砂に黒(10T/4.6)粗粒砂を斑状に10%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%及び黒(10T/2.1)シルトを直徑10cmまでのブロックで5%含む
6. 黒オリーブ(5V/2.1)シルトに黒(10T/4.6)粗粒砂及び黒(3BG/1.1)中粒砂を直徑5cmまでのブロックで5%含む
7. 緑(10G/3.1)シルトに黒(5V/2.1)中粒砂を直徑5cmまでのブロックで3%含む
8. 緑(5V/1.1)シルトに黒(10T/4.6)粗粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを5%及び黒(2.5V/1.1)粗粒砂を斑状に6%含む
9. 緑(5V/1.1)シルトに黒(10T/4.6)粗粒砂を斑状に30%及び直徑0.5cmまでの小レキを3%含む
10. 緑(5V/1.1)シルトに黒(10T/4.6)粗粒砂を斑状に5%含む

fig.97 SK19・60・70・119・537・608・677平面・土層断面図

SK 608

遺構 (fig.97) T・U-37区より検出された土坑である。平面形は東西方向に長い長方形を呈する。南北方向に走る索掘小溝を切る。検出長軸約2.6m、短軸約0.9m、深さ約0.6mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がるか若干オーバーハングする。底面は平坦である。埋土はブロック土を5%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見ら



SK659
1. 墓衣質(2.5Y5/2)粗粒砂 - 中粒砂に灰(10Y4/1)シルトを直径5cmまでのブロックで30%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
2. 墓衣質(2.5Y5/2)粗粒砂 - 中粒砂に暗青灰(5B6/4)シルトを直径1cmまでのブロックで40%含む

SK668
1. 灰(7.5Y4/1)粗粒砂 - 中粒砂にオリーブ灰(2.5GY6/1)シルトを直径10cmまでのブロックで30%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
2. 墓衣質(N3/7)シルトに青灰(10BG5/1)粗粒砂 - シルトを直径5cmまでのブロックで10%及び直径0.5cmまでの小レキを3%及び緑灰(7.5GY6/1)粗粒砂を斑状に30%含む

SK554
1. 黄灰(10Y5/6)粗粒砂 - 中粒砂に灰(7.5YS5/1)シルトを直径10cmまでのブロックで40%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む
2. 青灰(10BG5/1)シルトに黄灰(10Y5/6)シルト - 粗粒砂を斑状に5%及び直径0.5cmまでの小レキを3%含む

SK581
1. 墓衣質(10YR3/4)細粒砂に灰(10Y5/5)粗粒砂 - シルトを斑状に40%及び直径0.5cmまでの小レキを10%含む
2. 黄灰(2.5Y4/1)粗粒砂に青灰(10Y5/1)粗粒砂 - シルトを直径5cmまでのブロックで20%及び緑灰(2.5GY6/1)粗粒砂を直径5cmまでのブロックで10%含む
3. 緑灰(2.5Y6/1)粗粒砂に緑灰(7.5GY6/1)シルトを直径5cmまでのブロックで20%及び直径0.5cmまでの小レキを5%含む

SK568
1. 灰(5Y5/1)粗粒砂 - 中粒砂に褐(10YR4/6)中粒砂 - 細粒砂を斑状に10%及び黒(2.5Y2/1)シルトを直径10cmまでのブロックで30%含む
2. 灰(10Y5/1)粗粒砂 - 中粒砂に褐(10YR4/6)中粒砂 - 細粒砂を斑状に5%及び黒(2.5Y2/1)シルトを直径15cmまでのブロックで20%含む
3. 緑灰(2.5GY5/1)細粒砂 - シルトに黒(2.5Y2/1)シルトを直径15cmまでのブロックで20%含む

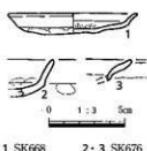
fig.98 SK554・581・659・668・676平面・土層断面図

れない。

SK677

遺構 (fig.97) L-14区で検出された土坑である。平面形は円形を呈する。東西方向に走る素掘小溝を切る。検出径約1.5m、深さ約0.3mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は若干凹凸が認められる。埋土はブロックを30%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見られない。

中型土坑 短軸で1.5m以上2.5m以下の土坑を中型の土坑とする。平面形は隅丸方形あるいは円形を呈する。多くの土坑は素掘小溝に切られる。



SK70

遺構 (fig.97) T-18区で検出された土坑である。平面形は南北に長い長方形を呈する。南北方向に走る素掘小溝に切られる。検出長軸約2.0m、短軸約1.6m、深さ約0.5mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がるか若干オーバーハングする。底面は平坦である。埋土にブロック土は含まれない。遺物の出土は見られない。

SK60

遺構 (fig.97) W-6区より検出された土坑である。平面形は東西に長い楕円形を呈する。東西方向に走る素掘小溝を切る場合と切られる場合がある。検出長軸約2.8m、短軸約2.0m、深さ約0.5mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がるか若干オーバーハングする。底面は中央部が凹む。埋土はブロック土を10~30%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見られない。

SK119

遺構 (fig.97) AB・AC-9・10区より検出された土坑である。平面形はほぼ円形を呈する。東西方向に走る素掘小溝に切られる。検出径約2.2m、深さ約0.8mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がるか若干オーバーハングする。底面は平坦である。埋土はブロック土を30%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見られない。

SK537

遺構 (fig.97) AA・AB-27区より検出された土坑である。平面形は東西に長い楕円形を呈する。素掘小溝を切る。検出長軸約3.5m、短軸約2.1m、深さ約0.7mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がるか若干オーバーハングする。底面は平坦である。埋土はブロック土を20%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見られない。

SK668

遺構 (fig.98) P-13区より検出された土坑である。平面形は東西に長い長方形を呈する。南北方向の素掘小溝に切られる。検出長軸約2.6m、長軸約1.6m、深さ約0.7mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は平坦である。埋土はブロック土を30%程度含み、埋められた様子が窺える。埋土内より土器小片が出土する。

遺物 (fig.99) 出土遺物の瓦器皿について報告する。

皿 1は瓦器皿である。強く外反する口縁部を有し、底部外面には掌圧痕が顕著に残る。13世紀半ば頃のものである。

SK659

遺構 (fig.98) N-41区より検出された土坑である。平面形は東西に長い長方形を呈する。南北方向の素掘小溝に切られる。検出長軸約2.8m、短軸約2.4m、深さ約0.7mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がるか若干オーバーハングする。底面は平坦である。埋土はブロック土を20%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見られない。

SK676

遺構 (fig.98) N-P-16・17区より検出された土坑である。平面形は東西に長い楕円形を呈する。南北方向の素掘小溝を切る。検出長軸約3.8m、短軸約2.3m、深さ約0.7mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は平坦である。埋土はブロック土を40%程度含み、埋められた様子が窺える。埋土内より土器小片が出土する。

遺物 (fig.99) 出土遺物の土師器について報告する。

皿 2は底部外面をユビオサエしたち口縁部をナデ調整する。口縁部のナデにより底部付近に小さな稜を形成する。13世紀前半から半ばのものである。3は口縁部に強いナデを施し、ナデにより底部付近に稜を有する。13世紀前半から半ばのものである。

大型土坑 短軸で2.5m以上の土坑を大型の土坑とする。平面形は隅丸方形を呈する。南北方向の素掘小溝を切る場合と切られる場合がある。

SK554

遺構 (fig.98) AC-32・33区より検出された土坑である。平面形は方形を呈する。南北方向の素掘小溝に切られる。検出長軸約2.9m、短軸約2.5m、深さ約0.8mを測る。底部断面形態は逆台形を呈する。底面は平坦である。埋土はブロック土を30%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見られない。

SK581

遺構 (fig.98) AB-AD-41区より検出された土坑である。平面形は東西に長い方形を呈する。南北方向の素掘小溝を切る場合と切られる場合がある。検出長軸約4.6m、短軸約2.6m、深さ約0.6mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がるか若干オーバーハングする。底面は平坦である。埋土はブロック土を20%程度含み、埋められた様子が窺える。遺物の出土は見られない。

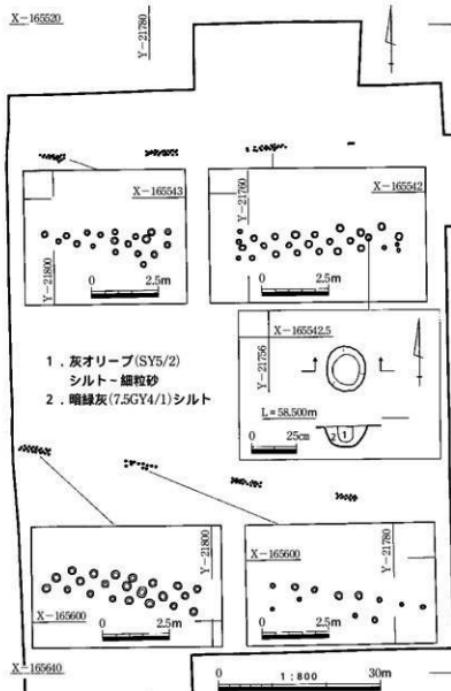
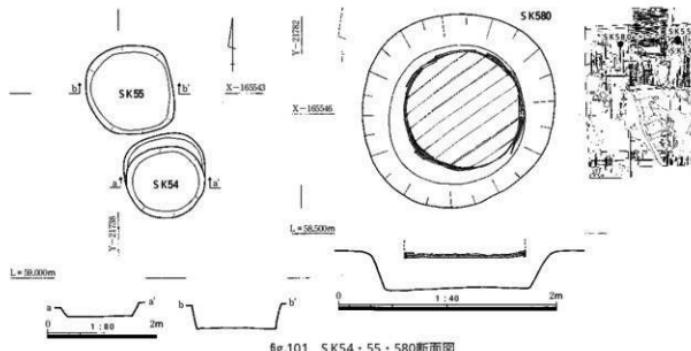


Fig.100 SA96平面・土層断面図

取痕と掘方からなり、検出面での柱径約8cm、掘方径約24cm、深さ10~30cmを測る。埋土が共通であることから、上層の水田耕土層から掘込まれていると推測されるため、本来の深さは1mを超えるものであつただろう。



SA96は調査区敷地内に敷設されていた現代のコンクリート製溝の真下に位置しており、水利に関係する遺構である可能性が高い。

(2) 土坑

調査区東部より検出された2基、北西部に検出された1基について報告を行う。

SK54

遺構 (fig.101) AG-13区より検出された土坑である。平面形は円形を呈する。検出径約1.6m、深さ約0.2mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。埋土が共通であることから、上層の水田耕土層から掘り込まれていると推測されるため、本来の深さは1mを超えるものであつただろう。

SK55

遺構 (fig.101) AG-12・13区より検出された土坑である。平面形は円形を呈する。検出径約1.5m、深さ約0.4mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。埋土が共通であることから、上層の水田耕土層から掘り込まれていると推測されるため、本来の深さは1mを超えるものであつただろう。

SK580

遺構 (fig.101) P-13・14区より検出された土坑である。平面形は円形を呈する。検出径約1.8m、深さ約0.4mを測る。遺構壁面は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。埋土が共通であることから、上層の水田耕土層から掘り込まれていると推測されるため、本来の深さは1mを超えるものであつただろう。遺構内部より木製桶の底部が出土している。桶の径は約1.1mであり、SK580が本来この桶を据えるための掘方であったことを窺わせる。

第7項 包含層出土の遺物

第1節で詳述した基本層序の第III層より出土した遺物を暗褐色シルト層出土、第IV層より出土した遺物を黒褐色シルト層出土として取上げた。出土遺物のうち土器4点、石器4点、銅鏡1点について報告する。

(1) 暗褐色シルト層

出土土器 (fig.102)

弥生土器台付鉢 1は脚部上端と鉢底部のみ残存し、脚部には多数の円形透しを施す。内外面ヘラミガキを施す。

大和III様式のものである。

瓦質土器浅鉢 2は屈曲する体部と面を持つ口縁部を有する。外面には菊花状の大型単体スタンプを2つ施文する。内外面表面劣化のため調整等は不明で、内面は被熱の痕跡を有する。14世紀半ば～15世紀前半のものである。

出土石器 (fig.103)

石鎚 2は凹基式の石鎚である。調整は折損やガジリのため一部不明の箇所があるが、基部は背面側を側辺部は腹面側を最終調整する。背腹両面に素材面を残す。3は石鎚鋒片

である。基部を欠損しているため、全体の形状は不明であるが、先端部の形状から、凸基II式になると考えられる。背面側に丁寧な押圧剥離を施し、素材面を残さないが、腹面側には大きく素材面を残す。調整は腹面側を調整した後、背面側を反時計回りに調整する。4は凹基式の石鎚である。背腹両面に丁寧な押圧剥離を施し、素材面を残さない。調整は腹面側を最終調整するが、基底部は脚部を調整したのち、中央に大きな剥離を施することで、深い抉りを作り出す。

出土銅銭 (fig.103)

5は銅銭である。誘化により外周を欠損しているが概ね完形である。表面の文字より宋銭「政和通寶」(初鑄年A.D.1111)であることがわかる。

(2) 黒褐色シルト層

出土土器 (fig.102)

弥生土器壺 3は口縁部から肩部が残存する。「T」字状の口縁部を有し、口縁外縁部には一条の凹線を有する。体部から頸部外面には縱方向のハケ調整を、内面ナデ調整を施す。

瓦質土器釜 4は体部の一部と鉗が残存する。鉗は若干上向きに貼り付けられ、外面板状工具によるナデ調整、内面横方向のハケ調整を施す。外面鉗下面には煤が付着する。

出土石器 (fig.103)

1はサヌカイト製のトロトロ石器である。側辺は脚部に向かって開き、先端が尖る形態である。基端部の抉りはやや弱い。背腹両面に素材面を留め、先端部と基部の一部に押圧剥離を施す。背腹両面の先端部と腹面側の体部の一部に著しい摩滅がみられ、稜線が不明瞭である。

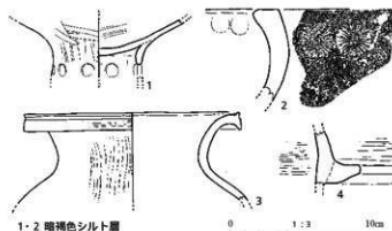


fig.102 包含層出土遺物 (1)

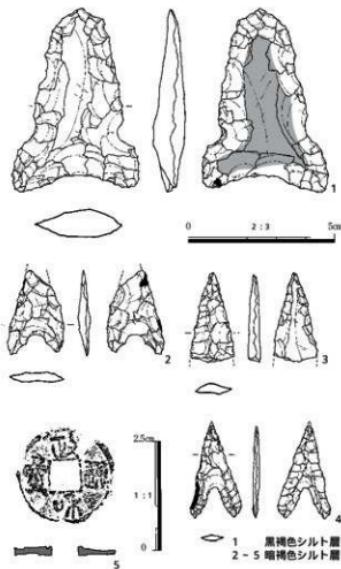


fig.103 包含層出土遺物 (2)

第3章 自然科学的分析の成果

はじめに

今回の分析調査は、曲川遺跡における弥生時代以降の調査区内の土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、弥生時代中期の堆積層について軟X線写真撮影観察を行い、合わせて珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。

第1節 調査地点の層序

分析調査は、調査区北壁に設定された基本層序地点（Loc.1）と中世以降の土坑SK659地点である。各地点の堆積層の累重状況および分析試料採取位置を発掘調査時の所見に基づいて、模式柱状図としてfig.104に示す。調査区内の現代耕作土より下位堆積層は、上位より1層から6層に区分されている。

第1項 調査区北壁

1層：灰褐色を呈する、みかけ上塊状をなす細礫・極粗粒～細粒砂混じりの粘土～シルトからなる。土壌構造が発達し、間隙・孔隙に画された集合体が確認される。層相から耕作土の可能性がある。

2層：Loc.1地点では暗灰色を呈するみかけ上塊状をなす細礫・極粗粒～細粒砂混じりの粘土～シルトからなる。土壌構造の発達が顕著であり、間隙・孔隙に画された粒団が確認される。また、腐植が集積する。砂粒を核として粒団が形成されており、粒団径は上方にかけて細粒化する。Loc.1東側のLoc.2・3では、本層と同時異相をなす、下に凸の外形をなす、葉理をなす砂礫とその下位に泥層が堆積する。これら泥層・砂礫層は、下位の埋没路埋積後の凹地を充填しており、それぞれ放棄流路および流路充填堆積物に比定される可能性がある。これらの層相から、2層は河川の流路から氾濫原の堆積環境で形成されたことが推定される。本層上面では大型土坑等、中世の遺構が確認されている。

3層：灰褐色を呈する。Loc.1ではみかけ上塊状をなす細礫・極粗粒～細粒砂混じりの粘土～シルトからなり、シルトの偽礫（ブロック土）が混入している。生物ないし人為の擾乱を受けており、土壌構造が発達する。Loc.1東側のLoc.2・3では、本層と同時異相をなす、下に凸の外形をなす、葉理をなす砂礫が堆積する。Loc.2・3の砂礫層は、層相から流路充填堆積物と判断され、Loc.1は河岸の堆積した氾濫堆積物と判断される。これらのことから、4層は流路から氾濫原の堆積環境で形成された堆積物であることが推定される。また、堆積時・後には土壌の形成が行われていたことがうかがえる。なお3層上面では、発掘調査の結果、弥生時代中期の遺構（方形周溝墓）が確認されている。

4層：Loc.2・3の3層形成期の流路により浸食されているベースの堆積物である。褐灰色を呈する、見かけ上塊状をなすシルトから極細粒砂質シルトからなる。上方粗粒化する。上部は生物擾乱を受けており、本層直上からの土壌形成があったことが示唆される。これらのことから、4層は氾濫原ないし後背湿地の堆積環境で形成された堆積物と推定される。本層の形成時期は、本層上面で弥生時代前期の遺構が検出されていることから、弥生時代前期頃と推定される。

5層：褐灰色を呈する、見かけ上塊状をなす極細粒砂質シルトからなる。生物擾乱を受けており、間隙・孔隙に画されたブロック土ないし粒団が確認される。後述する軟X線写真観察の結果、下部から上部にかけてブロック土から粒団への変化が確認されている。これらのことから、5層は土壌発達が行われる氾濫原ないし後背湿地の堆積環境で形成された堆積物と推定される。また、土壌構造は後述するように耕作地の土壌に類似する。

6層：灰色を呈するシルトから細粒・極細粒砂からなり、上方粗粒化する。下部で葉理構造が確認されるが、上

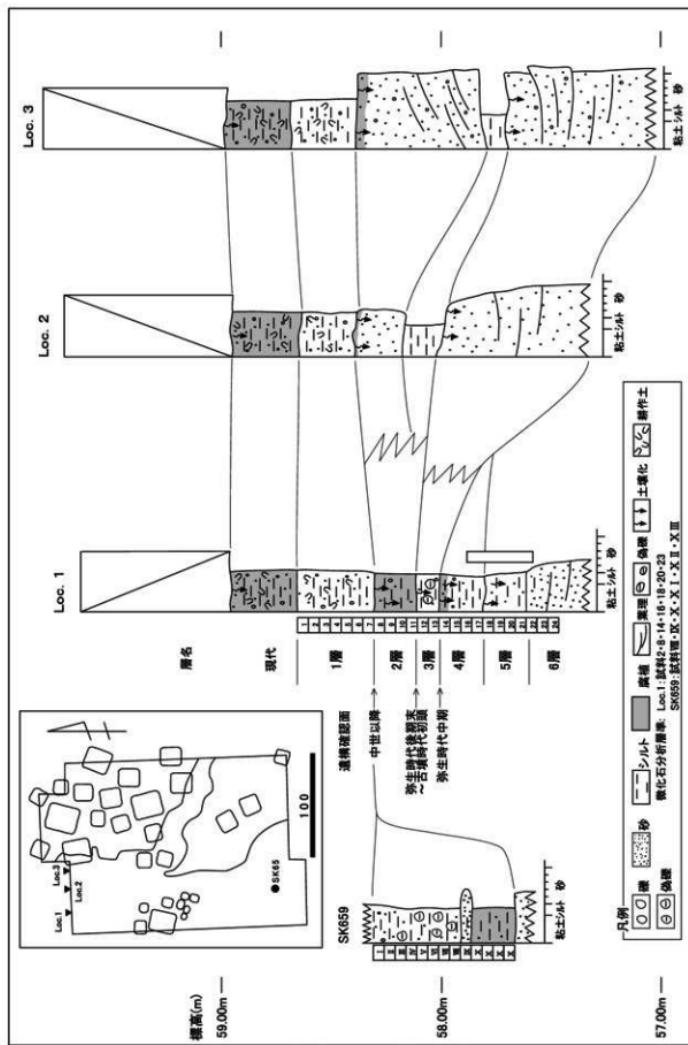


fig.104 調査地点の層序および試料採取位置

部は生物擾乱を受け不明瞭となる。本層も氾濫原の堆積環境で形成された可能性があるが、本層下面の外形が不明であるため、特定するに至らない。

第2項 SK 659

SK 659は、上述の2層上面に構築されている大型土坑である。本土坑の機能については不明であり、出土遺物から中世以降に構築されたことが確認されている。本土坑を埋積する堆積物は、上半部が砂質シルトないしシルトからなるブロック土を多く含む、極細粒砂質シルトからなる。人為的な埋め戻しなどの堆積物の可能性が高い。この直下にはシルト混じり細粒砂からなる層を挟在し、その下位に腐植に富む極細粒砂質泥からなる堆積物が堆積する。これらの堆積物は土坑機能期から放置期にかけて形成された堆積物の可能性が高い。

第2節 分析試料

微化石分析試料は、調査区北壁Loc.1とSK 659埋土断面より、発掘調査担当者により採取された（fig.104）。採取された試料の中から、Loc.1で試料2・8・14・16・18・20・23の5点、SK 659で試料VIII-XIIIの8点、合計13点について珪藻・花粉・植物珪酸体分析を実施する。

軟X線写真撮影試料は調査区北壁の4層下部から6層上部にかけて不擾乱資料として採取された。

第3節 分析方法

第1項 軟X線写真撮影観察

採取した不擾乱試料は、厚さ1cmまで板状に成形し、浸潤状態のまま、管電圧50kvp、電流3mA、照射時間270秒のX線強度条件において軟X線写真撮影を実施した。撮影は元興寺文化財研究所の協力を得た。

軟X線写真的記載は、堆積物について宮田ほか（1990）、土壌について佐藤（1990a・b）、森ほか（1992）、成岡（1993）などを参考とした。以下に各試料で認められた特徴を記載する。

第2項 硅藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上を同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能力についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堤内（1991）、汚濁耐性については、Asai & Wata-nabe（1995）の環境指標種を参考とする。

第3項 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化・篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

第4項 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由來した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から農耕について検討するために、植物珪酸体群集の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

第4節 結果

第1項 軟X線写真

試料の軟X線写真、土壤構造および層理・葉理のトレースをfig.105に示す。

5層は垂直断面で、上位層に向かって、砂マトリクスをともなう泥ブロックから粒団へと変化する。また、その構造の単位が細粒化することも確認される。トレース図のL層準は、おもに淘汰が悪く、角-亜角でブロック状の形をなす最大粒径1cm程度の、極細粒砂質泥堆積物からなるブロック土が認められる。下位の6層とは比較的明瞭な線状の境界をなす。U層準では、下部で亜角よりさらに角とのとれたブロック土ないし粒団の層が認められ、上部では2mm以下の細粒な粒団がほぼ均質に分布する。粒団は円-亜円状で、主に泥からなる。

この粒団の上位に4層が累重する。5層と4層の層界は明瞭である。4層は、主に泥からなり、上部で砂が混じる。全体的に上位から伸びる植物根痕により擾乱されており、構造を把握しにくい状況にあるが、下部は不明瞭ながらも横方向に断続的に連続する葉理状の構造が確認される。上部は角-亜角でブロック状の形をなすブロック土からなる構造が確認される。

第2項 珪藻分析

結果をtab.3、fig.106に示す。Loc.1は、試料2を除いて珪藻化石の産出が少ない。SK 659は、試料VIII-XIから堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出したが、試料XII、XIIIは少ない。産出した試料の完形殻の出現率は、40%前後で化石の保存状態は良好ではない。産出分類群数は、合計で24属88分類群である。以下、地点別に述べる。